12

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

正則なる組織 懇切なる教授 平易なる文章 低廉なる會費

（これ本會發行「正則中學講義錄」の有する特長なり）

今春、通信學會空前の大刷新を加へたる『正則中學講義錄』は、こゝに第壹學期の講習を終へ第八回新學期を開始す。各期新に皆第壹號より發行し、此際入會者には入會金全免の特典を與ふ、見本及規則書は申込次第郵送すべし

斯くの如き入會の好機は半歳の後に非ざれば再び來らず

世に中學講義錄と稱するもの多し。只、最も正則なる組織の下に極めて懇切なる教授を受けんとする青年に向つて、本會講義錄を薦む。



▲本會講師は多年中等教育に甚深の經驗を積まれたる斯道の名流にして新式の教授法に據り親切懇篤に講述す
▲卒業貳ヶ年半、之を五學期に分ち、一學期六ヶ月を以て中學校一學年を完全に修了せしむる正則の組織にして文部省中學校令と少しも戻る所なきは本會の信ずる所也
▲毎月一回青年大雜誌『新國民』を發行し本會々員に限り毎號無料にて進呈するものとす
▲本會の會費は最も低廉にして又貸費生特待生の特典あり

東京市駿河臺（電話本局三千四番）
大日本國民中學會

學習院教授　福井久藏新著

教育並に學術上より見たる

日本文法史

菊判　約四百五十頁
定價壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

輓近假名遣法が朝野の大問題となり數年に亘りて尙ほ解決せざるは何故なるか。送假名及び句讀法が十數年同一の說を繰り返して未だ一定せざるは何故なるか。中學校師範學校等に於ける文典が趣味なく實用に乏しくして而かも論理的思想をも鍛練するに至らざるは何故なるか。此等の教科書及び參考書が甲乙互に術語を異にし所說互に相反撥し學ぶ輩をして徒ちに適從に迷はしむるが如きは實に斯道の弊竇ならずや。此等の重要問題の解決せざるは實に國家教育上の一大缺陷なりといふべし顧ふに如上の問題を解決せんには須らく文法史の攻究を必とすべし本書は之が要求に對し多少の參考となるべきを期す蓋し本邦文法史は實にこの書を以て嚆矢とす。其紙數は四百頁に餘れる大册にして【總論】には教育並に學術上より文法史の必要なる所以を論し實地教授上の目的と方法とを詳述し【本論】は維新前後の二篇をなし上篇には假名遣、活語、天爾遠波等の數章に分ちその發達起原を論じ下篇には維新後三十九年間の語學文法等の狀況を說き著作を擧げ斯道に貢獻せし人士の肖像並に筆蹟を載せ【附錄】には獨逸文法教授史の梗概を說き又五百に近き術語の字引を添へ又古より今日に至る文典、口語法、假名遣等の年表を揭げ慶長より明治三十九年に至る間の外國人の日本語研究年表を載せたれば斯道の學者教育者檢定受檢者等の坐右に缺くへからざる良書なり伏して江湖の淸鑑を請ふ

發行所　東京市京橋區銀座一丁目（振替貯金口座二一九番）
大阪市東區北久太郎町四丁目（振替貯金口座二八六四番）
大日本圖書株式會社

中央公論

一月一日
發行

新年號豫告

本誌の發刊以來、年を閱すること二十有二、號を重ぬること二百二十有五。常に穩健平正の見を秉て社會百般の事物を論議し。假令些かたりとも國運の伸長を資け、文物の發展を促さんとするの微衷、漸やく江湖の識認する處となり、論壇文壇に於ける第一流の名士大家、或は其卓說高論を、或は其佳什名作を寄贈せらるゝことを吝しまれず、年を趁うて號を趁うて誌面益々光彩の陸離たるものある吾人の感謝するを禁ずる能はざる所也。而して來るべき戊申の歲に於ては社員一層奮勵して此江湖の眷遇の厚きに酬いんとす。已に寄稿を依賴したる大家名士は

公論

德富蘇峯　池邊吉太郎
三宅雪嶺　藤井健次郎
金子筑水　志賀矧川
山路愛山　松井柏軒

小說

國木田獨步　田山花袋
小栗風葉　眞山青果

の諸氏にして其他說苑、詞藻、雜俎等の諸欄に於ても有益多趣味なる記事を滿載すべく、殊に從來の海外新潮、海內思潮の體裁を一變して材料の精選を嚴にし、評論、文藝時觀の二欄を擴張して社員縱橫の筆鋒を振ひ、以て誌面一層の發展、刷新を期しつゝあり。乞ふ刮目して如何なる進步改良を事實の上に顯はすかを俟て。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



正則なる組織　懇切なる教授　平易なる文章　低廉なる會費

（これ本會發行「正則中學講義錄」の有する特長なり）

今春、通信學會空前の大刷新を加へたる『正則中學講義錄』は、こゝに第壹學期の講習を終へ第八回新學期を開始す。各期新に皆第壹號より發行し、此際入會者には入會金全免の特典を與ふ、見本及規則書は申込次第郵送すべし

斯くの如き入會の好機は半歳の後に非ざれば再び來らす

世に中學講義錄と稱するもの多し。只、最も正則なる組織の下に極めて懇切なる教授を受けんとする青年に向つて、本會講義錄を薦む。

▲本會講師は多年中等教育に甚深の經驗を積まれたる斯道の名流にして新式の教授法に據り親切懇篤に講述す

▲卒業弐ヶ年半、之を五學期に分ち、一學期六ケ月を以て中學校一學年を完全に修了せしむる正則の組織にして文部省中學校令と少しも戻る所なきは本會の信ずる所也

▲毎月一回青年大雜誌『新國民』を發行し本會々員に限り毎號無料にて進呈するものとす

▲本會の會費は最も低廉にして又貸費生特待生の特典あり

東京市駿河臺
（電話本局三千四百番）

大日本國民中學會



中央公論第二十二年第十二號目次



第二十二年
第十二號
（第二百二十五號）

米國の野心

（一）

曩きに米國々務卿タフト氏來朝し、我が朝野を擧げて其の歡迎に餘念なきや、之を嘲けるもの以爲らく『米國は實に日本と戰ふ心なし、然れども武力を以て日本を壓せんとする意向や顯然たり、其の艦隊の主力を東洋に集中せしめんとし、更らに鋭意して海軍擴張に努むる亦之がためのみ、而して其の日本を壓せんとするは、北清に於ける關外鐵道を基點とし、之を以て蒙古を貫徹して遙かに莫斯科及び伯林に通ぜしめ、巴奈馬運河の開鑿と相俟つて世界の最便最短線を獨占し、以て歐亞貿易に覇を稱せんとする目的に外ならず、此がため日本の南滿洲に於ける利權を剝奪し、南滿洲鐵道を失敗せしめんとすべく、此の目的のため露獨と協商して日本を威壓する必要あり、タフト卿がマニラより浦鹽斯德線を取て露獨

兩政府を訪問する眞意實に玆に存す、ルーズベルト及びタフト氏等の規畫の雄大なる想ふべし、我が官民之を察せず、徒らに歡迎に遑あらざらんとするは、短見嗤ふに堪えたり」と

神經過敏なる今の我が國民中、或は此の說に驚ろくもの絕無とす可らず、今に於て其の眞僞を評量する決して無要ならじ

吾人の見を以てすれば、嘲けるもの丶說悉く肯綮に當らず

（二）

秦皇島附近を基點とし、張家口北京を經て內外蒙古を一串し、以て遙かに莫斯科に達する鐵道を布設せんとは、或は露國政事家の一部の志望なるべし、唯だ長春以南大連に出づる要衝を失へる後の露國は、浦鹽斯德の經營を捨て丶、蒙古より北京、秦皇島に出るを利とすべきや否や、浦鹽斯德の經營成り、西伯利亞の開拓其の緖に就きて、而して尙ほ餘力の東亞に用ゆべきものあらば、彼れや必らず蒙古より北京秦皇島に進出することを企つべし、浦鹽斯德の經營と西伯利亞の開拓との成らざる間、彼れは斷じて斯の如き計畫に出でず、否、出でざるに非ず、能はざる也、記せよ、露國は今正さに東亞經營の資力に窮して、浦鹽斯德、哈爾賓共に衰容を來さんとするの窮途に立てることを。

露國若し眞に西伯利亞開拓と浦鹽斯德の經營に銳意せば、蒙古鐵道を一種の競爭線と視るべきこと、猶ほ南滿洲鐵道と多く差違なき筈なり、乃ち米國其の一手を以て秦皇島より蒙古一串の鐵道を布設すと假定するも、露國は寧ろ之を妨止すべく、斷じて歡迎する筈なき理なり

米國は其の殆んど製産過多となれる鐵軌、機關車、客車等の販路を開くがため、有らゆる鐵道の布設を歡迎すべく、蒙古鐵道の如きも商略上卒先して之を慫慂すべし、而かも自から其の資本を供給するとは頗ぶる躊躇せざるを得べし、蒙古鐵道の果して十分の利益あるとの確實なるや否やは、未だ容易に判斷し得ざれば也

（三）

米國商工業の中心點は勿論太西洋岸の紐育市にあり、否、米國の商業機關の中心は實に紐育市にあり、故に米國にして眞に露獨兩國と商取引を爲さんとせば、太西洋を横斷して漢堡線に出るを最捷路とす、假令巴奈馬運河開通するも、紐育より此の運河を經て太平洋に出で、秦皇島を經て蒙古鐵道に出るが如き最迂遠の線路を取るの理由あらず、勿論日本、マニラ、清國等と商取引を爲すには、太平洋より地中海を經、若くは喜望峯を迂回して印度洋を通過するよりも、巴奈馬運河を經て太平洋航路を執るの近く且つ便なると辯を俟たずと雖も、露(西伯利亞は別)獨兩國と取引するに、太平洋を經由するが如き迂は斷じて爲さず、彼の説者は殆んど世界の現狀態を度外に措きて徒らに空想に趨るもの乎

（四）

或は米國の東亞貿易に於て主とする所、西伯利亞に在りとする乎、是れ一半肯綮を得たるもの也、露國眞に東亞に覇を稱せんとせば、其の武力に由るに非ずして、寧ろ西伯利亞を開拓して其の富力に由るの智にして且つ正しきや言を俟たず、乃ち露國の將來鋭意極力すべき所は、必らずや西伯利亞開拓と浦

盧斯德經營とならん、米國の如き亦茲に着眼して大に其の販路を茲に開かんとすると言を俟たざるべし

然れども米國は西伯利亞に供給するに何物を以てせんとする乎、衣服、時計、其の他日常の雜貨は、日本又は獨逸より廉價に供給すると至難ならん、假令多少競爭の餘地ありとするも、日本と獨逸とを壓倒して、其の一手に獨占するとは幾んど不可能ならん、麥粉は露本國及び北滿洲より之を供給すべく、米國麥粉は、多少浸略の餘地ありとも、到底獨占の望みなし、鐵軌、機關車、貨車、客車を始め、鑛山及び開墾用の諸機械は、頗ぶる有望なりと雖も、獨逸と激烈なる競爭を爲さゞるを得ざるべし、棉絲棉花は假令印度及び日本との競爭を免かれざるも、頗ぶる好都合ならん、酒、煙草、砂糖も亦好望なるものに屬すべし、即ち米國の西伯利亞貿易は總てに於て獨占を望み得ざるも、多少の希望を屬するに足るや勿論也、唯だ驚ろくべき高率の關税をば如何にして免かれんとする乎、幸ひに露國悟る所あり、西伯利亞開拓の要旨は廉價なる貨物を吸集するがため、關税を全廢し若くは大に減少するに在るを知りて之を實行せば、彼我の利便之に優さるものなしと雖も、露國が依然として露國人と露國品とによつて開拓を成すの見を執持する限り、總ての西伯利亞貿易は甚だ望みなく、米國と雖も亦然らざる能はず、知らずタフト卿は此の點に於て露國と特別の商議を爲すや否や、米國艦隊のため浦鹽斯德の軍港を借用すといふが如き奇說よりも、米國品のため浦鹽斯德の開放を懇請するの智にして且つ適當なる、恐らくば思慮ある米國民の一般に希望する所なるべし

（五）

米國の煙草トラストが、清國に於て我が三井物產會社を壓倒して日本政府製造の煙草を驅逐し、英國煙草を排斥して、殆んど清國市場を獨占したる技倆は賞するに餘りあり、彼れ四億の清國民を相手にして、多くの商利を壟斷し得るか、其の麥粉、諸器械、棉布等に取ては、清國は實に大なる市場也、英獨日及び印度と競爭を免かれざる論莫きも、而かも競爭の餘地は十二分に在り、此の清國(殊に南清)を始め、西伯利亞及び日韓の兩國も亦多少米國品の市場たり、米國民が太平洋を以て我が湖水と做し、其のマニラ經營に多大の損耗を重ぬるも厭ふの色なきは、畢竟東亞の市場を開拓し、其の一種のステーションと爲すに外ならず

斯る目的のため、米國の官民が鋭意努力すべきとは吾人と雖も認識せざる能はず、ルーズベルド、タフトの諸氏眞に雄大なる經綸あらば、茲に施設する所あるべきや當然のみ、隨つて巴奈馬運河の開通を必要とする亦瞭然たり、然るも此の經綸あるがため、巴奈馬運河の開通を好機とし、秦皇島より蒙古を經て、遠く莫斯科、伯林に通ずる最捷路と爲さんとすといふが如きは、實に不通の論也、然り、地勢を無視したる架空論のみ

（六）

米國が南滿洲に於て日本の獨占を悦ばざることは事實なるべし、而して是れ至當也、米國は啻に南滿洲に限らず、又日本一國に限らず、東亞孰れの處に於ても、孰れの國にても、利權を獨占するとを欲せざるべし、唯だ日本の韓國に屬する宗主權の如き、之を承認せざるとを得ずして承認したりと雖も、而

かも韓國に於ける商工業に於て機會均等主義を支持して一歩も之を枉げざるべし

之と齊しく、南滿洲に於て、日本の有する旅順大連の租借權と其の行政と、並びに南滿洲鐵道の所有權管理權を承認すと雖も、其の商工業の機會均等主義は寸分たりとも之を失墜するとを欲せざるべし

我が日本はポウツマス條約に於て、既に南滿洲に於ける機會均等主義を執るとを聲明し宣約したりしに非ずや、露國も亦北滿洲に於て爾くせしに非ずや、露國と雖も、唯だ一片の空言として斯くせしには非ざらん、我が日本亦之を以て列國を欺瞞するものに非ず、條約上我が保留すべき權利の外は、商工業に於て總て機會均等主義を支持して誠實に之を履行せんとを期するは、是れ我が日本の義務にして又德義ならずや、唯だ大連旅順の租借と統治とに於て、南滿洲鐵道及び附近の鑛山を管理し經營するに於て、我れ聊か優勝の地步を占め得べきも、而かも必らず他の一切の商工業上の利權を獨占し壟斷せんと欲するとなく、列國民と齊しく機會均等主義に均霑して彼我の間に厚薄の差異を立てず、彼の滿洲經營といふを以て、恰かも滿洲占略の如く解するは、幼穉なる土地侵略の舊夢を擺脫せざる俗見のみ

旅順大連の租借と南滿洲鐵道の所有とを承認したる米國にして、今乃ち如何ぞ之を沮止するの理あらんや、之を沮止して米國に何等の利益ありや、日本能く大連旅順に由りて其の平和を支持し、南滿洲鐵道を巧みに管理して、此の地方の開放を謀らば、其の結果は列國商工業の利たると大也、而して此の大なる利益を享受するもの獨り日本國民に止まらず、機會均等主義の支持せらるゝ間、列國民皆之に均霑す、米國の官民如何ぞ之を察知せざるの理あらんや

（七）

如何なる國家と雖も、崇高なる理想と宏遠なる目的とを有せざる可らず、米國政事家假令概して卑俗なりとも、近時モンロー主義を一擲して頗ぶる衒氣の俗臭を佩ぶるに至りしとは雖も、尙ほ多少の抱負なきに非ず、唯だ或るものゝ所謂巴奈馬運河の開通を機會に、蒙古鐵道布設を企て、之に由て日本を威壓し、南滿州に於ける日本の利權を奪ふが如き野心なきのみ

夫れ滿洲開放は日露兩國の共に聲明し宣約せる所にして、又列國の希望たり、我が同盟國たる英國と雖も、日本に與みするがために之に反するを得ず、況んや獨逸米國をや、米國が滿洲開放を希望するを以て恰かも日本を憎むものゝ如くに言做すは誣妄也

徳川家康と石田三成

（一）

我が同業『日本及日本人』は諸名士より其の好める及び好まざる史的人物の指定を求め、之を天長節號に發表し、而して世は少からざる趣味を以て之を歡迎したりき。

諸名士の指定によれば、我が日本の史的人物中、最も嫌はれたるは徳川家康にして、最も好まれたるは豐臣秀吉也、家康と對照して殊に興あるは、石田三成にして、好むもの十餘人、好まざるもの十人を示し

聊かながら好げもの丶稍々多數なるは注目すべし、且つ朝吹英二氏は多く三成に同情するの極、畿内の某寺中に於て古墳を發掘して三成の遺骨なるものを見出し、其のため殊に大法會を營み、而して史論家と評せられたる山路愛山氏も亦國民新聞に於て三成の人物を賞揚するに餘力を剩さゞりき、家康が頗に憎惡の焦點と爲らんとするに反して、三成が幾んど近時流行の寵兒とならんとするが如き、畢竟根抵なき一時の流行說に過ぎざるべきも、斯る不健全なる思潮は一應之を阻止し置くと必らずしも無用ならじ、近時平凡を厭ふて奇矯を衒ふの俗幾んど滔々として風を爲さんとする傾向あると頗ぶる好ましからざれば也。

（二）

世人の家康を嫌ふ一の理由は之を卑吝なりしとするに在り、家康は質素を尙び儉約を重んじて、豪華驕奢を惜むと蛇蝎よりも甚だしかりき、常に麥飯を喫し、粗糲を口にし、妻子を戒めて粗食粗衣に甘んぜしめたりき、去れば桃山式の豪華を衒へる當時に在て、彼や一個の守錢奴視せられしも無理ならず、且つ一代の行事概して質實にして曾て奇變萬千の壯觀なかりし一事も、亦彼を目して卑吝翁と爲さしむる一因なるべし、然れども思へ、彼れの兵馬は何故に精强なりしや、彼れ三河武士を旗本とし、甲州侍海道武士を一團として陣頭に臨めば、天下之に敵するもの無かりしは何ぞ、此等天下の精銳なる諸武人の死心を得て德望無双なりしは何ぞ、嗚呼是れ守錢奴卑吝翁の善く爲し得べき所とする乎、

細川忠興曾て黃金に窮し、將さに士人の面目を毀傷せざるを得ざらんとするや、彼れ密かに贈遺して之を救ひき、忠興泣て其の厚誼を感謝し、終生之に戻らざるを心に誓へりといふ、彼れ卑吝にして果して之

を善くしたりしとする乎。

秀吉は素より豪爽絶倫の英傑なりき、兵革未だ全く收まらず、百姓尙ほ溝壑の苦を脫せざるに方つて、早くも金璧煌耀の宮殿を作り、花の如き美人を盛粧せしめて以て一代の豪華を極めたりき、其の死して後なき果して當然なりとせざらんや、其の情に任せて驕傲なりしを悅び、却て堅忍質實なりし家康を惜む、果して何の心ぞや、今や泰平僅かに四十年、辛ふじて露國に勝ちたるがため、早くも驕泰自から節するを忘れんとす、淺薄なる哉。

（三）

世人の家康を憎む最大理由は、權謀術數を以て豐臣氏を亡ぼせりといふに在り、鰥寡孤兒を欺きて天下を取れりといふに在り。

秀吉不世出の資を以て天下を統一するや、磊々たる雄心尙ほ止まず、晩年更に朝鮮を取り明國を滅し、日本を其の嗣子に讓り、天子を奉じて自から大陸を統御せんと企て、大軍を朝鮮に出して明兵を攻伐したりき、然かも明兵多くして容易に勝つ能はず、且つ海路を阻害せられて兵馬物資の後續意の如き能はず、徒らに大兵を外に曝すと多年、中途自から死して之を收拾する能はざりき、夫れナポレオン大帝は『日本及日本人』に其の好不好の史的人物を指示したる諸名士が、武を瀆したるものとして多く排斥したる所のもの也、然るも彼れは歐洲を統一して文明の進步を强行すべき理想を有したりき、多くの學者を網羅して進步したる學說に憑據し、諸制度の更革を計畫して、現に所謂ナポレオン法典を大成したるが如き其の一

也、秀吉に至ては曾て斯る理想だに有らざりき。

秀吉の將さに死せんとするや、在韓軍の收拾に苦悶すること甚だしく、擧げて之を德川殿に懇請することを遺言したりき、彼れ乃ち此の難局を擔當し、頗ぶる其の慘狀に傷心したるなるべし、抑も應仁以降天下亂れて幾んど寧日なし、當時政事家として國を救ひ民を濟はんと欲せば、速かに泰平を求め、世を擧て泰山の安きに措かざる可からず、而して其の責任は秀吉の死後、上天子の信賴を受け、最大最富の諸侯として天下一半の重望を荷へる彼れ自身に歸せざる可らず、彼れ若し勇猛精進せず、屑々然悖々乎として腐儒の仁義に拘泥し、獨りを潔ふせんと欲して退嬰せば、天下果して如何なりしぞ、黑田如水の如き豪傑の一方に天下を覗ふあり、伊達政宗の如き俊物の陰に覇を稱せんとする所あり、殊に野心深くして而して諸豪傑に憎惡せらるゝ石田三成の如きあり、智勇辯力に於て互角なるもの互ひに相爭はゞ、天下再び麻の如く紊れて信長の世に出んとしたりし時の如くなるべし、是れ國を救ひ民を濟はんと欲する者の忍ぶ能はざる所ならずや。

家康は實に此の目的のため萬難を排して奮進したりしもの也、三成と關ヶ原に決戰して天下の向背を一擧に定めたりし也。

豐臣氏の寡婦孤兒にして、當時天下の大勢既に定まれるを知り、其の分を守つて堵に安んぜば、家康また安んじて之を愛撫したりしや論なし、然るに淀君の絕大なる虛榮心を抱持して己れ一ひは必らず天下を取らんと欲するあり、片桐且元の如き重厚の士と雖も、尙ほ陰忍して家康の老死するを俟たんとせしのみ

豐臣氏の天下と爲さんと欲する志は曾て渝る所なかりき、且つ關ヶ原の殘黨及び諸國浮浪の徒の大阪に入りて事を擧げしめんとするあり、家康若し死せば、大小諸侯の覇氣あり野心あるもの、亦大阪を口實として事を釀さんとす、國のため生民のため之を圖るに、大阪は實に禍機の伏在する中心たり、之を掃蕩するに非ざれば、天下の治平全く望む可らず。

是れ家康が大佛の鐘銘を口實として大阪に難題を吹掛け、且元と大阪方の奧女中とを操縱して以て大阪を挑發したりし所以ならずや、淀君と秀頼と孀婦孤兒といふと雖も、單純に平和且つ無邪氣なる孀婦孤兒には非ず、國と民との安否の如き寸毫だも念頭に措かず、偏へに大なる虛榮心に驅られて必らず一び天下を取らんとする驕婦也、驕兒也、國と民とのため禍根を芟除するが如く之を掃蕩すると斷じて已む可らざる也。

家康の志實に世を兵革より免れしめて、國と民とのため堅實なる平和を來さんと欲するに外ならず、一德川氏の私の利益名譽のために然かせしには非ず、其の天下を統一する亦天下を取つて我が物とするに非ず、實に堅實なる平和を齎らし得て、由て以て國と民とを救濟せんと欲せしのみ、彼れや斯くして幸ひに三百年の太平を啓き得たりき、日本の文明に貢獻し、國と民との福祉に資したること實に尠少に非ず、是れ豈一家一門の利益名譽のために天下を私するものゝ能くし得る所ならんや、史を讀むもの深く察せざる可らず。

家康は堅實、重厚、誠慤の人物として古今實に得易からず、其の平和を障害すべき禍根を芟除するがた

め、詐術數を用いたる洵に已むを得ざるに出づ、之を以て佞人奸物と做すが如きは、妄も亦甚だし。

（四）

石田三成を好愛するもの、先づ其の自から奉ずると甚だ薄くして而して士を待つの大に渥きを稱せざるなし、現に彼は己れの得たる俸祿の七八分を擧げて島左近を臣とし、常に自から障壁蕭條の間に晏如たりしといふ、是れ人間の美德にして頗ぶる人に悦ばるゝもの也、然れども思へ、少しく苛察に之を評すれば是れ王莽の恭謙士に下るの類ならざらんや、王莽にして若し早く卒せば、彼れ亦千載の下に好評嘖々たりしならん、三成若し一旦志を得ば、尙ほ果して永く斯の如くなるべきや否や。

（五）

三成は何がために關ヶ原戰を起したりしや、三成を好愛するものは、之を以て聊か秀吉宿昔の恩遇に酬ゆるがためなりとせり、然れども是れ史上の一疑問也。

三成にして眞に豐臣氏のために忠誠なるものならしめば、而して其の智惠才覺の逞しきと絕倫なるを以てせば、何故に秀吉生時に於て深く豐臣氏のために計らざりしぞ。

秀吉は不世出の豪傑なるも、尙ほ婦人のためには頗ぶる鼻の下を長くしたりしが如し、彼れが第一に苦めるは其の正妻北政所と愛妾淀君との確執なりき、北政所は賢にして且つ糟糠の妻たり、淀君は舊主信長の姪にして絕世の麗人也、而して又非凡の勝氣と才氣とありて最も秀吉の寵ずる所なりき、前者は其の親戚關係其の他によりて、淺野、加藤、福島等を黨與とし、後者は其の艶色と同氣相求むるとに由りて石田

を無二の味方とし、小西、長束等をも其の黨として、大奥に於ても、表面に於ても、始終相反目し相嘲罵したりき、兩黨派の爭鬪は秀吉の瞑せんと欲して瞑する能はざりし所にして、竟に家康に託するに其の仲裁を以てしたる程なりき、夫れ當時の俗、文勳を卑みて武勳を重んず、淺野、加藤、福島等の傲りて石田長束等の動もすれば輕侮せられしと論を俟たず、然るも石田の智を以てして而して眞に豐臣氏のために計らば、剛直餘りありて寧ろ戇愚なりし淺野、加藤、福島輩を籠罩する何ぞ甚だ難からんや、北政所をして其の鉾鋩を收めしめ、男女君臣一致して豐臣氏の千歳を計る何ぞ甚だ難からんや、而して三成之を爲さず却つて淀君をして其の妬悍を增長せしめたりしは何ぞや、剛骨能く加藤福島輩に屈するを潔しとせずといふか、果して然らば、豐臣氏に對して眞に忠誠己れを捨つるものと稱すべきか、豐臣氏のために一身を犧牲として大に家康と爭ふ程の忠誠あるも、竟に一度は加藤福島輩に屈し得ざりしと做す乎。

次に秀吉の養嗣子たりし秀次を構陷したりしものは、實に淀君にして而して北政所も亦同方針なりき、三成にして眞に豐臣氏のために計らば、何が故に秀次を輔導して完人たらしめ、秀吉に取做して以て百方之を救濟することを爲さゞりしや、秀次の行頗ぶる凶暴なりしと雖も、是れ諫めて止む可らざるものには非ず、殊に其の爲人剛邁にして英氣あり、三成等木村常陸等と心を合せて之を輔導せば、秀吉の死後、豐臣氏尙ほ甚だしく衰色を呈せざりしならん、故に智慮あり且つ豐臣氏に忠誠なるものは、先づ秀次を保存して以て豐臣氏に後あらしめんことを期せざる可らず、少くも鰥婦孤兒をして後を襲はしめざる計畫を立てざる可らず、然るに三成曾て爲す所なく、却つて淀君を助けて秀次構陷の計を助長す、其の心事果して豐臣

氏に誠忠なりや否やは實に疑はざる可らず。

三成が淀君と通じたるや否やは輕卒に信ずるを得ずと雖も、其の經歴を視るに豐臣氏に誠忠なるものなりや否や頗ぶる疑はし、少くも玆に擧げたる疑問を明白に解決せざる間は關ヶ原役を以て三成が故太閤の恩誼に酬ゆるものと斷言する能はず。

三成の交友にして、關ヶ原役に於て眞に死生相許したるは唯だ一の大谷吉隆あるのみ、毛利氏は反覆したり、島津氏は惡戰したるも尙ほ三成を罵るを能めざりき、淺野、加藤、福島等に至て、三成を殺て甘心せんがため、家康に屬して必死に奮戰したりき、三成の智は乃ち之あり、智人の常習は總て之を具備せり而して傲骨絶倫なるも之あり、唯だ誠忠の人としては多く擧ぐべきものあらざるは何ぞや、三成を好愛するもの唯だ其の智略と膽氣とを稱するとせば、何ぞ更らに由井正雪を推稱せざるや、德川氏の盛時に成れる歷史が多く三成を貶せしといふは或は當らん、然るも冠履顚倒といふは餘りに史實を無視する也、之を智膽兼備にして兼ねて豐臣氏に忠誠なるものと速斷するに至ては寧ろ稗に過ぐ、好んで異を立つるに過ぐ、幾んど輕薄兒に近き也。

公論

民尊官卑の趨勢

文學博士　建部遯吾

明治も早や四十年の星霜を經たり。その間に社會の風潮も少からず變遷推移しぬ。嘗ては官尊民卑の歎世に喧しかりしに、今は却て民尊官卑の實を指摘せざるべからざるの趨勢となれるなり。

今日民尊官卑の趨勢を云々するは、我が東京に於ける而も皮想の觀察者に取りては、或は稍意外に若くは大早計に感ぜらるゝやも知らねど、而も此の事たるや、暗默の間に社會大體の變遷上一の注目すべき事項たるを奈何にせん。

今日地方に於て先づ目に觸るゝものは、曩昔の縣令と現代の縣知事との、その位地、尊榮、聲望に於て、著しき差異を生じたる事なり。吾人の幼時に於ける縣令は昔の大名と並びて、實に非常なる尊榮を社會に擔ひたりしに、今日の縣知事は縣會議員又は地方の富豪に對しては、實際一目も二目も置かざるを得ざるなり。況や昔の大書記官に當る內務部長、少書記官に當る今の警務部長や、自餘の事務官の如きは寧ろ氣の毒なる位地に在るなり。勿論彼等が職權を帶びて事を下僚に命じ、又は町村自治體の監督に任ずるや、斷々乎として向ふ所披靡せざるなきの慨あるは事實なるも、之れ只彼等が官吏たるが故に然るなり。官吏の職權に伴ふ權威は固より容易に增減する事なしと雖も、吾人の茲に論ぜんと欲する彼等が社交上の位地の實に非常なる低落を示したるは爭ひ難き事實にして、その羽振りは今日殆ど地方に於ける中流以上の資產家の下風に立たざるを得ざるやの觀を呈せるなり。之を明治十年前後に、十七等出任月給十二圓など云ふ、今より見れば哂ふべき位地を、地方富豪連の爭ふて得んとしたる時代に比すれば實に今昔の感に堪えずと謂ふべし。

次に郡長などの位地も亦甚しく下落したり。昔は明治十二年に郡區改正の事ありて、明治四年以來の大區小區の制を改め、縣の下に郡を置き、郡役所を設け、其の長官たる郡長は概ね從前の數區を併せたる地域を支配したるにてその位地聲望は、高く士百姓素町人の上に表出し、宛然小藩主の如き慨ありしに、星移り物變りて、今や郡長の社會的位地の低落は、更に縣官のそれよりも甚しきもの有るなり。勿論郡内の町村に對して、彼等が正義と硬直とを以て、自個の職務を行ふの權威に於ては多く喪ふ處なしと雖も、彼等が社交上の位地は今や町村會議員の少しく資産あるものに對しても劣れるなり。

郡長既に然り。その他郡書記の如き、警察署長の輩は殆ど云ふに足らず。駐在巡査に到りては、僅に村役場の小使に比して聊か優れるもの有りと云ふに過ぎず。かの三尺の棍棒を脇にしたる時代邏卒時代より一轉して、新たに巡査の官名を得たる當初に、目新らしき洋服と靴と帽子と燦々たる腰間の帯劍とを以て、當時の田舍漢を慴伏せしめたるありし昔の威風に比すれば、今日の巡査は實に霄壤の差ありて、寧ろ氣の毒に堪えざる程なり。

地方官吏既に然り。されば彼等よりも常に低かりし教育家の位地の著しく低落を來せしは、寧ろ當然の事と云はざるべからず。師範學校長の位地が縣の學務課長より低く、事務官より低きは云ふ迄もなき事にて、寧ろ彼等が縣廳高等官と比較せらるゝ丈け、まだしもの幸福と云はざるべからず。而も彼等の上位に立つ縣の高等官の位地聲望既に上述の如しとすれば、師範學校長が今日地方の資産家に對して、到底社交上の敵にあらざるは固よりその處なり。さて彼の中學校長は、往々郡長に對してすら被監督者の位地に立つ事ある程なれば、從て其の社交上の位地の低きこと誠に情けなき程にて、かくの如く位地低き中學校長が、堂々たる縣會議員の子弟を教育するに當りて何等の威嚴をも有せざるは、固より怪むに足らず。况や小學教員の社會的位地に於てをや。小學校員は今日事實上町村に於け

る雇人の如き觀ありて、其の任免黜陟が一に町村の重立ちたる者の鼻息に倚繫（デペンドアッポン）するは又已むを得ざるなり。

夫れかくの如き狀態に於て教育の事務擧がるべしとせば、日本の教育も亦進歩したりと云ふべし。

此の際獨り卓然として位地の低落を示さゞるものは軍人なり。軍隊は其の體制に固有なる性質に據りて、小作人水呑百姓の伜も、又は村會議員の息子も、地方富豪の子弟も、尊むべき華族貴人の若樣も、皆一樣に一兵卒として聯隊に編入し、軍規、軍律、軍隊教育の主義を以て、之に臨み之を率ゐ、訓練抑制するものなるが故に、時勢の如何に係らず、變ずべからず越ゆべからざるの特性を有す。されば地方富豪の子弟も軍隊に於ては、その達し能ふ最上の位地、僅に一年志願兵たり得るに過ぎず。而も此の場合に於ては、常に三十一圓五十錢の月給を得つゝある正八位某少尉殿の爲めに、時としては殆ど土芥の如く叱睨せられざるべからざるなり。軍隊と町村社會との秩序今も昔も不變なるは、かゝる軍隊固有の特性に基く。中隊長、大隊長、又は聯隊長が、赫々たる武勳を以て次第に高められたる優勢の位地に據り、地方の社交舞臺に顯はるゝや、堂々たる威風實に四邊を拂ふものあり。況やその鏘々たるサーベルの響を以て、又は金色燦爛たる胸間の勳章を以て、之をかの中學校長が羊羹色のフロックコートに比し、小學教員が十年一裘の古禮服に比すれば、其の差違實に月鼈霄壤の喩にも過ぎたるものあるなり。

抑々斯くの如き民尊官卑の趨勢の由て來る處を考ふるに吾人は少くとも二個の源因に注目することを禁ずる能はず。

其の一は維新以來今日に到るまで、官位の尊重漸次に低下し來りたる事之れ也。維新の當初、總裁、參與、議定等の高官が大政を處理せし時代より、一轉して參議卿が政務を執掌したる當時に到るまで、國務大臣の官等は僅に從四位往々正五位を出でざりしが、明治十八年十二月、伊藤伯の官制改革ありて、内閣大臣には皆當時一流の元勳之に當りしかば、大臣の位階は一躍

して從二位となれり、後政黨内閣の當時より正三位從三位稀れに正四位の大臣さへ見たることもあれど、之れ單に内閣大臣に三位以下の人も當れりと云ふに過ぎずして、固より一般に正二位從二位等の高位を有する人の減少したるにはあらず。日清日露兩戰後、中央政府に於ける高位高爵の增加更に夥しく、從て地方高等官の如きも勢ひ位階を高うして其の釣り合を保たんとしたるが故に、一般に相當以上の高位を有する者の數愕くべき急劇の增加をなしたり。是に於てか物は數量の增大に逆比例して其の價格を減少すと云ふ經濟上の原則に準ひて、高位高爵の過多生產は著しく官位の難有味を減殺し來り、今日從三位の知事を見ることと往年從五位の縣令を見たるよりも遙に低きなり。

官吏尊重の源因をなす二要素、則ち俸給と官位とのうち、官位は今日殆ど彼等の重を爲す所以のものにあらずなれること、之も官吏の社會上の位地を低落せしめたる一源因とす。

次に第二の要素たる俸給に於ても、その名義上の總額は幾分か增加したるものあるに係らず、事實上の價格は著しく減少したり。是れ他なし、半面に於ける物價の急速なる騰貴、特に米價の限りなき騰貴ありしが故にして、之が爲に地方富豪の實收入著しく增進し來りて、地方に於ては最も高き俸給を受くる高等官も今日は到底町村中流の資產家と比肩すること能はず。明治二十年前後に於て、地價千圓を有する地主の純收入は六十五圓位なりしが、三十三年頃に至りては一躍約二百圓となり、今日に於ては地租增徵、非常特別稅率の永續等あるにも拘らず、諸賦課諸稅等を一切控除するも、猶優に三百圓に達せり。從て地方、中地主の有福なるものが相率ゐて都會に出て、消費散財する富の程度實に莫大に昂上して、之に比すれば俸給に衣食する官吏の生活が非常なる遜色あるは是非もなき事なり。例へば内務部長の最高俸給は二千五百圓にて、則ち僅かに地價八千圓内外を有する中地主に比肩し得るに過ぎず。而も地主の徒は概ね屋賃及飯米の費用を要せざるのみならず、肉類を除く外の食物、又は薪炭或は或

る種の傭役の如き計算に漏れたる收益尠からざるが故に官吏が受くる所の待遇は之に對照して愈々低くからざるを得ず、郡長の如きは能くも暮しを立て行くものかなと怪まるゝ程なり。宜なるかな彼等は赤十字社員入會の勸告に、しかく熱心に斡旋し、その夫人は愛國婦人會々員の募集に、しかく眞面目に奔走するも、（共に會員募集の數に應じて報酬あり）此の場合に於て、村長の妻君、三等郵便局長の内室等は一圓二圓の出費を吝みて郡長の歡心を害するもおもしろからずと云ふ考より、異議なく郡長夫人の求めに應ずるにて、そをしかせしむに足る丈けの社交的威嚴は今も猶郡長の手に存するものと云ふべし（！）。若し夫れ中學校長の俸給に至りては、今日僅かに地價三千圓内外を有する田舍人士と同等以下の收入を得るに過ぎず。小學校長の如きは通例年俸三百圓位なれば、小賣酒屋の老婆が收入に比しても猶劣れるなり。

　之を要するに物價の變動は、多少俸給令の改正ありしにも係らず、官吏が社會上の位地を低落せしめたる有力なる原因とす。

　かくの如く官吏は有形上到底社會に優勢の地歩を占むること能はざるなり。故に朝廷は夙に位記を以て社交上の名譽の表章たらしめんとしたるに、之れさへも今は漸く低落し來れり。況や素町人の標本的人物とても勳三等の恩典に浴し得ずとも限らず、堂々たる紳士がそれがために男爵運動の斡旋をしたりといふとも格別不思議にも感ぜられざるに於てをや。公器なる名爵も亦かくの如くにして次第にその價値を低落しつゝあるは官吏の地位の爲に益々遺憾なる次第と云ふべきか。

　要するに民尊官卑の趨勢は今日掩ふべからざる事實なり。されど吾人は官尊民卑の世に弊ありと云ふに對して、直ちに民尊官卑の趨勢も亦かくの如く弊ありと斷ずるものにはあらず。茲には只一言そが社會の進歩に伴ふ一事實と見るべきものあるを指摘するに止めんと欲す。かゝる趨勢の利害得失を論ずるは自ら別問題に屬すればなり。

然れども吾人は今日教育者の位地が斯くの如く非常に低落しつゝあるを見ては、慨歎せざるを得ざるなり。何となれば、彼の縣官郡長又は駐在巡査等の位地や、下落したるは下落したるに相違なきも、彼等が職務を行ふ權能は之れが爲に毫も地に墜ちたるにあらず、彼等の下落は單に社交上の方面に限られたるなり。

然るに翻て之れを教育家に見んか、渠等の職務は元來權威を以て行ふべき性質のものにあらず、故に社會上の位地の低落は則ち教育者が境遇の總ての低落たる也。加之他の一方に於て、軍人はその本來の性質上毫も民尊官卑の影響を受くること無きのみならず、日清日露戰後に於ける赫々たる武勳によりて、寧ろ著しく其の位地を高めたる今日、之を民尊官卑の趨勢に對する最も憫むべき犧牲たりし教育家の位地の低落に比し來れば、吾人は頗る極端なる對照（コントラスト）を感ぜざるを得ざる也。是に於てか渠等は汲々乎として、村會議員若くは町村の重立ちの鼻息を窺ひ、中學教師は、只管縣會議員の歡心を失はんことを之れ恐れ、その子弟の生徒たるもののストライキに戰々兢々とし、職を擲たんか、然らざれば彼等との苟合を破らざるべきか、二途一を選ばざるべからざるの境遇に立てり。かくの如き狀態に於て教育の實績果して擧ぐべしとなすか、我が國文部系統の一般教育が概して三太夫的教育の狀勢を免れざるは、想ふに之等の點に原因する事大なりと謂ふべし。

民尊官卑の趨勢にして若し弊害の指摘すべきもの有りとせば、其の第一は實に教育者の位地の低落にありと云はざるべからず。

此の際代議士の位地如何を考ふるは、頗る興味ある問題なりとす。代議士は本來の性質上、地方名望家の粹を拔ける者なるが故に、民尊官卑の影響は當然代議士が位地の上進たらざるべからず。然るに若し代議士諸君にして、かの獵官獵位に熱中し只管官位に接近するに腐心するあらんか、其の結果は當然反對たらざるを得ざるべし。代議士の候補者にして辯護士開業の廣告の如く、正五位勳四等何の某など云ふいかめしき肩書を掲げて民心を釣らんとするあらば、代議士の位地は

日を逐ふて下落するものと覺悟せざるべからず。

今日代議士の心事如何は吾人の知らざる處なりと雖も、我輩は民尊官卑の趨勢にして、若し我が社會發達の爲めに賀すべきもの有りとせば、少くとも代議士の位地の高上は其の第一たるべしと信ずる者なるが故に願くば我が代議士諸君が民間の選良たることを自覺し、飽くまでも自重自持、徒らに官位の接近に戀々たるが如き事なからんことを望まざるを得ざるなり。

以上の說は我が輩が直接に地方に就て觀察したる所にて、敢て日本全國の大勢を斷定したるにあらず、又民尊官卑の趨勢に對して社會の爲めに可否の判斷を下したるにもあらず。されど此の趨勢と此の原因とに就ては社會上の大變遷と認むべきもの有るが故に、敢て以て世上識者の注意を促すと云爾。（文責記者に在り）

今の臺閣文學

白河鯉洋

戯曲、小說、詩歌、文章、皆是れ上下貴賤を擧げて國民の總てが由りて以て怡樂と慰藉とを得るもの、之れを國民文學と稱し得べけん、されど人は其の位置階級によりて、或は其の活動の時間と餘裕の多少によりて、或は其の教育の成果によりて、或は其の集團的精神によりて、或は其の平生接觸する外圍の景光によりて或は其の共通する生理的狀態によりて、頗る趣味好尙を異にし來る、此に於てか文學も亦社會を縱斷橫斷して特殊主要の形式を擇び得、之を縱斷しては男子女流に二大別し得べく、之れを橫斷しては、宮廷文學あり、臺閣文學あり、江湖文學あり、市井文學あり、之れを我國古來の文學に徵すれば、宮廷は和歌、臺閣は漢詩、市井は俗謠、而して江湖は最も多趣多樣の人あるが故に其の文學も亦最も多方面なりとす。

漏れ聞く所によれば至尊最も和歌を好ませ給ひ、御

製既に數萬の多きに上らせ給ふと、皇后陛下の堪能にわたらせ給ふは蒼生の普ねく仰ぐ所なり、各皇族殿下皆各々千紫萬紅を競はせ給ひ、宮廷諸員亦皆其の追隨する所を知る、加ふるに古詩形に拘泥する高崎正風氏漸やく老ゐ、複雜なる新思想を高き新詩品に歌ひ出せる井上通泰氏の擧げ用ゐられたるあり、宮廷文學の旺盛にして兼ねて健全なる、誠に前古比なしといふべきか、而して江湖市井の文學皆亦昭代の惠に浴して日月と共に隆んなるを致す、今の世に於いて多少文藝の趣味を有せざるものは殆んど一人もなしといひうべく、プロフエツシヨナルの文藝家多きこと今の如きは、是れ亦古來未だ曾て有らざりし所といふべし、此くの如き文運隆盛のときに當りて獨り臺閣文學の少しも振はざるは大に怪しむべき哉。

固より政治思想の發展と官僚組織の變遷とに伴ひて、現代の臺閣は往古のと全く其の撰を異にするは事實なり、往古の臺閣は殆んど臺閣の一族を作ると雖も、現代にありては然らず、出でては大臣宰相たるも、退いては市井に牙籌を事とし江湖に耒耜を執るの一平民たるもののみ、即ち臺閣たるの一階級は既に消滅して、江湖市井の延長若しくは支派たるに過ぎず、されば此輩に對して別に臺閣文學なるものを望むは望むの愚なるが如しと雖も、既に王佐を以て國民に臨み、臺閣に據りて一世を蔽ふ以上、何等か江湖市井よりも一層雄大にして崇高なる趣味好尙あらんことは望むべからざるか、是れ必らずしも文藝の上よりのみにはあらず、其の政家的手腕と公人的品性より言ふも亦然りとすべけん。

今の時に於いて、自ら創作する能はずと雖も、其趣味好尙の高大無邊なる、眞に臺閣の氣象あるは大隈伯一人なるべく、此れに次ぎては春畝公ならん、春畝公の詩は時として江湖詩人の野趣あり、其の大を云ひ高きを言ふは屢々稚態と衒氣とあるを免れずと雖も、兎にも角にも臺閣の氣象を認められざるにあらず、時に詩人を集めて自ら之れに臨み盛んに聖代の太平と乃公の威德を吟ぜしむるが如きは、政治的意義に於いては

一笑に付すべしと雖も、臺閣文學の上より見れば亦一時の盛觀たるを失はず、藤隈二人は今の政界の大立物たると共に、又文藝に於いての二大巨人なるか、藤公に靑萍あり、大隈伯に木堂あり、其詩、其文、亦臺閣の小器たり、含雪公の詩に至りては、江湖にあらず、宰相にあらず、僅に軍人の文字を解するもの、決して臺閣に列ぬべからず。

臺閣の文學の氣象なき、あらず、文藝の趣味好尙だも之れなきは近來の閣臣より甚しきはあらず、前内閣に於いて曾根藏相、現内閣にありて陶菴首相、此二人稍之れを解するのみ、其餘皆俗吏的官人のみ、簿書堆裏に忙殺され、若しくは權謀術數にのみ焦慮して、何等文藝的餘裕を有せざるもののみ、吾人は重ねて言ふ、文藝的餘裕なきものは爲政家としても公人としても決して尊重するに足らず、偶々今の如き過渡時代に生れて政治的術策に於いてのみ長けたるが故に、幸に頭角を現はして遂に臺閣に入るを得たるのみ、他年社會が沈重堅實に歸するに至らば、其品性は寧ろ其の才能よりも重きを措かるべく、其の品性の大小高卑が全般公衆に知らるゝこと多くは文藝的作物に於いてせらるべきが故に、其の趣味好尙が臺閣の氣象ありや否やは必らず品隲せらるべき時あるを疑はず、而も近來の閣臣たり又たらんとするもの一併に皆之れを缺く、嘆ずべき哉、而して僅に之れを有する此二人すら、一人は俗謠に巧みに、一人は俳句を重んず、共に江湖市井の作のみ、決して臺閣の氣象にあらず、支那の詩經に見るが如き、江湖市井の作にして臺閣の氣品あるもの、之れを此の二人に望むべからず、蓋し彼等は片々たる小才子、時に作品の口を銜いて出づるありと雖も、全くクラシック的素養を缺如せるが爲め也、若しくは其人品性格決して臺閣に入るの器にあらざるか。

吾人は閣臣平生の事務が極めて俗的なるが故に、文藝的餘裕あらんことを切望し、其の位置の頗る高きが故に其の趣味の雄大崇高ならんを望み、其の事とする所の餘りに現實なるが故に其慰藉は之れをクラシックに求めんことを望む、而して此くの如き意義に於いて

漢詩を以て最も褒閑文學に適當なるものと認む、夫の片々たる小才子的小說家と會飲して嬉々たるが如きは、重厚てふ閣臣唯一の品性に見て遺憾なき能はざる也。

我海軍々人も亦大に到所に競技を試むべし

鎌田榮吉

今や體育の事は大に我邦人の注意を惹く樣になつて、中學以上の學校には至るところに體育部の設けがあり、擊劍、柔術、弓術、さてはローンテニス、ベースボール等色々の運動があり。互に腕を鍛えて、所々に競技を試むるといふ有樣である、その競技も啻に國内に於ける國人間のそれのみではなく、ベースボールの如きに至つては或は我より海外に行き、或は海外より我に來るとか、然らざるも在留外人と我學生との間に行ふとか、時と場所とを利して折々大仕掛の催しがある、今日のところでは到底我と彼とには、大に技に於て軒輊あるを免がれぬ樣には思ふが、それこれに係らず甚だ有益なる結果が伴ふ、從つて甚だ喜ばしき現象であると信ずる。

が競技の盛といふことは今日では未だ學生間でほかない、一般に行はれるとはいへない、私は之をば更に普及して如何なる階級、如何なる市人の間にも行はれしめたいと思ふ、その中でも先づ差當り之を海軍軍人間に流行せしめたいと思つて居る、運動は高尚なものである、純淨なものである、神聖なものである、一念之に集中する間は妄念霧の如くに消えて、胸天常に明鏡の如くに玲瓏である、海軍々人などはその職掌柄からして能く諸方に航海する、諸處に寄港する、從つて上陸する、人は無事を嫌ふものである、幾旬日の波枕雲海漂渺の平凡な眺めに倦んだ眼て、物賑かな綺羅びやかな都會に上るのだから、何等かの興趣を取つて慢まうとするのだが、之までの有樣て見ると、先づ多く

は酒樓に上つて口腹の慾を恣にする位が關の山で、果ては狂歌亂舞、往々にしてナイフを閃かすなどいふ失體をまで演ずる、斯ることは啻に身體に害毒を及ぼすのみでなく、その軍人たる品位を保つ上に於ても頗る顰蹙すべきものと思ふ、斯くは思ふもの丶欝屈せる胸懐の他に洩すべき策がないとすれば之とて據ないことであろう、すれば唯之が惡いと責むるばかりではいけぬ、何等か此處に施すべき、即ちその欝屈せる胸懐を他に向つて開かしむる方法がなければいかぬ。

私は此方法としては運動を以て一番宜いと思ふ、人には誰にも競爭心がある、若し此運動に一念を凝し、寄港する先々を待ち遠しい位に思つて、上陸したらば直に百千錬磨の怪腕を試みてその地の健兒と雌雄を決せやうと、斯樣な意氣込で陸地を見る、その陸地は極めて純淨な空氣の充ちた、活潑な精神の溢れた處てあろう、上るや否や直に競技の準備をする、軈て當日となつては滿都の士女を集めた曠れの舞臺に全日本の壯丁を代表した心得て龍騰虎鬪の活躍を試むる、その心事は如何であろう、漫然双手を拱つて街頭を迷ひ、所作無げに漫然青樓に上つて酒杯を呼ぶに比すれば、啻に事の高雅と野卑との差のみではなく、興趣の多少に如何ばかりの軒輊があるであろうか、又斯丶る際には如何なる心の罅隙を利して酒色に沈湎せんなどいふ下劣の感情が萌さうか、從つてナイフ騷ぎなどいふ不體裁にも遠かることが出來樣と思ふ。

唯運動といふのだ、唯競技といふのだ、運動といふには種類が多い、前にも擧げた樣な擊劍、柔術、弓術ローンテニス、ベースボール皆その中に含まれるので孰れを是とし孰れを非としやうといふてはない、自己の長ずるところ、自己の好むところの技を何處て試み何處て發揮しても差支ないのではあるが、成る事ならば多人數組むで大仕懸に出來る運動を宜いと思ふ、廣場に多人數を集めて、多人數に滿足を得しめる樣な競技を面白いと思ふ、此意味に於て私は今日のところではベースボールを第一に推すのである、

ベースボールは米國では國家的遊戲(ナショナルゲーム)となつて居る、

最早や誰も知つて居る通り、多人數が一組をなして、敵と代り合ひ、互に攻勢を取つたり守勢を取つたりする、それ故味方の共同一致といふ事が非常に必要である、各個人が如何に技に於て特有の長所があつたとしても、全體の調和といふものを考へなければ破れる、此點に於て頗る團結心を長ぜしめる、共同生活の要旨を會得せしめて國家に忠實なるものとならしめる、又個人としては能く分を守り責任を重んぜねばならぬ、此點に於ては亦社會の一員としての個人的生活の心得を敎える。之と同時に敵に對しては決して穢い卑法未練な行爲を見せまいと心懸ける、此等が冥々裡に非常に精神的敎育の上に影響を及ぼすもので、操志の堅實な、品性の高尚な人間を作ることになる、更にベースボールには審判といふものがある、勝敗の決は一に此審判者の語によるのだから、勢、審判者の語を重んぜねばならぬことになる、之が又我々に取つては頗る宜き訓練といはねばならぬ、一體我々には、此審判を重んずるといふ精神が頗る缺けて居る、その爲他愛もない事迄も容易に歸着し得べきところに歸着せしめず、下らぬ處に力拳を入れ、訴訟沙汰に無用の財と無用の月日を消費することがある、之は甚だ厭ふべきことであるが、要するに自我を主張する念が強く、些末な點にまで意地を張りたがるその弊から來て居るのだ、ベースボールに於て審判者の語に服從する習慣を養ふことは、此ゝる紛爭を好む小規模の精神を撓むるに裨益があらうと思ふ、

人間は學問又は勞働のみで生存は出來ぬ、その間に遊戲といふものがなくては叶はぬ、勞働といふも遊戲といふも等く運動には相違ないが、勞働といへば一種の目的を有して運動する、遊戲といへば唯快を取るといふ以外に何等の目的なくして運動するだけの違がある、此快を取る以外には何等の目的のないといふ運動が是非人間には無くてはならぬのだ、既に無くてならぬとするならば如何なるものが最も有益無害であるかその最も可なるものを擇んで行はねばならぬ、昔の東洋流の敎育では、遊戲といへば早や惡の方の星を付け

る、それが甚だ誤つて居ることとて少からず教育上に妨害を與へて居る、我々はそれを打破せねばならぬ、それでなければ到底都人士の樣な惰弱な氣風を排することは出來ぬ。

獨逸や佛蘭西はいざ知らず英米の海軍々人は能く至る處に競技をする、我が海軍々人も之に學ぶが宜い、日本人の體質の小さいことは事實に於て爭れぬ、が日露戰爭以來は單に日本は體質小なるが故に我等に勝つ能はずなどいふものはなくなつた、憚らず競技を申込むが宜い、而かし體質の大小强弱は競技の成敗に影響することは何と言つても爭はれぬ、近い話が此度セントルイスの野球軍が來た、それを見た上でも、彼等の體力の優れる點が技の上に甚だ現れて居る、バットを揮ふにしても、五體とバットと一致して、一つの力となつた所に强い打擊が出る、彼等は此兩者の一致が能く出來るが、日本人には悲いかな理合(りあひ)は知れて居ても實際には行へぬ、五體が先づ準備をして次にバットが働くといふ具合だ、又日本人の體質では呼吸を靜める一定の時間が運動中にも要(い)る、彼等にはそれが無い樣だ、それやこれやを思ひ合すと隨分情無い點が多い、頭腦の働に至つては決して彼等に劣るとは見受けぬ、日露戰爭の結果で我々の體質を嘲るものは減じたには相違ないが、然し能く考へれば彼の如き好果を得たのは體質の弱點を他の方面で補ふに足(た)るだけの長所があつたからなので、若し、彼にも他の方面に於ける同樣の長所があつたとすれば、矢張り勝敗は體質の如何によつて定まることゝなる、若し我々日本人にして他人が我々の體質を嘲らぬからとて宜い氣で居る樣ならば他日噬臍の悔があるも知れぬ、體質を强くすることは我々の心掛けねばならぬことである、

此樣な見方からすると、外人との競技に於て暫く負けるのも亦宜い、自覺の道が開ける事だ、之て互角(ごかく)の位地に迄我々の體質を鍛え上げる事になれば甚だ幸福だ、

體質を以て人種の差異に歸することは私は採らぬ、髪の毛とか眼色(めいろ)とかその樣な點なら人種の相違も爭は

れまいが、身幹の長短、骨格の强弱とかいふ事は人種上の問題てはない、論より證據、我國の今日の女子て母より小い、か弱いといふ體質のものが多く有ろうか、日本の女子は指の細く淸徹なることを以て白魚に比べて誇としたものだが、白魚を並べた樣な指を持つ女學生は今は何處に在らうか、體育を奬勵したる結果斯樣なものは無くなつた、日本人は下肢の短い人種だなどいふけれど、何も人種といふてはない皆人爲的に作り上げたのだ、小いから坐らせる、痺れを堪えて坐らせる、勢、下肢の發育は不十分て且つ攣曲せねばならぬ此樣な事は自覺が開けて矯正さへすればズンズン直る大抵十五年位て目立つ程に改良が出來て居る樣だ、之は我國ばかりでなく佛國などを見ても左樣だし、又婦人は總じて男兒より身長の足りぬものと思ふけれど、英米の實例を見ると最近二十年間に女子は却つて男子よりも高くなつたといふ事だ、遺傳といふものもあるけれど、此樣な點に於てはその力は存外不足なものてある、それ故私は我々の今日の體質に重に敎育習慣の力によつて斯くの如くされたと信じて居る、我々は勿論運動を全國民に向つて慫慂するが此意味に於て最も外人に接觸する機會の多い海軍々人に向ひ、先づ大に彼等との競技を試みられんことを希望する。(談話)

桂、西園寺時代（中）

無名氏

總理大臣の位置が桂にオッファーされたといふことは、オッファーした人も、桂は詰度之を引受けるに違ひないといふ信念があつてしたものかどうか疑はしい。或は桂が引受けずに辭退したら、夫れから政局が一轉するだらうと待ち設けた人があつたかも知れない。實は桂が之を引受けたといふことは、甚だ意外の事であつて、些か手持無沙汰の氣味の人もあつたらうと思ふ。兎も角も桂が之を引受けたによつて桂内閣といふものが出來上つた。出來上つたことは出來上つたが或人は之を評して緞帳芝居といひ、又或人は、此

内閣が出來上つたのは恰度明智光秀が天下をとつたのと同じ月日てあつたが爲めに、明智の天下同樣、三日も續くまいといつた。

桂がどういふ自信力があつて自ら内閣を組織したのてあるか、そこは何ともいへないが人の出來る事なら己れにも出來るだらうといふ考てやつたものらしく思ふ。然し彼は未だ一度も總理大臣學といふものをしたものてなかつた。これからが即ち總理大臣學を初めるのてあつた。誰れが其御指南番てあつたかといふ事は些か想像することが出來る。それは山縣内閣の時、其名は法制局長官であつたが、其實は殆んど内閣一切の樞機に關與した平田東助其人であつたらうと思ふ。て平田は山縣を助けた時の經驗によつて、今度は自ら閣僚として桂を助けて來た。然し兼々素養のある桂であるからして直きに總理大臣學を卒業して了つたかも知れない。それて桂内閣の前途に横はつて居る問題は申す迄もなく財政問題である。其爲めに伊藤内閣も倒れて來たのてあるからして其後繼者たる桂が受繼がなければならぬのは當り前てある。處が外國に日本の公債を得る工夫をして其困難を切り拔けやうとしたのであつたが、それも首尾よく―といつてよいか首尾わるくといつた方がよいか、失敗をしたのてある。大概のものならば、もう此失敗てくたばる筈のものであつたが、其處はなか〳〵くたばらずに兎に角切り拔けて置いて、さうして一方ては却て意外なる成功をしたのてある。其れは何てあるかといへば即ち日英同盟の締結てある。此事たるや勿論桂一個のクレヂット(信用)に歸する事が出來ぬのみならず又桂内閣のクレヂットに歸する事も出來ぬと思ふ。けれども兎に角大英斷を以て向いて來た潮に乘り出したといふ事は彼及び彼の内閣の手柄といふより外はない。此日英同盟といふ事について桂と伊藤との間に多少意見の阻隔を來たしたことは何とも致し方はない。それは双方に申分もあつたであらう。桂が伊藤をだし拔いたといふのでもなく、伊藤が桂にだし拔かれたといふのでもなかつたらう。然し其爲めに二人者間に多少の感情の阻隔を來たした

ことは疑ない。て三十四年から五年にかけての議會は先づ無事に濟んだのであるが、濟まないのは三十五年から六年にかけての議會である。其議會に於ては第一の問題は申す迄もなく、地租の繼續案といふ事であつて、これは前山縣内閣の時に地租を增徵する時に姑息にも年限を附けたが爲めに斯かる病根を養うて來たのである。て桂の方では伊藤も無論之を賛成するであらう、伊藤が賛成すれば彼が總裁をして居る政友會をしても之を賛成させるであらうといふ積りで繼續案を出したのであつたが、伊藤の此時の態度といふものは甚だ曖昧であつて、政友會の多數に百姓が選んで居るものであるから、百姓の人氣を損ずることには賛成が出來んといふて反對をした。其結果は議會の解散となつた。之れは外見上議會と桂内閣との衝突のやうであるが、實は切言すれば伊藤と桂との衝突であつたのだ。此れ迄暗鬪をして居たものが、今度は公々然と陣頭に乘り出したのである。山本權兵衞が地方官に向ての西鄕南洲の大演說も實に此時であつた。其れは南洲でさへ其爲す所、國家に不利なる時は之を討伐した、況んや南洲たらざるものをやといふ調子で、伊藤の反對などに決して顧慮すべきものでないと地方官を鼓舞激勵したのである。而して三十六年に總選擧が行はれたが尋常であれば先づ伊藤の反對でどうしても内閣が瓦解せねばならぬ譯である、處が昨日迄は全く伊藤の子分といふことが出來なくとも幾分子分であつたもの－又せられて居た桂が、伊藤の反對に拘はらず伊藤の反對を挑み戰うて議會まで解散して行たといふ事は餘程の決心であるといはねばならぬ。それて論理的必然の結果として新議會に於ては何處迄も伊藤と戰ひ、潔ぎよく勝敗を決することは、道理から言つても、事情から推しても、又常識から考へても殆んど間違のない所である。然るにこゝに妥協なるものが出來て、新議會には地租案は出さない事になつた。此處で妥協する程ならば前に喧嘩をする必要もなかつたらうに、何故前には地租案の爲めに喧嘩をし、後には妥協をしたかと云ふことは何人にも分るまい。只當人のみが其れを知て

居るのであらう。が彼のは喧嘩する爲めの喧嘩ではなくして或は妥協する爲めの喧嘩であつたかも知れない。一度鬱積したる空氣を拂ふ爲めの喧嘩をし、其空氣を拂ひ去て了つた後に手を握る樣にしたのかも知れない。彼は如何なる場合に於ても物事を極端まで持て行くといふ事のない男で、勝も七分、負も七分といふ譯で、何處までも餘裕を殘して置くのである。已に肉薄して桂と伊藤のデユエル（決鬪）までなつて來た時に彼は忽ちピストルを空に放つて相手の手を握つたのである。こういふ藝當は今日の日本の政治家では恐らく桂の外には出來ないであらう。然し其爲めに臨時議會は無事に通りは通つたが、桂から解散されて來た新議會は何條其儘過すべき、一寸の蟲にも五分の魂といふ事があつて誰れでも擲られて默つて居るものがないから、彼等の不平は所謂部分攻擊となつてあらはれた。其爲めに農商務大臣の平田、文部大臣の菊池も其位置に安ずることが出來なくなつた。此部分攻擊は桂の方からいへば折角妥協した勞を無にしたものともいひ得るのである。然し政治家は死んだ子の年を數へるといふ程愚な事はない。政治家の領分は現在と將來であつて過去ではない。過去に對して微塵でも未練が殘れば―煩惱が殘れば、政治家は其本領を失ふことになる。歷史家と政治家の分離點は確かに此處である。

で之が爲めに遂に意外なる問題が持ち上つて來たのである。それは何かといふに伊藤が政友會の總裁である中は桂は到底總理大臣が無事に勤まらんといふ事である。で其解決は桂が總理大臣を罷めるか、伊藤が政友會總裁を罷めるかといふ事であらねばならぬ。こゝに又桂對伊藤の一戰爭が初まつた。伊藤もしれ者である、桂もしれ者である。此戰爭は暮の裡であつたことて多くの人が氣が附かずに濟んだが前の地租問題に比ぶれば此方が却て奇々妙々の秘術を盡した事があらはれて居る。ところが其の結果は伊藤が政友會總裁を罷めて桂が總理大臣の位置に再び就いたといふ事になつた。再び就いたといふ事は少し奇異に聞ゆるかも知れんが、實際彼は再び就いたのである。こういふと伊藤

が充分の敗北て、桂が充分の勝利のやうに聞ゆるけれども、伊藤は決してそう易くマネージせらるゝ（あしらはるゝ）敵ではない。彼れは何時でもタイト、コオルナー（窮屈な隅つこ）に抑し附けらるる毎に必らず超越的行動を取るのである。彼の捨鉢はなか〳〵利目のある捨鉢である。此時も自分一人て樞密院に入ることを爲さず、右の手には山縣を、左の手には松方を引張つて樞密院に飛び込み、のみならず西園寺といふものを自分の後釜に据えたのである。即ち彼が西園寺に代つて樞密院議長となると同時に、西園寺は彼に代つて政友會總裁となつたのである。

　て話代つて、西園寺が何故に伊藤の後を引受けたかといへば、彼には充分の成算があつたといふ譯てはあるまい。其半分は伊藤の苦しい境界に對して之を助けやうといふ義侠心、若しくは多少先輩として居るものに對する義務心てあり、殘りの半分は桂に對する面當てあつたかも知れない。なアに貴樣がやれば己れもやつて見せるといふ事てあつたかも知れない。當時西園寺が政友會總裁に成てやつた演說の如きは有名なる有苗演說てあつて桂内閣を以て有苗族の如く見て居る。有苗は蕃族てある。彼の眼中には桂内閣は苗族以上でなかつたのである。其西園寺が今日桂と手を握て行かうといふ樣になる事は當時夢にも思ふた人がなかつたらうが、政界の往事は人の豫想に反するとある斯くの如き者で、政治道樂を一度初むればどうしても止められないといふ事も亦恐らくは之が爲であらうと思ふ。

　處が明治三十六年といふものは桂内閣にとつて前後に比類ない程非常に多事な年てあつた。内には政友會といふものを控へ、其政友會が動もすれば進歩黨と一處になつて政府に肉薄せんとする狀態があり、外には露國問題といふものが、段々切迫して來て、露國は其四月、第二期の撤兵期に於ても一人も動かさない、のみならず龍巖浦に來る人は潮の湧くが如く、退く處は退かずして、進む所は進むといふので、其爲めに對外政策に就いて日本は手緩るいといふ評もあり、又主戰論者もあり、内にも外にも、前にも後にもなか〳〵骨

の折れた年である。而し我々は今其事に付て詳しく語る譯には行かない、之は寧ろ別問題として語る必要があるかも知れない、然しながら桂内閣は韓國に對しては初めから一定の方針を持て居たのである。其プローグラム(綱領)といふものは、朝鮮に於いては斷じて中途半端の政略を行はないといふ事で、初めから朝鮮を日本の保護國若くは其以上にするといふ決心を持て居たのである。夫れが爲めには京釜鐵道の完成を以て第一要件として遂に三十五年の暮には臨機の處分を以て之が完成を初めることに決したのである。それで愈々小村とローゼンとの談判が東京に開かれ、三十六年の夏過ぎから初まつて、矢釜しくなつて來るや否や最早や内輪の爭鬪處ぢやないといふ事で、元老連中も夫れ〲相集つて力を盡したのであつたが、此元老の各分子を一つに集めてやるといふ事についてはなか〲容易な事ではなかつた。元老會議といふものが桂內閣の時に最も多く行はれたので、之あるからして桂內閣が極めて微力で有といふ者もあるが、一方からいへば桂内閣は元老を最もよく善用し、且つ最もよく利用したものといつてもよい。元老會議といふものは兎角老人の繰言か若くは天狗の鼻較べとなつて、やゝもすれば無責任なる喧嘩口論に終つて了つたこともないとは限らんのであるが、之を巧く纏めて擧國一致を先づ元老會議に擧げたといふ事にしたのには其マネージアー(支配人)の骨折がさこそと思はれる。而して其マネージアーは何人であつたかはいふ迄もなく、桂其人であつた。悪口をいふ人は桂は只元老を拜み倒したといふが元老といふものはなか〲只拜み倒されるものではない。之れは元老學に精通して居るものでなくては出來る事でない。今日の政界に於て元老學の大博士といふものは又桂其人であらう。彼は虎は搏にし、牛は觸るるといふ風に元老の皮の厚い處と薄い處を知て巧みに之をマネージ(あしらう)したのである。でいよ〲戰爭の止むを得ないといふ事になつて彼は伊藤に向て斯の如き事を言つたのである。自分は是迄は涯分を盡して來たがいよ〲露國を引受けて戰さをする事にな

れば局面一變したといふものである。かゝる一變した新舞臺には又新たなる人を要する事で自分は恐らく其人であるまいと思ふ。されば言て此場合自分は逃げるといふ考は萬々ない。お前さんが總理大臣をやつて呉れれば、自分は兼任の內務大臣から專任の內務大臣になつて內の事は充分やるから、外の事はお前さんに願ひたいといふのであつた。伊藤もさういふ事をいはれてウカと首を縱に振る男でない。自分は總理大臣となつても桂の組織した內閣に入れば名は總理大臣でも實は桂の囚人も同樣であることが分て居る。で伊藤も今迄通りお前さんがやつた方がよいだらうと桂にいふと、桂はそんならお前さんが今迄通り力を添へて呉れるかと念を押して、無論といふ返事を受取て、戰中に於ける桂內閣の基礎が出來上り、桂は兼任の內務大臣を解いて內閣の當初に遞信大臣であつた芳川を內務大臣にしたのである。



伊太利の對外政策

『テーグリヘッン、ルンドンヤウ羅馬通信員、ア、ミユラー書翰』

トリノなるスタンパ紙の政治通信員に其人ありと知られたる代議士チルメニ氏は其紙面の附錄に、チトニ氏とエーレエタール氏との間に交されたる言說に就て盛んに長廣告を弄せり。吾人は之に仍りて何ぞ珍らしき事を聞知する譯にはあらざれど、外邦の新聞が爾來說來れる所と伊太利人の口づから聞くと言ふに至つては又一興ならずとせず。チルメニ氏は其論說の冒頭に於て說出して曰ふ、何人も已に知れる通り、伊太利は輓近其外交の諸問題に亘りて、一に英吉利と相提携して違はず。かの最近の伊太利對バルカン半島問題の結果は實に英吉利の賚なりと。エーレンタール男爵は墺地利に於ては最早ゴリユコウスキー氏の反伊太利的政

策を繼續し得るものに在らざることを了知せり、而して維那に於ける橄欖樹はデシノ及ラッコニギに移植せられざるべからざるや明か也と論ぜり。

然らば今や此伊太利の收め得たる大結果といふは何處に在る乎。一千九百〇三年正月に於て墺地利、露西亞兩國がバルカン問題に就て一致の行動に出づるや、其時彼等の行動はチルメニ氏の述ぶる所に據れば、恰も兩國而已が這箇の問題に於て優勝なる地位を占むるものなるが如き體度を取れるものにして、他の列强は僅に賓席に連れるかの觀を呈したりきと。伊太利の功名心はかくの如き虐遇に對していかでか安ずるを得べき果然同國外務大臣プリネッチは其歲一千九百三年羅馬駐劄の墺地利公使に揚言すらく、伊太利はバルカン半島に於て墺地利、露西亞と齊しき役前を演ずべくして、決して他の隸下として行動すべきにあらざるを要求すと。かくの如きの要求に對して兩國たるもの、殊に墺地利は豫め期する所ならざりし也、而も伊太利は赴いて英吉利の軍隊に投じ其援助を借りて全く如上兩國と同等の權利を獲得せんとせり。（註に曰はく、英國の援助を借りたるは這回を以て初めとする乎）英吉利、後に至りては佛蘭西も加はりて之に一味せり、而して墺地利は殊更東洋に於ける大戰中は漸次其過度なる主張を放下せざるを得ざりき。輓近に至て警察及財政の改革に於て必ずや要求を爲したる後、再び伊太利は法律の改正に於て獨り率先者たらんことを求めたり、然れども英佛の兩國之が掣肘を爲すありき。かるが故に法の改正は監督委員の手に渡され、同時にバルカン問題に於ては牛耳を執るべき强國は一も在ることなき事。並に又伯林條約に署名したる各列强は皆該件に關して同等の權利を有する者殊に英吉利伊太利の兩國は然あるべき者なるとを宣言し、お祭騷をなせり。憾はエーレンタール男が携へて伊太利に赴かざるを得ざりし「使命」なる者とす。



THE DREAM OF PAN-GERMANISM.
—*Ulk* (Berlin).

然れどもチルメニ氏は此平和的條約に全く好意を表するものには在らざりき。渠は更に所念らくかくの如しと雖墺地利たるものいかでか此言

を踐まん、必ずや曩昔の覇權を得んことを求むるならんと、雖然伊太利は已に其獲たる所に滿足するを得、何者政治的地歩に於て吾人は僅かに着々として進むべく、決して急足に躍進し得べきに非ざれば也。然もエーレンタール男が、將來に於て墺帝國政府は又全獨乙及スラブの各般の攻擊(さることありとや)を墺地利に在る伊太利人に無効ならしめ嚴しく復讐せしめんとするの意ありと安堵の言を與ふるや、如上の滿足を一層喜んで述べるを得る也。かくの如き溫和なる墺地利の態度に對しては或る新聞紙は實に分外の希望を與へたるものあるや必せり。多くは新法律の統領に一の伊太利を擬するを要求せず、彼等は衷心、爾來相顧視せる兩同胞の間に「稅關的章程」が今後生ぜんことを信ぜる也。

此「誠實なる關係」の立場に立てるトリノなる僧侶派の機關モメント紙は一大論文を揭げてツリエストに於けるスラブ人に甜諛の辭を呈せり。同紙論ずらく、堂々たるスラブ族の國民ともあらうものが、奸佞なる獨乙人に唆嗾せられて伊太利及伊太利人に對して激怒するが如きは洵に悲しむべき事にこそ。スラブの弊は伊太利にはあらで獨乙氣質也。獨乙國はツリエストを窺偸し、渠に殆んど反抗するを得ざるスラブは此目的よりして年は一年より漸く吸上げつゝあり。此間に處して只一の救濟法とも謂つべきは、スラブは恐むべき全獨乙人と絕つて伊太利と結ぶに在り、而も從前と變然るを好としたり。然る上はスラブは最早恐るゝものを有せざる也。何者ツリエストの伊太利人の背後には三千萬以上の同胞ありてよく獨乙の吸收に對し武を以て反抗擊攘するを得れば也。只悲むへきはスラブにしてかゝる連結に就て何の知る所なきを……と。

此程の「忠實なる同盟者」の好例は日々容易く增加するを得べし。愛すべき友人伊太利人の吾人と相倚る事即ち彼は之を以て大なる滿足と爲す所也。渠等は吾人が呼吸する所の空氣を嘗て一度も惜みたることあらじ。かくの如くにトリノのガゼッタ、デル、ポポロ紙は現時獨京伯林に滯在中なるソピシニアの特別全權公使に對して激昂せり。吾人は衞瑞洲の帝國に於て經濟上の競爭より伊太利人と相距ることはよく伊太利人になし得べき所にあらざるべし、云々。

英露の協約

「ダス、エコー」

亞細亞洲に於ける兩敵手なる二大强國の間に締結せられたる「秘密」協約なるものの內容を公にしたる際、英吉利の新聞紙は愼重の態度といはんよりは寧ろ太しく注意して之を見たり、此協約の內容は今後稍信用せらるべき方法に於て世人の認知する所とならんとす。英國はかく迂遲々辛酸を經たる商議の結果に對し頗る滿足なるべきことは言はずもあらん。英國に取りては此協約は二ヶの目的を平和的に達したるものと與ることなし。此目的を達せん爲めには數年前に於て一度は免れ難き兵火を見ることありしも測難きもの、即波斯灣頭に於ける優勢なる自國の勢力を露國に承認せしむること、亞富汗斯坦に於ける形式上の保護者たるこ

と是也。

レッチエ紙は全く信ずべき報知を傳へたり、即英露新協約の批準は九月二十三日月曜日を以て、其發布は九月二十六日を以てなされたると是也。協約文は佛蘭西語を以て書かれたるもの也。兩帝國が親善なる關係を保つべし云々といへる紋切形の項目を以て初めたる後盟約の主文は三ヶの別々の部分を以て之に次げり。波斯、西藏亞富汗斯坦是、其内容を傳へたる「レッチユ」の言ふ所大約下の如し。

　波斯に關しては兩國たるものは商業取引に於て鐵道布設に於て石炭採掘に於て一定の勢力範圍を定め、決して相互間に他の妨害をなさゞるべき義務を有す。盟約せる露國の絶對的勢力範圍に屬すべき地域は亞富汗斯坦、波斯、露西亞の國境の一角より波斯、露西亞の國境なるコイリ、シリキスに至る一帶、英吉利の絶對的勢力範圍地域は同一角よりペンデル、アッバスに至る。同時に又兩國は波斯政府の主權を承認し、露西亞及英吉利が金錢を貸與へたる波斯の銀行が仕拂困難の危機に至つては兩國互に制限を置く事。

　露西亞が波斯に於て比較的行動の自由を得たる上は國家外交上容喙の權を得べき計較を亞富汗斯坦に於て放棄すべき事。露西亞は亞富汗斯坦を英吉利の勢力範圍下に立てるものと見做し、亞富汗斯坦との交涉は英國印度政府に通牒すべき義務を有する事。

　西藏に於ては支那の統治權を確認する事。兩國は西藏への使節を廢する事。西藏に自由に入國し得るものは只兩國の佛教徒のみなるべく。英國は自國に負債せる貸金の拂を得る迄は西藏の二三の地帶を占領するの權を得べき事。



THE JAPANESE NICHTMARE.

—*Humoristische Blaetter*

此協約の本質を許したる「レッチュ」の言は次に示すが如し。北波斯に於ける稍自由なる行動をとる事を許されたるを以て、英國は波斯の海灣に於ける露西亞の勢力に對し自ら衞ることを得、亞富汗斯坦には日本が朝鮮に對すると同樣の形式を以て臨むを得べく、西藏は平和的國際に於ても戰時的國際に於ても中立を以て宣言せられたるもの也と。

ベルリネル、ターゲブラットは曰く、

レッチュ紙の報道はかくの如き事件に於て報道の妙を極むる「タイムス」が數週間以前協約締結後直ちに報じたる此協約の內容を說明せるもの也。亞富汗斯坦に關して決定せる盟約を露西亞が承認せし事は好果あるべき約定の形式上の文面よりは事實の心髓に適中せるもの也。タイムス紙は少くとも其當初の報道に於て已に英國はエミール（阿富汗斯坦の王）が其帝國に於て整頓せる狀態の維持を保證する限りは亞富汗斯坦の獨立を侵害するものに非ざるを思ふとの保證をなすに似たりし也。協約に依て定められたる現狀維持の双方の承認は其昔締結せられたる國際的條約の模範に依て新らしき約定を含むものに非ず。然れども事實上國家關係の安固を含む。英吉利が波斯に於て其盟約者に與へたるものは露西亞に取りては價値多き而して英國自身に取つては尙已に現前せる事態の承認を包含せる許容といふべき也。波斯に於ける渠が通商上の利益並に渠が航海上の利益は協約に於ても亦其協約の確實に於ても、西藏に於て收むべき經濟上の目的に於ても見出すべし。然れども喇嘛敎帝國の中立國たるは英國側の一大賢重の明斷として特筆するに足るものといふべし。

バクダッド線鐵道がバルカンに於ける關係と共に條約の文中に入り來らざりし事は世人の期待せし所にして、兩點の世界的性質に相當せるものなるを以て也。此點に關しては他の之に參與せる强國の中介なき了得目的に協ふものとは覺えずといふ如きものにあらず。波斯に關しては再三、第三國就中殊には獨乙國の商業上の利益は利益範圍に關する盟約に依て變ぜざるべきことを確實にせり、而して此範圍の制限に對するレッチュ紙の所說は此を指せるものなるべし。

全體に於ては即ち英吉利王ドゥード陛下が露西亞國外相イスヴォルスキイに與へ玉へる高級勳賞は之あるを以てなるべし。而も吾人は露西亞が此協約を以て滿足して在るべき凡ての理由を有することを思ふ、此協約は露國內治の鞏固の問題に對し其活力を自由ならしめたるものにして、此問題の解決は當來の此帝國の國力並に威力に向つては打克てる戰役よりも大なるもの也。而して此方針に於てイスヴォルスキー、ニコルソン協約は又露國の盟約國即英國に取りても外交上一大成功と謂ふべきもの也。

戰爭是認論

「リテラリー　ダイヂエスト」

海牙の平和會議に於て餘り捗々しき結果を見ず、爲に多少失望せる人々

に對しては、戰爭は進步の條件として必需のものなり、故に戰爭は善なりとの肯定なれば、一監督牧師が說教に於て、又一女史が婦人雜誌紙上に於て與へたるところに、豫期に違へるがながらも冷かなる滿足をば得しなるべし。アデレード、レーノルヅ、ハルデマン女史は即ち曰く、若し吾人の野蠻なる祖先にして、當時の原始時代に在つて既に能く今日の海牙會議が主張する如き一般の平和を成立せしめしとせば、我が謂ふところの人類なるものには毫も進步なかりしならん、其處には唯永遠に野蠻中の野蠻を存せしならんと、

又監督牧師ペーパー氏が此頃の說教に於て、人類の向上は幾多の戰爭によつて遂成せられたりと論ぜりと、諸種の新聞紙の傳ふるところ、その所說に依れば、地球の有らん限りは其處に軍隊あるべく、又戰爭あるべきなりとし、更に海牙會議を以て唯詩人の痴夢のみと斷じたり。

ハルデマン女史は斯く迄に強くその痴夢を破却せんとはせず、その近代世界となん呼ぶ一婦人職業雜誌（女史はその記者なり）紙上に論ぜしところを見るに、社會は發達の階段にあり、未だ發育を遂ぐるの期に入らず、即ち各勢力の均衡を得るに至らざるなり、故に戰爭は公私共に猶は持續せられざるべからず、社會の諸狀態が皆適應せられ能くその所を得るに至つて戰爭は始めて終りを告ぐべく、それに達するまでには決して廢絕の期あるべからざるなりとし、更に又曰く、所謂る平和の主張者なるものが今日猶は甚だ少數なるは予の是とするところなり、何となれば若し平和主張者の平和的國家成立すとせば、その國家は盛るに支那人の如き人種を以てすべしと、斯くて支那人なるものを說いて曰く、彼等は已に好戰的本能を失せり。故に彼等は唯その結果として過去の事物を追尋し過去の人物を追慕するのみ、從つて進步なるものは全く彼等より秋を拂へり、爲に明日の事は昨日の事と少しの變化を見ずとなし、更に又論じて曰ふ、好戰の氣風は文運の進化に於て、常に優勝なる、强堅なる人種を有すべき、一種の本能なり、人類の戰爭なるものは、自然淘汰の普遍律にして、之よりして最も生存に適する人種が派生せらるゝなりと、此の如き論陣を布いてハルデマン女史は



KING EDWARD AT MARIENBAD.

It is wonder a man suffers from indigestion when he has swallowed the whole earth.—*Humoristische Blaetter* (Vienna).

下の如く語る、

論旨の一貫を計らん爲には平和會議論者は文明國民が野蠻國民を征服するを以て、常に惡事となさざるべからず、又新領域を發見し、此處に移住し、此處に殖民し、勢ひ猛烈なる戰端を開くことあるを以て、常に不正事となし最惡事となさざるべからず、此の如き論調を追うて事を爲さんには亞米利加殖民者は印度人に對して自己を防衛するを止め、早晩歐洲に引き揚ぐるを爲さゞるべからず、歐洲人は韃靼人の侵略に對して之に反抗を試むることなく、容易にその文明を受けざるべからず、又支那に於ける基督教傳導師は、彼國人の殺戮に甘從するか然らざれば彼の平和の國なる支那領土に踏み入らざる覺悟なかるべからず、その國民は實に現代に於ける最も主義に終始ある平和の主張者なりとすと、更に私的戰爭を論じて、之には公的戰爭を云々する論據の無意味に歸すべきものの多きを說く、曰く、

私的戰爭は別名を工業となす、吾人は常に工業に負はするに一種の光榮を以てして語るが如くなるも、それには事實多くの殺戮を伴ふ、然るに之を閑却して啻に光榮に就いて語るは甚しき謬恐となすところなり、戰爭に於て一人を殺すとせば工業に於てはその比率に就て慥に一千人を殺すべし痴呆の如き鈍感のものならざるか、但しは他人の所得を覬つて自己の囊裡を肥やさんする欲望なきものならんには、現代の組織における工業は大なる罪惡を有するを認めん、之に比すれば往時の戰禍の如きは、唯處女の夢に見たるそれの如く、僅に顏を青ざむるに止り、何等の苦痛をも伴はざるべし、吾人の男女の同胞幾百萬が基督教國の商店に於て、水車場に於て、將た鑛山に於て、病を得て死せんとしつゝあるに、何が故に吾人は唯戰爭に於て滴らす僅か一リーテルばかりの血液に、畏怖の眼を擧げて吃驚するぞ、工業界の王侯が欲するまゝに斷えず私的戰爭をなし、斯くて之が軍隊として使役せらるゝ幾百萬の壯丁は、その激しき戰苦に病み或は斃るゝにも拘らず、何が故に吾人は仍ほ平和に就いて云々するか。幾多の婦女子がマッチ製造場に於て將に枯骨となりて果てんとし、二千萬以上の亞米利加の勞働者が工業といふ屠殺場に於て、搾取せられ、剝奪せられ、又斬殺せられんとす、是れ虛誇にあらず、彼等の幾千人は將に文字の示すが如くに斬殺せらるゝものなるに、僅に一抹に過ぎざる日人若くば露人の死屍に向つて悲まんとするかと、斯くて又次の如く論斷して曰く、

若し吾人にして既に公的戰爭なるものゝ善なることを認容せば工業に於ける私的戰爭をも亦是として認容せざるべからず、そは進步には缺くべからざる必須の條件なればなりと、又躁言して曰く

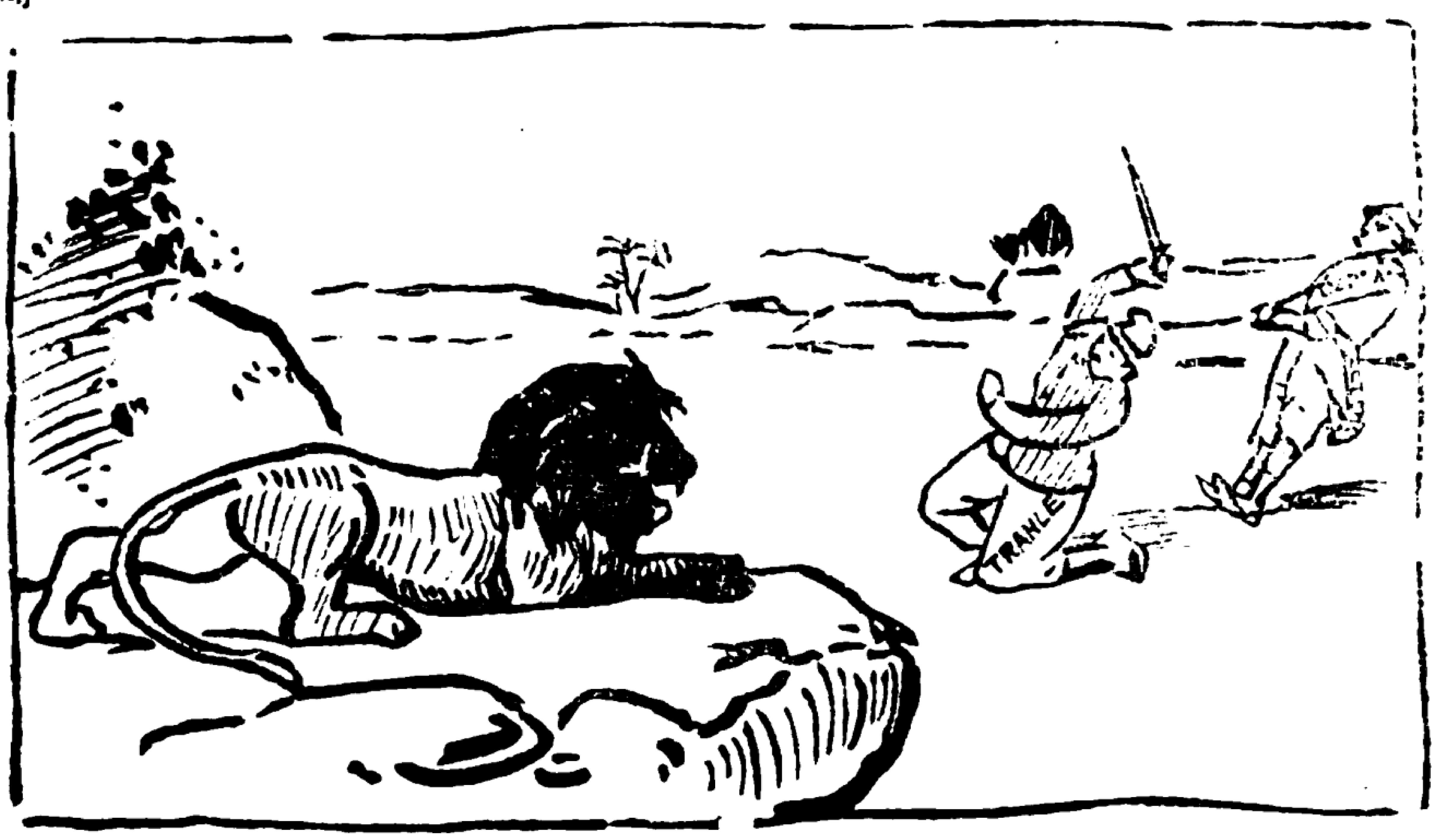
政事上の平和なるものは商業が全然均勢的根據の上に立脚する時た於て始めて現れ得べし、換言すれば全國民即ち一般の經濟事情が戰爭によつて何等の利益をも損失をも招致せざる時にのみ望まるべし、更に言はゞ、國民が一形式となり了するか、或は優越なる、勢力ある、强勢なる國民が、全然他の諸國民を、再起の力なき迄に壓伏せしめ、恰も家犬の今日に於けるが如く、唯愛着と恐怖とを以て屈從せしむるに至らば、

平和は初めて得らるべし。されどそれ迄は戦爭は必ず許容せらるべく聽て又それは善なるべしと。

絶東に於ける露國の兵力

『ベルリネル、ターゲブラット』

黒龍江右岸より露國に達する報知は甚だ心安からざる者あり。輓近に到る迄此全く不經濟的地方より歸露したる人々は支那が久しき以前より黒龍江右岸に築造したる街路大道蜘蛛の巣の八巷に走れるが如くなるとを熟知せり。此計畫ありしが爲露國のミシンワピー河畔の地位は全然露國の不利と變じ來れる也。若し人ありて支那が曾て露國に拳匪の際未だ其完成せられざる砲臺、木製の木砲に依て如何ばかり困められたるかを思ひ見、サハリア及其他の要塞に於て示せるが如き者と思ふ時は蓋し露國が日本風の設計に從て築城したる時初て起り得可者なるを了知し百廿密米砲を其要害なる河畔に布設す可きとの所以を知るならん。



FRANCE IN MOROCCO.
MARIANNE—"Let go my arm—and I will strike him dead!"
WILLIAM—"Quite dead? I don't exactly wish that at present."
—*Amsterdammer.*

加之新聞紙は絶えず露國の砲艦増製を報ぜり、是れ黒龍江に泛ぶる用のものにして、露國海軍省の案にては此れ種の一艦隊を形成するの意なりといふ。」此計畫に對し特に御用紙ノヴエ、ヴレミア紙はいふ、若し露國にして黒龍江の河口に於て艦艇群を游弋し得る確實にして容易に武裝したる分艦隊を置くべくんば、蓋し其意義ありといふに難からざるものもあらんと。黒龍江の中流に於ける砲艦の泛置を軍事の報道誤るとなき此新聞紙は無意義以上の沒意義也とし拳匪以來當時は意義を有し乍ら今に至つて意義なきもの也と喝破せし如き迄に其關係は著しく變化し去りたるなりと揚言せり。黒龍江は由來其中流に於て水量に乏し、故に露國の砲艦は只支那の要塞の傍に在つて露國側の江畔に碇繋せらるべきもの也といへり。露國が支那に對する威力解弛の一例として昭々たる此狀體は内治の急に汲々たるべきを想見せしむるに足るもの也。故に露國は其東境、一國の守備に任ずる迄に於て、隣邦支那に於て一籌を輸せられたるものと謂つべき也。

科學に對する挑戰の宣言

『オスセルバトーレ、ロマノ』

九月十六日紙上に、法王の近世主義に對する諭示書公にせられたり。恁は教會の危機今に迫らんとするを示し、此危機を救ふは法王たるもの丶第一要務たるを示せるもの也。曰はく

諭告書は近世主義を剖析すること精緻縱横、其哲學上（不可思議論と內在論）に於て、信仰上（主觀論と標徵論）に於て、神學上（如上の方針の應用）に於て、歷史的又評論的に於て、教政の獨斷説と信條との根底を覆すべき自由革新論者に於て其方針いづれかと研究せり。其結果近世主義は凡ての邪教異端の集合せるもの也との決論を得、歸結は無神論者と其軌を一にすべきものなるを確めぬ。放縱なる好奇心と個人主義の功名心及眞誠なる公教會の學術及義務を負担せる公教會の教義を沒却輕蔑せるものは、近世主義の種子を公教會の主要なる部分及僧徒自身の內に播下するもの也。法王ハレオ第十三世が此種の迷忘を打破覺醒せしめん爲め下し置かれたる準繩を執つて今左に之を衆に諭す



THE HARMLESS NECESSARY CAT.

BRITISH LION (to Russian Bear)—"Look here! *You* can play with his head and *I* can play with his tail, and we can *both* stroke the small of his back."

PERSIAN Cat—"I don't remember having been consulted about this!"

—*Punch* (London).

（一）スコラ哲學及神學の教授は凡ての經黌及實驗神學の科目を有する公教會大學に於て眞正なる公教會の精神に從ふべき事。

（二）近世主義奉承者は經黌及公教會大學に於ける教導職より驅逐せらるべき事。

（三）牧師は神聖なる教導職と共に僧侶並に信徒をして近世主義のものせる刊行物を閲せしめざることに注意すべき事。

（四）各寺領に於ては公教會發布物の檢閲の爲檢査官を置くべし。尙又レオ第十三世が定め玉ひて僧徒に示され玉ひし禁制は牧師の許可なくしては刊行物を編輯すべからざるをいへるもの也。

（五）僧徒は集會を開くことを禁ず、但し取除けの場合は此限にあらず。そは近世主義、プレスビテリアン主義、凡俗主義等の危險毫もこれなきを條件とせるもの也。

右の外、各寺領に於て取締委員一名を置き近世主義の迷妄を播布するものを嚴かに取締らしむ、此に關しては牧師は法王に報告をなすべし。

新歸朝者藤井健次郎氏の

獨逸の思想界に於ける日本人の位置なる論文は、既に稿成りて編輯者の机上に在るも、本號の紙面の意外に増加せる爲、遺憾ながら次號まで、割愛することとはしぬ、何れ新年の本欄を飾るべければ刮目して待て、右の外には尚ほ金子筑水、三宅雪嶺、志賀矧川、德富蘇峰、池邊吉太郎、山路愛山、中島德藏等の諸名士に寄稿を依賴せり



秋季美術展覽會について

藤岡東圃

此間「太陽」の記者が來られて、此秋の美術展覽會についての意見をもとめられたが、折節多忙で、到底其期限に間に合ひ兼ぬるので斷つた。所がまた毎月催される文科大學國文科談話會で、同じ題目に關することを話すやうにとの請求で、これだけは斷りかね、上野に於て見た所の日本畫について個人としての考を、順序もなく述べました。元來話が下手で、思ふ程の事を口ではいはれぬのに、また時間の制限があるから、言ふことを端折らう〳〵としたので、或は僕の意味を誤解せられたではないかと恐れる。故に更めて中央公論の餘白を借り、同じ事を筆に上せて、同好の人に示すのである。空論とも妄言ともいはれよう。それらは評する人の勝手である。

僕は繪筆をとつて石ころ一つも滿足にかけぬ、美學を修めたものでもない、古畫はもとより、今の人の畫

も求められず、たまには石版摺の繪を壁に張付おく位のものである。それでも見ることだけは好きで、機會があつたら名品巨作に接しよう〱として居たが、近頃は專門の業に汲々として、他を顧みる暇が少ない。僕の如き鈍根のものには、右に應じ、左に接し、茶も呑めば酒も飲むといふ譯にはいかぬ、花を愛すれば花にたてこもつて、月の光を忘れる。そのやうな僕が繪畫に關しての說は、固より氣まぐれのものであらう、素人のめくら評であらう。わけて今や文藝革新の際とて、古きは疎まれて新らしきは未だ起らず、筆を執るものも鑑賞するものも、迷ひ悶えて居る中で、僕の如き局外者が公衆の先に立つて、正しき針路を示すべき眼力もない、唯衆と齊しく渦の中に捲きこまれて旋轉するのみである。提出するのは問題であつて、解決ではない、いふ所は疑惧の音である、煩悶の聲である。

　此秋の上野はまことに美はしい、美術協會の展覽會も花やかであれば、文部省のも立派である、外にまだ色々の會もあつて、皆それ〱の色を競ひ、概して近年に稀なる盛況である。此盛況が着々として地歩を固めた進歩の結果であるか、又は一時のつけ景氣であるかは數字で示す如く明にはわからぬ、お祭騷ぎのやうな傾向も存するが、また青年が苦心の上の發展の跡も明らかにたどられる、とにかく今秋の壯觀は美術協會と文部省との對立にある。美術協會側には正派同志會があり、文部省側には國畫玉成會があつて、互にその信ずるところを主張する。協會でも、文部省でも、當事者は一方に偏倚するところなく、多摩川でも荒川でも利根川でも往きたいものは往くところに往かしめ、しかもこれを廣大なる一つ海に收めてしまふ宏量があるのであらうが、同志會といひ、玉成會といひ、各々賴むところの城に據つて、おのれ〱の標榜するところを貫徹せうとする、村の田を肥やす爲には、堤の水を隣村に堰いて、わが村に引かう〱とする。つら〱兩派の成立を考ふるに、專ら主義の爲に出來たものであらうか、これは甚だ疑はしい。同志會の起つたのも時を得ぬと思ふし、玉成會もまた人がどなるから自分も

どなるといふやうに思はれて、謂れのないことのやうに見える。そしてお互に擬勢を張つて、誰でも味方に引き込まうとするのは、何だか政治家が黨派に據つて選擧を爭ふやうで、藝術家には不似合の感じがする。併しながらこれらの藝術外のことは余輩の問ふ所でない、たとひどういふ原因で起り、どういふ内情が蟠まらうとも、それには關係せず、唯この二大派の成立によつて、從來の戰國割據のやうな小黨分裂の情弊を一掃し、保守と進歩との二ッの主義を源平紅白の旗じるしとして、堂々として天下を二分せば、世人は納得することであらう。古來相傳へたる畫風の本領を發揮する保守派も必要なれば、新人の思想を主張する進歩派もなほ大切である。余輩はこの二大主義の對立を見ることゝ信じて、二大展覽會を見たのであるが、不幸にして實見は希望に添はず、協會の方に保守派の立派なる本色といふものをも認めず、文部省の方に新思想の大膽なる表現といふものもないやうである。守つて衰へたる墮落の影、進んで得ざるの輾轉の姿これのみが目に立つ。

藝術には思想と形式とが相伴はねばならぬことは言ふにしも及ばぬことである、形式によつて始めて作者の思想も表現せられるのであるから、その大切なるは、勿論であるが、形式のみあつて内容のない作品は、なき人の紀念の衣裝である、衣架にかけたる縮緬純子、綺麗ではあるが、魂のない拔殼、移り香ばかりが昔を偲ぶ涙の種である。自分に何の考もなく、唯古人に手を引かれて、行方も知らず彷徨ふが如きは、技巧の練熟の跡はありとも、先哲の糟粕として余輩は多くの價値を與へぬ。文學の方面を見ると、或は國民固有の思想を發揮せんとし、或は歐西文化の髓腦を移植せんとし、中には不健全の傾向も見えるが、とにかく社會思潮の先頭に立つて、年々に變化し、進歩しゆくのである。繪畫はどうもさうはいかぬ、有名なる作家も形式に苦心して、内容はおのづから閑却せられる、閑却するつもりでもなからうが、新しき思想を發表するには、少しく素養が足らぬやうに思はれる。藝術の中でも文

學は殊に思想を主とするものであり、多少の學問知識がなければ出來ない仕事である、文章を學ぶ爲めは讀書もする、讀書をすれば思想も養はれる、繪畫は一見すれば必ずしもかやうなる順序を經ずとも學ばれるやうに考へられる。自分の名をろく／＼書けずとも、物の形は寫される、繪の具は扱はれる、技巧によつて內容の缺乏を瞞着することも、文學よりは可能である。從うて畫家は比較的學問が薄い、思想の養成が足らぬ。德川時代の世に知られた畫家が、人の依賴を受けたその手紙に、千鳥をかへてくれとあつたのを見て、小鳥千羽を描いたといふ話がある、今日はまさかさういふ人もない、普通學が開けて百姓土方でさへ新聞紙を讀む時代である、まして畫家はその技を練ると共に、その識をも積んで居る。併し現代の趨勢を概觀するに。畫家の思想はなほ文學者よりも一歩も二歩も後れて、時勢の先鋒となる人は甚だ少いやうである。たゞ浩蕩たる革新の波は社會の何物をも搖かさねば止まぬ、藝術家もこの動搖を感じ、不安の思に堪へぬ。幾年來、渠等は從來の畫を以ては新しき世の人を感ぜしめるに足らぬことを思うて、何等かの變化を技術の上に試みやうとして居る。この苦心の境にあるのが玉成會で、同志會は先人の跡を追うて他に爲すこともないやうである。但しその相違も技巧の事だけで、思想において著しき革新の態度の現はれぬことは、彼にも此にも通じて、余輩の最も遺憾に思ふ點である。

美術協會の展覽會を一覽するに、作の大なるといひ、數の多きといひ、畫家の熱心といひ、いづれも例年になきことで、まづ觀者はその盛況に眩せられる。成程立派だなと思ふ。併し陳列無慮八百餘點といふうち、櫻が岡の門を出でゝなほ余輩の腦中に深く印してその影の去らぬものは殆どない。一番人を驚かすのは、金屛風の多いことである、或は山水、或は花木、思ひ思ひの筆を縱橫無碍に振うてある。同志會の人々は或はこんな風をその主張の中心とするのではないか、豪爽の氣溢るといふのであらう、遒勁の筆なりといふのであらう。目立つものといへば、余輩の目にはこれが一番

目立つ、といへそれは美はしくかまたは壯んに感ずるからではない、わけてキラ〳〵した金地の上に不快な筆がイバり散らして居るからである。ゴツい、ヤ、コしい、生々しい、氣味がわるい、これが筆力といふものであり、またこんな線が日本畫の特色であるならば、余輩は筆力や線などは全然排斥せねばならぬ。併しこれらは決して思想の要求から生じた筆力や線ではなくして習慣的に學んだところを、內容の缺乏より、正當に用ゐることを知らず、到處にこれを濫用したのである。思ふにかういふ畫の作家もひそかに時勢の變遷を感じて居るのである、一葉落ちて、天下の秋を知らぬ草もない。どちらかといへば、渠等は文字もあり學問もある先生であらうが、世の中の移るは早い、胡鐵梅を歡迎した時代はもう過去に葬られた、一般社會は駛馬の如く奔る、漢字を全廢せうとさへする世の中である。野分を避けて葉裏に潜む胡蝶のうら淋しいではないか、もはや時勢に伴うて奔る元氣は失せた、唯過ぎ去りし藝術に今もなほすがり居るより外はない、しかも達觀の士を措いては、誰か安んじて過去の人とならうや。昔し曾我蕭白はその時潮と相容れずして、奇怪なる畫をかき、一世の龍兒應擧を繪圖ひきと嘲つた。渠は時勢に後れたのではなく、みづから時勢に背いて、東山の古代に歸らうとしたのである。今の諸家は一人にあらず、殊更に時勢に背いた人もあらうが、已むを得ずこれに後れた人もあらう、いづれにせよ、その奇怪なる筆を弄することは同一である。蕭白が筆の跡には慥に拗戾の色、呪咀の匂が見える、諸家の畫にもこれらの氣味が浮いて居るやうに思ふ。不運の人（一般俗世間の受けのよいところからいへば幸運かも知らぬが）には止むを得ぬことであらうが、高識の士は遇不遇いづれにおいても淡然として所信をかへぬ。時俗を追うて旋轉するも卑しければ、大勢に外れて怒罵するもまたさもしい。眞勇の士は滅多にその力のあるところを示さぬ、筆力を喋々する人は筆力の外に物もないのである。余輩は南宗初世の畫家の精神にはどこまでも感服するが、末派に止むる形式の骸は殊に嫌惡の情にた

えぬ、精神なき形式は誇大となり虚妄となる、諸家の書は果してこの誹を免れて居るであらうか。

或は協會の展覧會の書を一括して、その長所を求むれば、雅正なり、高逸なりとやうに見る人もあるが、僕の眼には決してさうは映らぬ。此會には少いが、最も人格の現はれ易き人物書を求むれば、佐久間鐵園(以下すべて煩を厭ふて號にも名にも敬稱を附けぬ、失禮の段は御宥恕を蒙りたい)の「謙讓」、畑仙齢の「松鶴仙齢」の壽老人の如き、甚しき俗氣のツと襲ひ來る心地がする、これらは思想を練らずして、筆力を衒ふ人の弊ではあるまいか、また思想は乏しくとも、寫生に力むれば、なほ大過はないのに、二者共に失うて未だ悟らず、筆力をのみ誇る人も少くないやうである。例之ば望月金鳳の「岩上孔雀」の如き、これのみを掲ぐるは苛酷かも知らぬが、余輩はその孔雀の首の後ろ向につきたるに驚く。馬鹿をいへ、後ろを顧みて居る處だと叱られるだらうが、それは叱る人がわるい、しかも此首は木で造つたので、前に向けやうとしてもとても動かぬ。

敢て形似を問はぬといふ書論が、これにもはまるのであるか、余輩は其無遠慮に呆るゝばかりである。かくいへばとて、全體の列品をすべてこの非難の下に一掃し去らうといふのではない、唯此會の中心として、名聲世に聞えたる大家に、かういふ作がある故、わけてこれを惜むのである。最もよいと思はれるのは小室翠雲、及び山岡米華の山水である。翠雲は田崎草雲の衣鉢を受け、前途なほ遥かなれば、未だ出藍の名は得ぬけれども、敢て先師の名を辱めず、多少の覇氣ある諧風ではあるが、毫も浮誇の風なく、謹厚の態度を以て立つて居る。米華は筆致の練熟暢達において、此派では當世得易からざる人であらう。その他には山本梅莊の「山水」も逸品である、老蒼枯淡、これに接すれば塵外に出でたる氣がする。或人は此人の畫は金粉を蒔いた絹の上にかく故、殊に其筆が渇筆となつて面白く感ぜられるのであるが、これもまた一種の狡猾手段であると評した。野村文擧の「海邊明月」を賞める人もあるが、元來繊巧綺麗を以て長所とする人の、偶々放膽なる筆

を用ひて、細條を省いたのであつて、前の岩などは歌繪のなり損ねたやうに見える。振袖島の田が片肌ぬいだ辨天小僧が思ひ出される。それよりも田中頼章の「山居、水住」が目新らしい景を寫し、芽ぐめる林の背を炭竈の煙の立昇るあたり、中々に面白いが、繁縟に流れ、細緻に失して、輭弱の嫌を免れぬ。

協會の展覽會における多數の陳列品を一括して評すれば、盛に見えることはほんの外觀だけで、實は例年に變らず沈滯不振の色が溢れてをる。さういへばとて、僕は保守や倘古を以て一概に沈滯不振の風とすると、誤解せられては困る。深く現代思潮の趨向の是非を察しての上に、輕擧妄動を戒めるが、保守の本色である、近世文明の煩瑣に飽き、虛僞を斥けて、上代の簡易渾厚の態を借りて、自己の理想をその上に託するのが、倘古の主義である。昔を慕うても今を知らぬのではない、必ずや現代の人生に觸れての上の主張でなければならぬ。藤原定家は和歌を論じて、情は新しきを以て先とし、詞は舊きを用ふべしと唱へた。これは形ちは古代の風に則るべきことであるが、内容はなほ模倣を避けて、作家みづからの新しき感想を諸はねばならぬといつた倘古派の態度である。後世の賀茂眞淵はこれに反して、情意を古に歸さねばならぬ、さうするには古の辭を學ばねばならぬといつて、内容形式を併せて復古の要ありと說いた。これは極端なる復古說であるが、それとても近代文學の墮落し、邪道に陷れるを慨いて、自家の標的を萬葉の昔に求めたので、決して無意義なる先人の模倣ではなく、過去を顧みるのは、即ち未來に進む所以であつた。末流この意を悟らず、たゞ萬葉の形骸のみをつゝき貪りて、少しも現代の思潮に觸れず、幾くもなくして勢力を失ひ、桂園派をして獨り聲名を恣まにせしむるに至つた。今日の所謂倘古派の爲すところを見るに、文學における定家の見識もなく眞淵の意氣もなく、現代思想と相觸るゝともできず、前代の形骸を守るに過ぎぬかと思はれる、其紙には紙魚の影が動く、其墨には樟腦の匂がする、信念なくして停まるを沈滯といひ、意義なき形骸の幅をきかすを墮落と

いふ。因循姑息、嗚呼、其間に時勢は日に〳〵渠等に背いて走るを思はぬのであらうか。

陳列品の數は少いが、見るべき作は文部省の展覽會に多い、就中傑作と思はれるのは、竹内栖鳳の「雨霽」と下村觀山の「木間の秋」とである。雨霽は柳に五位鷺の圖で、偃蹇たる老幹左より右に橋を渡して、密生せる細葉風に翻つて雫を拂ふ、中に墨のにじみたるはなほ雨を含んでをるのであらう、右に若き枝のつゝ立ちたるは、見る目も爽やかに、あくまで筆路の暢達なるを示す。數羽の五位鷺幹の上にとまつて、天に憧れ、雲を呼び、濕りをふるひ、毛を調へ一羽は飛んで將に屛風の外に出てんとする、一々の姿は一々の情、金岡の馬が萩の戸の萩を食はゞ、車坂の夜は五位鷺の聲も聞えよう。申し分をいへば、幹の方向、枝の配置が、自然を外れて、不安の念がある。凡て大なる畫面の割に豪快の趣の缺けたる憾はあるが、颯々たる筆の勢は敏活の技を示し盡して居る、四條の跋扈したる京都が、沈厚雄大の風よりも輕快洒脫の趣に長けてをるのは、當然のことであらう。木間の秋は色彩の變化を盡した畫で、鮮美優麗此上もない。初秋の山の草木を寫して、一雙のうちの右の一つは馬鹿に單調にスク〳〵と眞直な幹を立てゝ、其間に何かの蔓が横に棧を渡し、下草には櫟の若木のわきに薄が茂り、其間に萱草か百合のやうな花が鮮やかにのぞいて居る。左の一ッは幹のまばらな所、密な所と變化があつて、葛の蔓が斜に綱を引き、蔦がまた目も覺むるばかりの色に紅葉してをる。草木の局所の個々の描寫は寫實でいつて、全體の姿勢及圖樣の構成は裝飾的に出來たものゝ樣に思はれる。唯櫟か何かの木のへぎ板のやうに平たく見えるのは、もう少し實物的に丸味を附けられぬものかと思ふのは無理であらうか。此畫を評して、深き林間の風情を缺くとか、秋の草木として色彩が鮮美に失するとかいふのは、僕の取らぬ所である。此畫は裝飾品として見るべきもので、木間の秋といふが如きは、むしろ畫成つて後に作り設けた題で、强ちこれに拘泥せずともよい金秋林間の趣致を直下に感ぜんとするよりも、配置の

妙、傳彩の美を看取するのが、これに對して取るべき鑑賞家の態度であらう。屛風も數多く陳列せられてをるが、室內裝飾の用度としては、此畫が一番成功して居る。屛風は實際に用ふる時には、展覽會に見るが如く、平たく擴げて見るべきものでなく、くの字形に曲げて立つれば、折角の名畫も鷺の首がねぢ曲げられ、鹿が背を梨子割に切られなどして、殺風景此上もない、これが多くの屛風の畫に已むを得がたき缺點であるが、木間の秋は此わづらひがない、よく屛風の性質に叶うて、樹木の姿勢も崩れず、却つて奧行深く見えるやうに思はれる。

要するに兩霽は筆において成功し、木間の秋は色において摑んでゝ居る。彼には吳春の面影を浮べ、此は光琳の再來かと思はれる。四條風は吳春の起したものであるが、これより先蕪村が飄逸な洒脫な一風を剏め。吳春はこれに學び、更に應擧に就いて、輕く、やさしく、はしこく、其中に力も籠つた一家の風を立てたのである。栖鳳はこれら先人の妙工をよく〳〵玩味して、自家藥籠中のものとし、それ一家獨得の筆致をも加へて居る。光琳風は光悅、宗達などに起つて、光琳が大成したもので、本阿彌光甫の如き、其筆跡は少いが、またこの一派の驍將である、その後遙に世と地とを隔てゝ、抱一がこの畫風を再興した。觀山もまたこれら諸賢を粉本とし、これを消化して、更に己の意匠を以て圖樣を構へたのである。豐大閤と大山大將とどちらがえらいといふやうに、時代の先後、社會の情勢をも考へず、漫に古人と今人とを比較するは、失當の沙汰であり、僕とても畫家の人格またはその一生を通じての事業を標準もなく評價するのではないが、もし今日見るが如き此二畫を一は蕪村、吳春、一は光琳、抱一をして畫かしめたらば、どうであらうか。技巧の上より見れば、蕪村も吳春も兩霽の如く腕の冴えたものはかけぬ、抱一の如きは木間の秋を見て瞠若たるもので、光琳の放膽にして奇拔なると、此畫の穩雅にして鮮麗なるとは、彼此共に長所を異にしてをる。かくの如く古今を比較せずとものことであるが、とかく鑑賞家に

は古に阿りて今を疎んずる弊がある、歴史の權威の前に萎縮してしまふのは、新時代の進歩に非常な障碍であると思ふが故に、特にこの比較をして見るのである。併しながらこれは技術の上より見たことて、畫風の上よりいへば、二人は各々洋畫にも鑑み、一家の工夫を加へては居るが、なほ全體には德川時代の跡を追うて居る。創立の功は、一は光悅、宗達にあり、一は蕪村、吳春にある、雨霽と木間の秋とはこれらの既行の畫風を改善し、完成したもので、決して明治新人の創見を立てたものではない。今日の二大作がいづれも保守に傾きて、一も革新の實を擧げたものがないと思へば、心細いことである。

雨霽も木間の秋も花木鳥獸の類を題としたものである。其堂奥に達すれば、いづれの畫題でも面白いのであり、精神を寫すのはいづれも難いことであるが、概していへば花鳥は山水よりも人物よりも畫き易い。一尺のものを一尺に寫し、又たとひ實物より縮めても、三分一大、五分一大にするならば、少しく腕に覺えのあるものならば、外形だけは容易くかくことが出來る。花鳥畫が即ちそれで、形式の上の苦心は唯立體のものをその儘に平面にするに止まる。五瓣の花は五瓣に寫せばよし、十本の小枝は十本にすればよし、其間に選擇も省略もいらぬ。であるから、此類の畫には、古今の區別、流派の異同が少い、東山時代の諸家、柳里恭または椿々山の花鳥を見ても、他の畫ほどの變化はなく、いづれも忠實に實物を寫して居るのである。山水や人物はさうはいかぬ。山水畫は廣大なる自然を三四尺の框のうちに縮圖するのである、全山の雜木も一抹の筆に掃き去らねばならぬ、長汀曲浦のさま〴〵もその特色だけを拔き出てゝかゝねばならぬ。朝夕雲煙の色は見る人によつて違へば、かき方も違ふ、從うて取捨の工夫、行筆の詳略も生じ、おのづからまた技術の上に種々の約束を生じて、こゝに流派の異同が成立つのである。雪舟の破墨が素人めに異樣に感じ、文人畫が今日の青年に了解せられぬのも、此故である。人物畫は頭の毛一本より足の爪先まで情趣を込めて、予

變萬化の感情は稲妻よりも速く、目にもとまらず閃く、其一瞬の表情を摘出して、千歳不朽の姿とするのが難いのである。山水は廣大なる空間を縮少するところに困難を感じ、人物は刹那の微動を把握するのがむづかしいのである。されば山水人物においては、徒らに古風を墨守するならば止む、苟くも自家の面目を發揮せんとするならば、過去の約束を破つて、別に新しき路を見出さねばならぬ、がこれは非凡なる天才の工夫に待たねばならぬ。花鳥の方には先の二作の如き傑作もあるが、山水人物にはこれに伴ふべきもの乏しいのは、此故である。敢てこれを以て山水人物を書いた書家を責めてはならずむしろ其苦心經營に同情を寄せねばならぬことゝ思ふ。

山水畵の秀逸を求むれば、やはり第一は川合玉堂の「片時雨」に指を屈する。此春の「二日月」の作を、これよりよいとふい人もあるが、模糊たる其景、淋漓たる其墨において、觀者の目を引き易い畵である、どちらかといふと、畵家の勞力よりも以上に見られる者ではないか。左方の霧に遠方の森を隔てたるところは、多少糊塗の迹があるかと思つた。一見すれば二日月はよい、始めて片時雨に對した時は、何となく失望の念に堪へなかつたが、再見三見してだん〳〵何ともいはれぬ趣味が湧いて來るやうに覺える。葉もなく枝もまばらな樹がヒヨロ〳〵と立つて、うら淋しい景色である、この間遠な林をわけて、一條の途があり、途の末は下つて、遠景の湖水に盡きるやうである。右の空が急に暗くなつて、林の間に一時雨サッとかゝり、何處の梢から誘うたか、雨と共に木の葉が二人の旅客の上に翻へる左の天はまだ明るく、湖上に遙かなる白帆は輕く走るやうてあるが、やがてはこれも雨に濡れることてあらう。旅人の脚は故里に近づくのか、遠ざかるか、小さき舟にはいかなる思をのせてゆくやら、眺める僕にも時雨がふりかゝつて、初冬の寒さが腸にしみるやうてある。やゝ遺憾なのは、これ程の大きさの畵は、一定の距離をおいて見ねばならぬのに、その距離に立てば、時雨の様がよく判別出來ぬかと思はれることてあ

る。木をかく筆の力が乏しいといふ人もあるけれども、僕はむしろ着實にして叮嚀、敢て氣を負はぬのを多とする。樹木の中にはその幹その枝に厭な所もあり、一つ屋の屋根の山葵下しのやうなのは、わけてあらずもがなと思ふが、これらは強ひて缺點を求めて、完きを責めるものである。時雨は從來の山水畫には多くは畫かれなかつた景情である、月夜や風雨の題などのやうに澤山の先蹤を見ることが出來ぬ、和歌や俳句には多いが、繪畫には少い、それを新たに主題として、十分に畫意を發揮したのは、玉堂の功である。畫くところ畫題にかない、最もよく畫家の觀念を現はし得たのは、片時雨である。

山水畫より人物畫は日本人には更に困難である、從來時にも畫にも好んで自然を寫して、人物には遠ざかつて居た故、新たに人物を描いて其表情を盡さんとするのは、一通りの苦心ではない。此點において經營慘憺たるものは、寺崎廣業の「大佛開眼」を推さねばならぬ。嚴正なる筆を揮ひ、濃厚なる色を惜まず、糊塗せず、隱蔽せず、技倆を盡して、かいて／＼かきまくりたるが、此畫である、その勇氣と熱心とは敬服に堪えぬ。併しながら不幸にして畫家が擇んだ此畫題は、個人の感情を表はすには、甚だ不適當のものである。圖中に人物は澤山畫かれて居るが、すべて後を向いて、同じ姿勢に坐して居る、單調の美である、羅列の盛てある。出來得るならば、堂宇の宏大、儀式の壯嚴を見せるだけで、それ以上の意義は求めるに難い、これは技倆の失敗よりも題材の缺點である。それに場面の廣濶を示さんとして遠近法に拘はり、却つて昔の操繪の趣がないでもない。一根の柴に武藏野の秋が推測られるのが丹靑の妙である、此作家は餘りに多くのことを筆の上にかき盡さうとしたのではなからうか。その外には別に一品だけを展して世に示した高橋廣湖の「重盛諫言」は、構圖に最も變化多く、歷史畫として近頃の逸品である。長短共に指摘して見たいが、後が尚長くなりさうであるから、略して置く。更に此二者と全く趣を異にした京都の人物畫は、都路華香の「石清水」

てある。八幡太郎が童立の時、供人數人を從へて、男山八幡に參詣し、今や拜殿に昇らんとして、片足を椽にかけて居る。後ろに雜色の翁が捧げたる供物を目がけて、鳩が一ぱいによつて來る、懸盤に片足をかけたものやら、翁の肩にとまつたものやら、いづれも先を爭うて羽ばたきをする。集まる鳩を主眼として、これに人物をも合せたところ、これも構圖が面白い。東京の畫は洋畫を參酌して彩色に工夫し、背景をも十分に畫くが、京都の畫は傳來の風に多少の修正を加ふるに止り、描線を主として色を略し、背景を省くことが多い。石清水にも時には濃艶な色を憚らず用ひてあるが、全體は筆を示すを主として、賦色甚だ淡泊に、道具は略して、壯嚴なるべき宮居も一切描かず、唯椽側の端を寫したに止まつて居る。人物も八幡太郎の後ろの數人は、或は半身、或は頭だけが見える。人體の研究はといはれると如何せん到底これを辯護することは出來ぬが、全體が淸楚な畫である、見る目に心持のよい作である。東京の多くの作が畫壇の革新を試みる、その刻苦はあくまで同情すべきことであるが、苦心のみして未だ成功せざる間はおのづから煩悶の跡が現はれて、不快の感じを與へる。それよりも古に依つてまた己を立つる京都の作は、何となく人をひきつける、將來のことも思はず、その畫だけのことならば、僕は此方を取る。東京は晝の仕事であれば、京都は夕の晚酌である、東京は新體詩であれば、京都は短歌である、一は敬すべく、一は愛すべきやうに思ふ。

人物畫でまた東西の好一對がある、上村松園の「長夜」と安田靫彥の「豐公」とである。一は花の如き二人の佳人が長夜の讀書を寫して、西川祐信の畫風により、一は山の如き英雄が茶室の待合における姿を描きて、その容貌は高臺寺等にありふれた肖像を基として居るいづれも小品ではあるが、人物の表情に富んで居ることにおいて、一對の佳作である。松園は既に世に名を知られた閨秀作家で、婦人の描寫がその專門の技である、女子の容姿を寫すことに於ては、當今他に匹敵すべき人なく、嬋娟妖冶の風は觀者を醉はしめる趣が

ある。長夜の作は太き線を以て衣服を描きて、なほ優秀の態を失はず、俯きて本を眺め居る女が殊によく、大きなる紅梅の伊達模様にくすんだ色を使うてあるのは浮華の難を避ける爲か、燈下の趣を知らしめる爲であらう。丸顔のやさしさ、柔かなる肉置は、何ともいはれぬ趣がある。年長けたる婦人の肩のそげたところは典型的に過ぎて、自然に外れ、膝のあたりにも甚しい難がある。豊公は鐵の如く兵馬に鍛へた其顏の、射通すやうな眼光と、兩手に力のは入つた所が、此畫の生命である。袴が面白くない、京都の松園が背景は一切略したのと違がつて、これは東京風に背景の壁を畫きつくしてあるが、殊に明るき窓を上方につけたのが目に障る。むづかしく豊公の人格についていへば、宏量海の如き英雄が閑居の姿は、もつとゆつたりと砕けて居ねばなるまいと思ふが、それは畫家と僕とが人物の解釋の違ひて、まづ此作家がねらつた趣だけは畫面に現はれて居る。二者とも經營慘澹たる大作ではないが特色のある、忘れられぬ畫である。其中て、松園の畫は、それだけを見ればいひ盡されぬ滋味があるが、從來の諸作と併せ見るに、いづれも同じやうな獻てある、やさしい、人なつこい、はにかんだ婦人の態度がどれにもこれにも溢れてをる、寫すところは女性の普通美である。豊公はとにもかくにも此英雄の個人を發揮せんと力めてある。通性と個性、これがまた其他の作家の畫の上にも概して現はれる二都の相違ではあるまいか。

更に一對の作がある、山元春擧の「海月」と木村武山の「阿房切火」一は水、一は火、各その勢力の偉大を描かんとし、鬼面人を脅かすの趣に於て、二者相通うて居る。海月の氣焰は恐ろしき程て、誰れ人もまづその一喝に驚かされる。國民新聞の東京だよりには、その巨浪を以て畫三昧に入つたものとし、東京朝日の瀧君は動かざること山の如しと難じてあつたと思ふ、よくよく違つた評である。僕は固よりしかく三昧に入つたものとは見ぬが、浪頭の砕けるところなど、到底他人の企及を許さぬ長所はあると考へる、どうしても畫面

の重鎭たる人の筆である、瀧君はまた月と雲とだけはうまいと譽められたが、これには反對で、泥がきの雲は京の友禪の下繪を見るやうにして、極めて卑しくまた纖弱、到底他の局所と釣合はぬと思ふ。この人の近來の作は氣を以て勝ち、圖様や行筆が甚だ單調のやうに見える、氣力は固より必要であるが、技術の修錬がこれに伴はねばならぬ。雪に親んだやうな松はかりも、三度めは鼻につく、其角の奔放は芭蕉に勝たず、蘆雪の覇氣を抑へて始めて應擧と名を齊しくすることが出來る。僕はこの作家が、擇ぶところの材はその得意の境に止まるにもせよ、なほその間に着實に種々の變化を試み、客氣を蟬脫して、遂に渾然たる美玉を完成せられんことを深く希望する、かく苦言を呈するのは、即ちその作を重んずるからである。阿房切火は丘を超え谷を渡り、炎々として天をも燒き盡さんとする大火を畫いたものであるが、悲壯といふよりも華麗に見える、火事の雛様といふ風である。由來此作家は纖麗華美なる畫をよくしたと覺えて居るが、こんな題目は果してその筆に適したものであらうか、併しその奮うて恐れざる大膽には感服の外はない。而して此畫は同じく野心の作であり、多くの缺點があるにもせよ、海月の如く酒を吹いて呵喝する趣はない、甚だ眞面目である。更に二者を比較するに、海月は筆に力をこめ、阿房は色に苦心して居る、二都の相違はこれにもあらはれて居るのである。

かく比較しゆけば更めて京都と東京との著しき異同に想ひ到らざるを得ぬ、これは既に幾度も繰返し論ぜられたことで、敢て今また僕の言を待たぬのであるが、前述の言の結論として一言する。即ち京都は筆を使ひ、東京は色を使ふ、無論これは比較的の論であつて、東京になほ嚴格なる筆法を用ふるものもあるが、大勢からいへば、京都は舊を守りて、潑剌たる墨を一本の筆に託し、東京は新に就きて、如何にして色彩の變化を日本畫の上に現はさうかと苦心する。彼地の圓山、四條は筆先の修錬に力めたもので、今日でも其遺風は存し、玉章の輕快自由は到底雅邦の及ばぬところである。

此地は早く泰西の文明に震蕩せられて、いかに其着彩の妙を應用せうかと思うて、しばらく筆力などは忘れて居る。京都は餘りに筆致の敏捷を欲してか、(此度の畫には目立つたものはないが、)從來屢々藥を散らかしたやうな線を使ふ。服部春陽の「曉風」の巉崖の如きも、京都に流行る春擧一流の皴法である。彩色はことさらに落付を見せる爲か、どうかは知らぬが、白つ茶けた脂がかつた色を好んで用ひ、素地をもこれて淡く塗ることが多い、次いでは群靑をきたなくなする。東京は頻りに和洋折衷を試みて居る、京都も固より洋畫の感化を受けては居るが、その學ばんとする所は水彩畫までの所であるのに、東京は油繪の趣致を加へんとする。濃麗なる色を使ひ、時には墨描の線を止めて、或は彩筆の線に代へ、或は全く線を描かぬ。京都は主要なる事物のほかは、白地の儘に存することが多いのに、東京は背景をも一々塗らうとする。併しこの濃い色を十分に使はうとする東京にも、なほ一種の傾向は存するやうである。これはわが國民の通性の發現か、從來の日本畫の慣習に依るのか、また一時の風潮かは知らぬが、すべて强烈なる色を使ふことを避けて、全體の彩りの間に通ひたる一種の調子を保たしめうとする、かくせねば趣味を失ひ、品格が下るやうに考へたものと見える。此傾向を極端に現はしたのが、美術院派の畫て、線をも省き、それに全體の色を同調にせんとして、反對の色を避け、强い色を鈍くする故、圖面が薄く不明瞭になつて、所謂朦朧派の名を得たのである。橫山大觀の二作、菱田春草の「賢首菩薩」など此傾向を代表して居るやうである。

京都は易きものを守つて成功に近く、東京は難きものに就いてなほ、煩悶の間にある、彼の成功が勝つて、此の煩悶が劣る譯ではなく、むしろ東京の刻苦に對して余輩は十分の敬意を表する。畫題よりいへば、花木鳥獸は京都の長所である。熊と白熊とがあるが、いづれも京都のもの、鹿が京都に四種あつて、東京に一種あるが、其一種も東京の「溪間躁鹿」は甚だ拙い。最も傑出したのは木島櫻谷の「しぐれ」であつて、此作家が

得意の題目、多少の非難をいふ人もあるが、とにかく動物の表情を斯くまでに描き得たのは、從來にも類が少い。鹿の顔付を見て居ると、春日の社頭に實物を相手にする時よりも、遙に引きつけられる。狙仙の猿といふが、渠の小細工な筆よりも、僕は此鹿が面白い、自分も鹿になつて見たい。美術協會の方では根本雪蓬の「松齡祿壽」の鹿がよいやうであるが、これも時雨には比ぶべくもない。山水畫は文部省の方では京都が多くて、東京は甚だ少い。京都の方でも從來の文人風や四條風に安んずること能はずして、大體において頗る水彩畫の味を帶び來つて居る、併し此風の畫で傑出したものは見えぬ、これはなほ試作中のものであらう。人物畫はいふまでもなく東京の獨占である、京都にも舊型によつて漠然と人間の普通美を寫したものはあるが、複雜なる人間の姿態表情はそのよくする所ではない。東京の廣業門下の高足たる野田九浦、町田曲江の如き、聞くところによれば、西洋美術の門をもくゞり、深く人體の研究に從事し、かくして修得し得た結果を以て日本畫を作らんとするとのことである。早急の成功は望むべからずとするも、着々として固き地盤の上に一家の見を立てんとする、これが正當の順序である、一時の障碍に屈せず、勇を奮つて途を拓くが、諸氏の任務である。

怪むべきは東京の人物畫に宗教畫の多いことである。近來は多少社會の宗教復興の傾向がないでもないが、平安朝や鎌倉室町時代とは似ても似つかぬ時代である、德川時代の佛畫はから下手であつた。信向がなかつたからである。今日の宗教畫も畫家の信條から出たものとは信ぜられぬ、一時の流行であらう、前者の轍を踏むのであらう。明治廿年代に文藝復古の傾向が生じて、古社寺寶物の鑑査もあつて、奈良、平安の宗敎的彫塑繪畫が研究せられ、世人は深く上代文化の進歩に服した、明治の大家狩野芳崖も悲母觀音を最期の傑作として死んだ。今日の畫家はこれらの系統を引いて居るのであらう、先蹤のない現代の人生を寫すよりも、粉本の存するものは寫し易いのであらう、平凡な人間

よりも歴史宗教に顯はれたる英雄哲人を寫すものは書が尊くなると思ふからであらう。余輩も傳來の畫題を用ふるに於て異論はない、釋迦もよし、達磨もよし、主語は固より普遍的にして可なるが、併し説語は個性的でなければならぬ。今の畫家の宗教畫を作るのは、內心に自家の信條が存して、これを作つたものとは見えぬ、何等敬虔の念もこれに對しては浮ばぬ。要は思想の有無に存する、たゞ先例を追うて紙面を汚すだけならば、それは浮薄である。見渡すところ、協會の方にも、文部省の方にも、これらの浮薄者流が少からぬやうである。一は舊風に從ひ、一は新樣に趨る、彼は沈滯、此は輕浮、その己に守る所なくして他に左右せられる點は同一である。近刊の美術新報を見ると、玉堂の「二日月」を剽竊した作が協會にも無聲會にもあるといふて攻擊してある。余輩はまた月次者流が宗匠の好みに投じて高點を貪らんとするが如く、審査員間の傾向を摸索して筆を執る便佞者の少からぬのに驚く。渠等の間には旣に一かどの名を得た人もあるに、なほ技術にも思想にも自家の信念なく、浮草の風に從うて東岸西岸に彷徨ふが如きは、たとへ過渡の時代とはいへ、餘りに情ない感じがする、何の爲に畫をかくのである、しつかりしたらよからう。

要するに保守といひ進歩といふも、單に技術の上のことで、思想に於て自家の壘を固くして、革新の旗を擧げたものは、未だ見當らぬ。余輩は敢て筆力を斥けうとするのではない、唯精神なき筆力は粗笨なる誇張となるを恐れるのである、複雜なる描寫を厭ふのではない、唯內容なき人物の集合は、散漫なる混化に陷るのを忌むのである。形式は內容の表現に過ぎぬ、技術を練ると共に思想を養ふことが必要である。然らば明治の新人の思想は果していづれの畫にか現はれて居るであらうか、不幸にして余輩はこれを見出さぬ。左顧右眄前後に往復して、漸く一を得た、日本畫の方にはなくて、西洋畫の方にある。それは和田三造の「南風」で、相模灘の海上、伊豆の大島を後にした、扁舟の上の漁夫の生活を寫したものである。見るからに勇氣勃

々、肉動き腕が鳴るやうに見える。浪もよくない、島にかゝつた雲もよくない、漁夫の腰が輕い、技術の圓熟せぬなどの缺點もあらうが、作家の意氣はすべてこれらを蔽うて、觀者を威服する。明治時代は平民の時代である、活動の時代である、艫につゝ立ちたる若者は何等かの光を望むやうである、理想の光は遠くとも渠等の眼の中に入る、坐したる漁夫も波を睨んであくまで風雨の暴威と戰ふの決心を示してをる。余輩の運命や信向が、さながら作家の筆を借りて現はれて居るではないか、痛快である、畫上の筆が眼に殘つて、今もアリ〳〵と見えるのは、獨り此畫である。

上文のうちに擧げた例がみな傑作だからといふて引いた譯ではない、まだ外にも勝れた作もあり、それらについては殊に長短ともに論じたく思うたが、段々長くなるやうで、また端折り〳〵して、多くは省略した。なほ結論として線と色との關係、和洋折衷の態度についても論じて見る筈であつたが、下手の長談議說く方がもう興盡きたから人はなほ退屈であらうと思うて、こゝに筆を擱く、何だか目頭に沿はないやうで、龍頭蛇尾の如く感ずるが、この言ひ足らぬことは重ねて說く折もあらう。

東西比較 楊柳美觀論（下ノ下）

芥舟漁郎

萬葉集九卷の「君なくばなぞ身よそはん櫛笥なる黄楊の小櫛もとらんと思はず」の黄楊を玆に論ずるも異なものなれど、漢詩に於いては所謂白楊に關する僅少の句を除きて何々楊と稱するものを覔むれば所謂黄楊に關する僅少の句があるばかりであるから事の序に擧げておかうと思ふ。黄楊は諸山野中に生じ人家に多く栽ゆ、葉は初生の槐芽に似て而かも靑厚、華かず、實らず四時凋ずと支那人が書いて居る。宋の歐陽修は夷陵山谷の間に舟中より之を望見するに、鬱々として山際に愛すべき色あるにも拘らず樵夫野老すら知らざるを惜しみて賦を作つて之を歌ふた程であつて、朱長文

の三四句に「春餘花淡薄、雪裏葉靑葱」と歌はれ、元の華幼武の結句に「堅質比寒松」と賞められ、其他宋の曾肇は「雖非負尺材、歳晩好顏色」蘇軾は「黃楊生石上、堅瘦文如綺」李薦は「黃楊性堅正、枝葉巳剛愿」などゝ言ふて居るので、大凡そ其特色が推測される。

若し夫れ楊柳と書して枝垂柳を意味し又は、枝垂柳及び河柳水楊その他の柳屬を意味するかとの疑ひある方面になつてくると、詩觀としての活動は著しく擴張される上に旺盛である。漢人客を送つて長安の東にある覇橋に到れば必ず柳を折つて別を贈ることになつて居て、詩經以來柔脆の木であつて茂盛して蟬多しなどゝの意味を何人も熟知して居るが水楊は枝硬く節となすべしと稱されて居る。「楊柳縱橫倒順揷之皆生春初生柔荑即開黃蘂花至春晚葉長成後花中結細黑子蘂落而絮出如白絨因風而飛子著衣物能生蟲入池沼即化爲浮萍古者春取楡柳之火陶朱公言種柳千樹可足柴炭其嫩芽可作飮湯」の詩觀の跡を辿てみると、日本の詩觀と甚だ密接なる關係を有する一例を茲にもまた見るのである。

梅桃と共に鶯や燕を伴ひて春意を逞うするものは柳である。梁の簡文帝の「垂隱滿上路、結翠早知春」唐の太宗の「疎黃一鳥弄、半翠幾眉開、縈雪臨春岸、參差間早梅」李白の「垂絲百尺挂雕楹、上有好鳥相和鳴、間關早得春風情、春風卷入白雲去」杜甫の「只道梅花發、那知柳亦新、枝々總到地、葉々自開春、紫燕時翻翼、黃鸝不露身」顧況の「年々立春後、即被啼鶯占」劉禹錫の「桃紅李白皆誇好、須得垂柳相發揮」黃世康の「靈谷看梅初駐杖、清溪又見柳條長」は悉く其意味を知らするが、就中、眉の如き柳葉と絲の如き柳條を美しと感じたるは古も今も同じである。簡文帝の「楊柳亂成絲」韋承慶の「葉似鏡中眉」杜甫の「隔溪楊柳弱嫋々、恰似十五女兒腰」孟郊の「弱々本易驚、看々勢難定、因風似醉舞、盡日不能正」白居易の「人言柳葉似愁眉、更有愁腸似柳絲」歐陽修の「綠樹低昂不自持、河橋風雨弄春絲、殘黃淺約眉雙斂、欲舞先誇手小垂」王漫翁の「春到枝々是綠絲、秋來葉葉似愁眉」潘岳の「弱柳蔭修衢」沈約の「楊柳亂如絲」など到底枚擧するに

邉あらずであるが、獨り彼の王安石の所謂「楊花獨得春風意、相逐晴空去不歸」杜甫の所謂「顚狂柳絮隨風舞」なる楊花の美觀は、詩歌の上に於いて、古今東西他に類なく、支那獨り專らにすべき絕唱となつて居る。

劉禹錫

輕飛不假風、輕落不委地、撩亂舞晴空、發人無限思。

楊巨源

北斗南廻春物老、紅英落盡春尙早、韶風淡蕩無所依、
偏惜垂楊作春好、此時可憐楊柳花、縈盈艷曳滿人家、
人家女兒出羅幕、靜掃玉庭待花落、寶環纖手捧更飛、
翠羽輕裾承不著、歷々瑤琴舞袖陳、飛紅拂黛憐玉人、
東園桃李芳已歇、獨有楊花嬌暮春。

胡天游

吳江春水拍天涯、江上風吹楊柳花、花飛滿空無處所、
隨風直度吳江水、渡水隨風太有情、縈花惹草恣輕盈、
狂如舞蝶穿花徑、細逐流鶯度綺城、綺城樓閣連天際、
楊花飛入千門去、飛去飛來稍覺多、紛々如雪奈君何、
珠簾繡箔深々見、舞榭妝樓處々過、樓中美人春睡起、
愁見楊花思蕩子、蕩子飄零去不歸、楊花歲々點春衣、
夢魂不識天涯路、願作楊花片々飛。

日本に於いては、現に移植せられつゝある樹木の爲めに、おのづから景觀の變遷するものあれば、今後の楊柳に關する詩美の範圍も亦擴大されるであらうと思はれるけれども、少くとも開闢以來今日迄は枝垂柳を筆頭にして其他の柳屬が詩美獨占の姿を呈して居るやうに見える。殊に後世は楊柳と熟(つら)ねて常の柳のことゝして詩文に用ふるよし」小野博も謂へるが故に、柳屬殊に枝垂柳の勢力の程も大抵は察せられる。試みに萬葉を中心として二三の俳句四五の文章を粧點し、主要なる詩觀の那邊にあるかを調査して以て此篇を終了することにしよう。

萬葉七、九、十卷に水楊(河柳)の歌があつて「あられふり、とほつあふみの、あとかはやなぎ、かれゝども、またもあふちふ、あとかはやなぎ」に刈つても〳〵聽ては復たおふることを知らせ「かはづなく、むつたのかはの、かはやなぎの、ねもころみれど、あかぬき

みかも」に唯だ根といはんばかりに用ゐ「やまのまに、ゆきはふりつゝ、しかすがに、このかはやぎは、もえにけるかも」に春未だ葉を出さゞるに先ちて萌ゆる葉芽を歌ふて居ると共に、十四巻の「こひしけば、きませわがせこ、かきつやぎ、うれつみからし、われたちまたん」の垣内柳が水楊若しくは或る一種の柳屬を指すにあらずやと不明の點もあるなど、多少の用心も肝要ながら「やなぎ」と謂ひ「はるやなぎ」と謂ひ「あをやなぎ」「あをやぎ」と謂ひ「いつもとやなぎ」と謂ふも恐らくは枝垂柳を中心としたる柳屬の汎稱であるらしく、殊に「しだりやなぎ」と明白に數ヶ處て斷言されてある以上は、愈々其所信を確實にさせられる。

「やなぎ」と謂ふ數多の歌のうち巻五「うちなびく、はるのやなぎと、わがやどの、うめのはなとを、いかにかわかん」は梅柳に優劣なしと愛で巻十「あさみどり、そめかけたりと、みるまでに、はるのやなぎは、もえにけるかも」は若葉の美しさを賞め巻十四「やなぎこそ、きればはえすれ、よのひとの、こひにしなんを、いかにせよとぞ」は切りに蘖の生ることに言寄せて戀を歌ふたのである。其他芽の張ることや根の張ることにも言ひ及んで居る。「あをやなぎ」と謂ひ「あをやぎ」と謂ふて青葉の柳を稱する數多の歌ヵ着目の點は大抵同じであつて、假令ば巻五「あをやなぎ、うめとのはなを、をりかざし、のみてののちは、ちりぬともよし」は梅柳を折挿して酒飲み遊び同巻「うめのはな、さきたるそのゝ、あをやぎを、かづらにしつゝ、あそびくらさな」も略ぼ同じこゝろもちを抒べ、巻十四には二首共柳の芽の張ることに言ひかけたるところがある。柳條の靡ひ垂るゝは頭飾の蔓とするに適應しかるべく巻十「もゝしきの、おほみやびとの、かづらける、しだりやなぎは、みれどあかぬかも」同巻「ますらをの、ふしゐなげきて、つくりたる、しだりやなぎの、かづらせわぎも」巻五「うめのはな、さきたるそのゝ、あをやぎは、かづらにすべく、なりにけらずや」は明らかに其趣を傳へて居る。支那風に柳絮の飛ぶところを注目しないけれども、柳眉のことは巻十巻

十九に見えて居て、枕草紙には明瞭に美觀として居る「柳などいとおかしきこそさらなれそれもまたまゆにこもりたるこそおかしけれひろこりたるはにくし花もちりたるのちはうたてぞ見ゆる」しかし日本に於いて最も美觀とするところは實に枝垂柳の長條其ものゝ運動若しくは靜止である。源氏狹衣に所謂「風にしたがひてやなぎのいとおきふしみだるゝに」若しくは同じく齊川に所謂「柳のいとのやう〱にたを〱とみゆ」若しくは同じく若菜に所謂「二月の中の十日ばかりのあをやぎのわつかにしだりはしめたらん心ちして」若しくは思ひのまゝの日記の所謂「青みわたれる柳」若しくは土佐日記の所謂「此柳の影の川の底にうつれるをみて」などの詩觀は繰返へし卷き返へして今もなほ柳美として稱賛せられつゝある諸點である。和歌の發達を昔より今日迄縱に泝つてみると、所謂柳の絲がしなやかに風に揉まれて若しくは靜かに長く垂れて如何ほど日本民族の性情と心ゆくまゝに絡み合ひて以て春の美觀を恣まゝにしたるかを明瞭に會得することが出來る。殊に萬葉の昔に於いて既に無意識に對照美を悟り、青き葉に對する白き花と撓みがちの細條に對する角々しき堅緻な枝とを有する梅を配合したることも注目しなければならぬ。さればこそ芭蕉に「數へ來ぬ屋敷〱の梅柳」の句があり、蕪村に「梅ちりてさびしくなりし柳哉」の句があるのである。

曉臺の「ほつかりと黄み出てたり柳の芽」の頃になると世界は既に春である。几董の「比良の雪大津の柳かすみけり」「寒かりし月を濁らす柳哉」「若柳枝空さまに綠かな」は、之を朝にしては「紫の曙さめて遠柳、閑吏」「明もやゝほのかに青き柳かな、青羅」となり、之を夕にしては「柳から日の暮れかゝる野道哉、蕪村」「烟帶びて孤村の柳日暮れたり、閑吏」となり、或は「一株の柳に曲る野川哉、馬印」の景色もあれば或は「風に靡く柳千本の川邊哉、閑吏」の景色もある。要するに柳を中心としての種々の美觀は俳句を先達と仰ぎて更らに楊をも加へ、今後東西共に種々の文學が研究することであらうと思ふ。茲に散策子は楊花の絮の輕く

飛びたる想を集め、柳條の絲の長く延びたる筆を收めて、何となく自分の好きな句を蕪村から借り來つて以て此一篇を締め括ることゝする――

不二嵐十三洲の柳かな

(大尾)

文藝雜考 文藝に顯れたる獸慾(下)

佐々醒雪

近世の初期寛永から寛文までの作物は、學者振つて嫌に澄し込んだといふ趣がある。貞徳が駄洒落的の俳諧を創め乍ら、歌道を標榜してゐるのや、元隣や了意の廻りくどひ儒道佛道の教訓草子や、到底生きた人間に觸れる可てない。併し、歌舞伎には既に傾城買の物眞似が初つてゐる、其所作の細な所は傳はらないが、風俗上の取締の爲に女優が禁ぜられる、若衆即ち陰間芝居が御法度になる、一時は女形さへも御禁制であつたのを見ると、頗る自然主義崇拜者てあつた事と察せられる。

人世の七八十年目は、商人なれば唐様て書く三代目に當るてはないか。古疵を撫つての大阪陣は、若い者の賛嘆する所となつて、天和以後の所謂る元祿期が出顯した。阿蘭陀西鶴の名にし負ふ好色本遠眼鏡て隣の行水を覗くより初めて、様々の徒事の數々、今更申すまでもなく、先刻御承知のことてあらう。上野の圖書館や大學の書庫にも閲覽を許さない。見せぬといふになほ覗きたるがる人情、發賣禁止の西鶴全集に、頻に○○の所を氣にする者も多いさうだが、實は○○の所がことに振つてゐるといふ譯てもない。お若い人々が想像されるよりは遙に手ぬるいもので、先づは活版本にそんなものよりは、寧ろ「大矢數」や「百鶴五百韵」などに、更に盛んなものがある。此處には内務省も氣がねもあるから、活版本から一例丈けを擧げよう。

生風呂に入方惜しむ空の月
めたつに立つてきたる薄霧
强藏か又かゝつたる露時雨

ふんどし切れて逃る三尾の谷
一の谷扇のわれめうしろつき
いかな出家も逆落しとて

貞門の人々が、放埒千萬無法至極の妄言と罵つたのも、所謂なきにしも非ずで、この談林俳諧といふものが、一方には好色本を開き、他方には川柳點の源となつたものである。しかし、西鶴等の眼中には、唯斯の如き人間の獸類的性質が、ことに著明に映じたので、賢人面をして乙に澄し込む動物が、可笑しくて耐へられない。可笑しいが故に笑ひもする、冷かしもする、これが彼等の態度であつた。譬へば、唐人が、美しい錦に包んで、大事さうに溲瓶(シビン)を提げてゐたとする、西鶴はその正體を衆人稠坐の中にさらげ出した。惡戯(イタヅラ)兒僧である。

西鶴には敬虔な態度はない。彼の偉大なるは、從來の文學者が道徳宗敎乃至文學といふ色眼鏡をかけて、前代の傳説ばかりを咏めてゐたのに對して、自分の眼で自分の隣人を觀察した所にある、眞に近世的の文藝を創始した所にある。其の人間觀察の態度は必しも理想的のものではない。西鶴がいたづらっ兒であつたから、我々も其の眞似をして、女學生のお臀を捲つてやらうといふのは、聊不心得ではあるまいか。

乙に澄した色眼鏡の道學先生、これに對して、春畫を示した惡戯は、時に痛快の極である、西鶴はかるが故に痛快である。浮氣者の廂髮に、裸體の畫葉書きを獻ずるとは、少し趣が異つてはゐまいか。明治の獸慾小説には、頗る後者に似たものである。

近松は主として戀を描いた、色を描いたものは稀である。稀であるが「長町女腹切」の上卷「はて、茶ばかりで濟むものか、新粉(しんこ)餅の樣なものなりと、茶の子物の子、のこ〳〵振舞や」の邊りは、淫靡或は晦淫といふ語の眞の意味に於ては、西鶴よりも更に甚しい。薩摩歌の上卷や、お夏淸十郎の蚊屋の條、などを合せて見ると、見物本位、人氣取主義の近松は、故意に醜猥な文句を連ねて、見物の劣情に媚びようとしたものであることは、爭はれぬ事實だ。近松宗の我々も、こ

の點は缺點として許さねばなるまい。但し古今東西に絶冠した名作、人間業ではない沙翁の傑作にも、この缺點は勿論免かれないといふ噂だ。

元祿の戀愛――人間的な愛情――の献身的な熱烈な面白味は、餘事であるから洩すことにする。しかし、元祿期の作物が、往々獸慾の活動を叙してゐるに關らず、天保期の作物の如く、厭味らしく感ぜられないのは、一つはその獸慾に伴ふ戀愛が献身的である爲でもあらう。

「よしやわざくれ、色となり戀となる、」「既に命がけの仕事である、浮氣や氣まぐれの乳々繰合とは、自ら感興を異にせねばならぬ。今の浮氣者、コスメチックや廂髪が、眞に元祿文學の精髓を讀み味はうたならば、寧ろこの恐ろしい戀や色に避易すべきであつて、決して誨淫どころの沙汰ではない。

これに比べると、吉原細見の附錄として初つた八文屋本は、一層甚しかるべきてはあるが、却つて甚しくないのが奇妙だ。其積は、元來、流暢な文章と變化の多い構造とに腐心してゐたもので、直接に人間を觀察するといふ熱心が乏しい。矢張り近松流で、故意と劣情に投ずる樣な文句が時々見えぬでもないが、先づ無事な方だ。

江戸の新小說、黄表紙には、謎の樣に穢い意味を悟らせ樣とした語が多い。「振袖の皮羽織とは手前のことだ、まう猪の早太らう、毛が生へたと聞えるが、」「いつそあだにして見せるの、一太刀恨みていわえ」と云つても、解らぬ人には解るまいが、解るものに對しては不都合な文句だ。其他、「お杉の役割も、一そもう」と下女をして悶へしめ、道鏡を馬に化けさせるといふ風の、惡洒落を得意としたもので、罪がない樣でもあるが亂暴でもある。

蒟蒻本は誨淫の書として禁制せられ、作者や版元に罪人を出した程であるから、中には笑本と選ばぬものもある。その極端なものは文藝といふものでも無からう。娼妓が醜業であるならば、これも醜業の產物である。

蒟蒻本は獸慾の境を、溫かく柔かい極樂の樣に描いた。蒟蒻本の世界では、人間の嘆も悲も、皆この極樂に憧るゝ聲に外ならぬ。若しこの類の書に同化せられた日には、人間萬事休すといつてもよからう。

蒟蒻本に手を燒いた京傳を初として、寛政からは、再び古昔、傳說の燒き直しや、支那小說のおつかぶせに改宗した。寢白粉の惡臭い材料は稍滅じたとはいふ條深く染み着いた移り香が跡を絶つべきではない。

京傳はびく／＼ものだから、遠廻しな筆遣ひで、急所を逃れては居るが、其の作中の人物は、皆獸慾滿々たる男女で、才子佳人はくつくものと定まつてゐる。種彥も御同然、其他碌々の輩は、皆御多分に洩れない。

三馬は獨り調子が違ふ、彼は片意地な繼子根性ではあるが、幾分か西鶴の餘韻を傳へてゐる。蒟蒻本も惡巫山戲を盡してゐるが、甚助ではない。

一九も御同列に名を呼ばれてはゐるが、やゝ淡泊ならざる方である。「膝栗毛」の類は風敎に害がないとあつて、士君子も讀んだと馬琴はいつてゐるが、その士君子殿は頗る怪しい。

餅を以つて、金轡、オツト餅轡を喰ました、馬方の色事などは隨分烈しい。婚禮の夜に新夫婦の閨を窺つて襖とゝもに倒れ込んだ邊は、果して風敎に害がないだらうか。人物が彌次喜多である爲に、滑稽に讀めはするものゝ、かくまで下がつた滑稽を連續してゐる所は、流石は化政度の作物だ。蒟蒻本の私生兒だ。

今一人の私生兒、狂訓亭が人情本こそは、絕對に風敎に害あるものだ。流石蒟蒻本禁制の役に生れた丈けあつて、稍、婉曲には書いてあるが、西鶴の露骨なよりも、一層數層實感を摘發する力がある。この點から云へば、春水もなか／＼の才筆である、確に人を動かす丈けのものは持つてゐた。例へば、西鶴は折るゝ椨を記してゐる、春水は笑みかはす顏としつとりした汗とを描いてゐる。彼は唯露骨で文明の禮節に拘らぬ丈だ、これは確かに魔風色風を誘ふ罪だ。

最後に筆誅を加ふべきは、賢人面(ヅラ)の馬琴である。僕は、元來、馬琴の驕慢痴氣な態度や其の馬鹿々々しい

衒學が氣に喰はぬ。寛政以後の小說の大家を數へるならば寧ろ三馬に第一指を屈すべきであると思ふ。この獸慾問題に就いても、馬琴はことに氣に喰はぬ。時世に從ふ習ひとはいへ、黃表紙時代の馬琴を見給へ「摺小木曰く、旦那は汁澤山がお好きと見える　あゝかういふ中にも血が下つて眼がまふ〳〵。」（備前摺盆一代記）寛政十二年弓張月に筆とるより僅に四五年前までは、未だかゝる馬鹿を盡してゐた男だ。君子豹變も何の當になるものか、八犬傳にさへこの馬脚は顯はれてゐる。例へば毒婦舟虫の淫を鬻ぐ邊、何の必要があつて、穢ない卑い文字を長々と羅列したかといふと、唯讀者に媚びたのである。ところがこの媚びるといふ目的さへ達せられてゐない。生悟りの道德觀で、獸慾を醜陋の極と信じ、否醜陋視せざるべからずと信じてゐる眼で、淫賣を寫したのである。それが鼻持のならぬ惡臭を放つてゐるのは當然である。近松西鶴は勿論、京傳も一九も、さまで醜しとしなかつたから、我々にも、その描いたものが醜陋と感ぜられぬ。よし多少醜いと思つてゐたとしても、譬へば、例の溲瓶を無礙に打ち破したに過ぎぬ。馬琴は、鼻を抓みながら雪隱をかき廻して、黃色な掌を他人の鼻の先へ突き出したといふ風だ。穢い所以のお講釋をしたとて、その臭味がぬけるものか、これ天下の最も厭ふべきものだ。

化政度以後は、一般に墮落してゐる。形式の道德說が盛になつて、表面が立派になつたと共に、裏面はいよ〳〵醜い。「六玉川」流の川柳や笠附などと來ると、獸類としての詩でなくては見るに足らぬとしてゐる。

學者連中にまで、この風俗はおし移つてか、黒澤なにがしの「貌胡射の秘言」や支那小說の「肉布團」などがもて囃される、芝居も寄席も皆この種のものを以つて繁昌したものだ。

これを要するに、文藝に描かれた獸慾は、飲食の慾と同様、別に醜いとも陋しいとも思はないで書いたもの（一）、道德的の偏狹な禮義作法に反抗して書いたもの、（二）、唯人氣に投じようとして書いたもの（三）の三種に分れてゐる。

第一のものは勿論不健全といふべき理由がない。第二のものには唯反抗して見るといふのみで、世の中を茶化したに過ぎなかつた所謂る「轉業書」(一代男跋)であるのと、幾分か「人即獸」といふ信仰に向ひかゝつてゐるものとがある。更に確固なる信念の上に立つたものが顯れたら、この種のものも亦、人間の文藝の一異彩であらう。第三のものは更に三種に別れる、第一は滑稽といふ假面の下に隱れてゐるもので、滑稽文學と淫猥な文學とは、かゝる種類のものゝ爲に、屢々混同せられてゐる。その二は勸善懲惡の爲と號して、惡人の所行として、或は罪業の原因と稱して描寫する著作堂一流のもの、其の三は人間唯一の理想境、人世無上の極樂である樣に書き做したもの。いづれもこれを描くのは惡事であると信じながら、名利の爲にこゝに筆を着けたもので、若し、よく醜くとも卑しくとも、これが人間の眞相である、事實である、人即ち獸であるが故に直寫するといふ丈の見識があるならば、これ亦必しも排斥すべきでもなからう。

して見れば、詩材が生殖慾であれば、(それを、飲食の慾と同視することは、現世紀の人には既に望み難いから、)一種の信念が必要である。眞實であるが故に寫す、即ち人は獸であるが故にこれを描くといふ信念がなくてはならぬ。既にこの信念が有つた以上に、獸に等しい人間は醜であるか美であるか、これが問題である。ツルースは美であらうか醜であらうか。例へば、風葉君や葵山君の樣に、厭々ながらこの醜いものを描いてゐる、いはゝ泥溝ざらへの人足の樣な態度は、果して適當なものであらうか。かゝる態度の人は、果して人即獸といふ信念があるのだらうか。僕の疑は專らこの點である。新傾向の開祖の一人たる紅葉君は、俳人として西鶴の阿流である、まだ信念の人でない。獸慾に對して好惡の念もなく、美醜の判斷も見えない。いづれにしても未だもの足りない、未だ新日本の新文藝といふ程のものでもないと思ふ。(完)

明治故人評論（八）

大西祝氏

大西博士の一面の性格

金子筑水

私が學校を出てからまた一二年後だと思ふ、何でも明治二十七年頃かと思ふ、時節も正月であつたか猶だ暮であつたか記憶は明てないが、博士が「天才論」を書いて意氣衝天の頃だと考へて居る。夕方而かも寒い時分に突然私を尋ねられて、君は將來如何する積かといふ談があつた、當時はまだ私には何をしたら宜いか分らぬので、學問をしたいとは思ふが學者として果して世に立てるか分らぬ時代である、で出來れば人生に就いて眞面目に研究し、自分だけでも安心がしたいといふ樣なことを答へた、すると咄嗟に「出來れば」といふ語を捉へて、それは惡い、出來ると言ひ玉へ、出來るといへば宜いのだ、諸君には如何も妙に餘計な謙遜があつて困る、究竟自重が缺けるのだ、自負が足りぬのだ、志立つて道は始めて行はれる、以來は出來るならばなどいふ語は人の前で言ふてはならぬ、實際出來ぬと思つても默つて居るが宜い、口から外に出すべき語ではないと言はれた。

之には我々を奬勵するといふ方便的精神も混つて居たであらうが、能く博士の平生を見るに博士その人の氣質が矢張り斯う言ふ風であつたやうだ、强い强い自負心があつた、自重心があつた、平時内に居られる時は非常に溫和しい物優しい人が、扨て壇に立たれたところを見ると丸で別人の想がある、否何も講壇とは限らぬ、凡て公席會上廣人稠坐の前に立たれる時には平生の博士の態度は何處へやら消え失せて居る、端然と襟を正して思はず威容を仰がせるといふ風で、精緻な論調により侃諤舌鋒を振はれる、それ故惡く言ふ人は聊か氣取つた人だともいふ、けれども何も敢て氣取られたのではない、若い時から自重といふ事が習慣になつて、從つて此樣な態度にも自然になられるのであらう、曾て谷本（梨庵）氏相誓つて、君と我とは天才を以て任じやうといはれたとやら聞いて居る、斯かる自重の精神といふことは、慥に博士の性格の一面の觀察であると思ふ「之は差當り私の博士に就いての追懐の一節であります。（談話筆記）

大西祝氏

戸川殘花

小學校以來の秀才でした、岡山の小學校を卒業して同志社へ入り、その普通科を終つてから更に神學部に三年間居り、それから東京大學に入つたのだが、その入學試驗にミルトンのパラダイス、ロストの原文を書く暗誦して居て書いたといふ事だ、此一事でも氏の器の凡を拔いた居た事が知れやう、大學を卒業してからは更に大學院に入つたのだ、

又氏の人と變つた點は、氣が屈すると數學の難問を持ち出して解釋する、之が一種の娯樂とまでなつて居た、腦の明晰（クリアー）なことは之でも知れる。

學問の方向は先づ哲學を推すより外ない、宗敎は勿論研究されたが、基督敎に就いてすらも說はまだ一定して居らなかつたらしい、文學は頗る多方面であつた、西洋文學は元よりの事、日本文學に於ても仲々能く讀まれたものだ、西洋の詩人では誰を好まれたか、それは一寸分らぬが、日本のものゝ特に德川時代のものでは默阿彌ものを能く讀んで居られた、西鶴の小說なども讀まれた、まあ所有、輕文學に目を通されたものだ、死ぬる前になつては佛學をもやられた、が頭は如何しても禪的ではない、それ故寧ろ天台を讀まれた方だ、自分でも言つて居られた、天台はヘーゲルに似て居る、それ故ヘーゲリアン、フイロソフイ(ヘーゲル哲學)を知るには、天台を讀むと益するところがあると、佛敎には頓漸の二門があるが、氏は如何して頓の方ではない、漸の方である、禪宗とは緣遠い方である、此樣なことは公に言つて貰つては困るが、能く私を評して、君は敎育（エジュケーション）は基督敎だが生來は佛敎だなど言はれた、批評の中にも此樣な語が混る位だから、佛敎を研究された事は知れて居る、漢詩の話はされない樣であつたと思ふ。和歌は池袋淸風といつて矢張り基督敎徒であつたが、その人の弟子で同志社以前から詠まれたものだ、左樣ですね、餘り上手な方ではない、俳句は分らない樣でした、西洋音樂は好きな人であつた、でも生れ付き耳のある人ではなかつた、調子外れをして居つても、それを自覺はせなかつたのだ、氏の家庭は極めて溫和でした、妻君は精養軒の支配をして居る人の娘です、島村(抱月)、松村(介石)、中桐(確太郎)の三氏と私などいふ、何でも四五人の連中で氏の爲に追悼會を開いたことがありました、その時に、早稲田の講堂で破

れる樣な聲の折々したのは大西君の講堂であつたと、之は坪内(逍遙)氏の語られた所と記憶する、講義振りも中々振つて居たものと思はれる、氏は又新體詩が好きであつた、けれども氏自身の新體詩には斯うといふものは無かつた樣だ、唯新體詩なるものに興味を有たれて、日本の新體詩には大に改良が必要だとなし、骨を折られたまでのことだ、

氏の人物を一括して言へば、究竟博覽強記で明晰の頭腦のあつた人だ、私をして評せしむれば、綱島梁川氏の樣な狂的の、狂的といつては語弊があるが、先づ彼の樣な頭では無かつたし、又高山(樗牛)氏の樣な衒學的といはうか、之にも語弊が伴うが、言へ換へれば日蓮樣的の頭ではなかつた、頗る溫和着實な人でした、氏の同胞も皆賢明な人で、一人は木俣陸軍少將である、今一人は大西きぬといつて產業學校の學監かなどして居る人である、お父さんは、田舍氣質の篤實一方の人、お母さんは利發な人で、氏は兩親の長所を併有して生れた人だ、軀幹は小樣の人でした、獨逸へ行つてから懷鄉病を起された、獨逸在留の日本人とは氣が合はなかつたらしい、學問がある上に自信力が強く、從つて自尊心も在つたのだから、兎角褒められなかつたと見える、歸國された時には餘程危險な狀體であつた、綱島、松村の二氏と私と出迎に行き、松村氏に手を引かれて歸つて來たのだ、それから後は京都へ行き、更に岡山へ行つて靜養されたが、發狂とまでは行かぬけれども慥にヒポコンデルでしたね、障子に蟲が飛んで來て紙を叩いても顏を顰めて怒つたといふ風でした、此樣な具合で終に中道で挫折して了つた、惜いことでした、明治の天才即ち綱島、高山、及び氏と三人言ひ並べて來ると、その中で一番溫厚な君子人は氏でした、その代りには高山氏等の樣に文を舞はすといふ事は出來なかつた、文字を作ることも下手でしたが、讀み損ひをされぬ書體だ、氏自らも文字は讀み得るを以て能とするといつて、唯叮嚀に書くことを勉めて居られた。

(談話筆記)

大西博士の獨逸よりの書簡

博士が獨逸留學當時に、知人戸川殘花氏に寄せられたるものにて、繪畫音樂その他文藝に關する雜信二をば、氏に強請して此處に公にすることゝはしぬ、氏に對して茲に謝意を表す。

其後は御起居如何や、クリスマスの本家ほどありて

昨夜より今明日へかけては見ものなり、當地にては西洋音樂の粹を窺ふ機會多し、日本畫は西洋畫に比して棄つべからざる處ありと思はるれど、日本の音樂は比べものにならず、此頃傍ら獨逸最近の文學に注意し居れり、音樂も繪畫も文學も著大なる變動を經過しつゝあることは一目瞭然たり、宗教上カトリック教の勢力は兎も角も恐るべきものなり、リチル派の神學などは一向に振はず、力あるものは blind belief か scientific method かの二つなるべし、日本の政治、文學界は如何にや、當國は輕業的に一大國を形り居る如きの觀あり、プロシヤの勢力衰ふれば瓦解は目前なり、乍筆末御全家の御安泰を祈候

一八九八、一二、二五、

獨逸國萊府にて

操山生

* * * * *

第二信

其後は無沙汰仕候、御全家御變りもあらせられず候や、美術一册御郵送被下、面白く拜見仕候、故國を出でゝはや一年餘の歳月を經過致候、日本の物は何でも當地の人に珍しきのみならず、自らさへ之を見て珍きやう思ひ候、をかしく候、小生は八月頃迄當市ライプチッヒに留まり是れより伯林へ行く積に候、今後御通信被下候節は伯林公使館宛附にて御送り被下候方都合よろしく候、此葉書と共にアルブム一册（わざと昨年の分）及歌舞伎新報一册御郵送致候、御暇に御一覽被下度候、歌舞伎新報を開いて左にある肖像は、當市にて名ある歌うたひにて候、ロルッイング作のオペラ Regina の舞臺面にてオペラの賑かなる處御覽なされ度候、アルブムの中央にあるマクセン燒の美人形は一見の價可有之歟、何時も々々の葉書にて御免蒙り候、御全家の御安泰を祈り候、

一八九九、五、十三、

ライプチッヒにて

大西祝

大西祝氏

島村抱月

早稲田で三年級まで續けてお世話になつたので、特

に私などは色々なことを伺つたりなどして多く教を受けた方と思ひます、先生の人物てすか、先あ一言て言へば完全な人格といふに歸するてせう。知識も彼の通り。論緒を見出すといはうか、論脈を辿るといはうか、兎に角論陣の布置には最とも明敏な頭を有つて居られた、同時に才氣も縱横てあん、それに感情方面の事まて十分に理解が出來て居られた、それ故歌なども或る程度まてには作られた、品行の點を言つても彼の通り、義務は堅く守り責任は深く重ぜられ、勉學には力を籠められる、殆んど間然する點を見出さない、後に高等師範の方へ奪はれて其處から洋行される樣になつた時には、早稲田の人々は痛く失望の體てあつたが、その間に早稲田に殘された感化といふものは大きかつた、否今と雖も猶ほその感化は殘つて居る、無論早稲田の文科には坪内先生が中心となつて文科の勢力をなして居られることは十目の證するところてあるが、次に副として立たれた大西さんの感化力も亦大なるものてあつた、此意味に於て大西さんは猶ほ早稲田に於て長へに生きて居られる人てある。

其の學説に對しては私は別に深く研究しては居りませぬ、行く／＼はミッシリと相應の批評家を得て判定を下すべきであるが、私の今言はんと欲するところではないから止すとして、要するに一通十分に高遠な處に頭腦を据えながら、常に常識の方面を忘れないて實際と理想とを併せ行かれた點が一の特色てある。平素よく聽かされたことで今でも猶ほ耳朶に殘つて居るのは、活動主義及び相對理想主義といふ語てある、相對理想主義といふ事の意味は、理想は固より絕對最高のところに無ければならぬけれども、單に絕對最高のところに在るのみては實際と何等の交涉がない、それ故絕對理想をば暫く相對理想に引き下げる、而して之に向つて精進せねばならぬ、その引き下げた相對理想に軈て近づくに從つて、更に之に對して一歩進んだ理想を立てる、吾人は常に相對理想を追うて進歩せねばならぬといふのだ、大西さんが敎場に現はれて講義をされる時には何時とはなしに熱誠が加はる、ホンノリと顏が赤くなる、哲學の中にも感情が燃えて來るのであらう。例へば論理學の如きは誰が聞いても面倒臭い、手數のかゝるいやな學科の一つてある。それにも拘らず大西さんの論理學だけは皆が興味を以て默つて聽いたものだ。熱誠があらゆる學科を從へて生命あるものとならしめた事の一證となる。

氏の和歌は桂園一派の流れを追ふて中には哲學者風の思想の潛んだ面白いものもあつた。又文學に於ける鑑賞力もあつた、小說なども能く評され、六合雜誌などに載せられたが、當時の水平線上に立つて、專門の批評家に對しても遜色が無かつたのだ。

之を要するに大西氏は知識と感情、理想と現實との調和點に立たんとされた、又たしかに立ち得られた人と思ふのが私の考である。（談話筆記）

大西祝君

横井時雄

大西君が學者としては非常の俊才であり、又學問が各科に亘つて能く出來たといふことは、最早言ふまでも無いことだが、その人物の特色をいふなら寧ろ敎育家といふ方にあるのだ、その學問を以て後進を誘掖し人才を養成するといふ點にあるのだ、が、唯一ケの學者として評しても、既に幾多の著述に見て明なる如く、當時てすら嶄然として一家を爲して居た次第であるから、尙まだ生き存へて研鑽を怠らなかつたなら、有數な學者として世界にも名を知られたかも知れぬ、否知れぬどころでは無い、優に知られ得られるだけの才であつたと認めねばならぬ、

けれども學問をするに就いては、他の學者とは趣を異にして、君には毫釐にも忘るゝことの出來ぬ點があつた、それは人生の實際に如何なる關係を及ぼすかといふことである、或は道德の方面に於ける交涉は如何或は宗敎の方面に於ける影響は如何といふは固より、更に晩年に於ては廣く國家の前途にも顧みて、考察を怠られなかつた、

實際的に研究するといふ事は、或る意味からいうと姑息的になるものだ、純粹な態度からいふならば、道德の根底を打破し、宗敎の根底を打破し、今日の所謂る文明なるものゝ一切をも打破し盡し、再び元の暗黑に歸ることありとも、眞理は眞理である、之を研究せなければ止まぬといふ風でなければならぬ、餘り實際的に流るゝものは姑息に陷り、純粹なる學者的の價値を毀損することがある。

されば大西君の如きも、或る一部の人から批評させたならば、寧ろ研究の結果を大膽に徹底させるだけの勇氣が乏しかつたといふも知れぬ、畢竟は人生問題

對する利害關係の念が強い爲に、純粹に眞理を研究するといふこと、即ち或る意味からいふと放膽なる研究の仕方が出來なかつたといふも知れぬ、

斯樣に言ふなら言へもしやうか、當時からすれば頗る大膽に研究したものと認める、その批評眼の如きも甚だ銳利で、一部の人には、隨分危いと見らるゝ點にまで到達すると疑はれた程だ、仔細に見て行つたなら、純粹の研究からせば足らぬところがあつたも知れぬ、又倫理道德における實行的方面から眺めたら、或は危激に亘つたところがあつたも知れぬ、が常に兩者を顧みて相混同せしめもせず、相分離せしめもせず、學理を實際より離して出來るだけの研究をやりたる上に、又實行の方面をも閑却せずに學理と相並ばせて進路を取る樣にした、その態度は當時に於ても將た今後に於ても實に氏の特有とすべきである、此邊から考へても如何にも君は拔群の學者であつた、

氏は學生に對して甚だ勢力があつたといはれて居るが、それは何處から來て居るのか、君の學生に對して親切であつたこと、學生を薰陶するに注意を拂つたこと、單にそれ等から來て居るかといふに、私の考からすると左樣ではない、學生を感化したのは重に學識ゝ點にあると信ずる、着眼が常に凡俗を拔いて居つたこと、議論の仕方が緻密で、用意の周到であつたこと、論理が精細であつたこと、更に材料が豐富であつたこと等、諸要素が盡く備つて居た。學生を感化したのは以上の點からである、即ち括約して言へば學識である、勿論その間に、君の誠實なること、謙遜なること、親切なること、及び自らの心に持ち居る高潔なる理想、更にその焚ゆるが如き向上心といふ樣なものが、如上の學識に附隨して居つたには相違ない、究竟(つまり)いへば後に枚擧した諸德は器械に於ける油の如きものである、油を注されて器械は運轉する、大西君なる人物はその諸德によつて躍動したには相違ないが、而かもその躍動した根本の力はといへば學識そのものである、が學識がその如くであつたにしろ、夫の感化の偉大なること世の稱するが如きに至つたのは、矢張り君の人格の然らしむるところとも言はねばなるまい、けれどゝ單に人物を以て論ずれば、新島先生などゝは正反對である、新島先生の人を感化した點は、學問よりも寧ろその德望である、德望の高い處である、更にその熱情の焚ゆるが如き處である、學問上にも研究心を起さしむるといふ結果はそれから來たに止まる、であるから大

西君とは表裏正に相反して居たのだ、稟質が既に斯樣てあるから、新島先生の如きは大に學校を經營し得る器てあつた、人物を養成するといふ樣な、社會的國家的方面に於て活動する勇氣が非常に有つた、大西君に至れば、斯樣なことを必要とは思つたてあろうが、志の趣くところは學問てある、それ故君をして學校を經營せしめたならば、固より新島先生には及ばない、又高田(早苗)君にも及ばない、けれども單に學者として立ち、それて後進を誘掖するといふことは、獨り大西君の壇場てあつた、その獨得の技倆は、恐らくは新島先生をして今少し生き存へさせたならば十分に認識されたことてあろうと思ふ。

氏の人格に就いて今一つ言へば、唯その親切とか眞面目とか向上心が強いとかいふのみてなく、別に一種の義氣があつた。それ故或る場合には無謀のこともやり兼ぬといふ人てあつた、假令ば、學問ていふなら、單に學問を說いて後進を誘掖すれば濟む樣なものの、君は世の潮流が誤つて居れば、直にそれに反抗した、大に奮鬪しやう、議論しやうといふ勇氣があつた、又假令先輩といつても、その人達が姑息の議論に陷つて居れば、何の會釋もなく大に議論を試みたこともあつた議論を好むといふてはない、唯國家の爲社會の爲には默つては居れぬといふ、一つの義俠心から動いて居たのだ、それ故先輩が名利の爲に姑息の議論でもして居れば、胸糞惡いとて突つ掛つて出たこともあつたと思ふ。

私は大西君の人物を評して端なく彼のフイヒテを想ひ起す、フイヒテは拿破翁戰爭の後期に於て蹶然刀を手にして起ち、プロイセンの愛國心の興起に勉めた、その筆を投じて戎軒に從つた哲學者の熱誠は大に士氣を鼓舞したといふ事だが、大西君にもそれ位の勇氣は有つたのだ、いざとなれば事の成敗利鈍を顧みずして敢然として起つといふ勇氣は有つたのだ、學者として立つのみてはなく寧ろ義人てあつた、一朝事ある場合には學問をも抛つて邁往する人物てあつた。

併し斯かる氣質も有つたといふだけて、天分は矢張り學問にある、それ故上述の樣な場合があるとしても、君は參謀官として謀を幃幄の中に廻らすの人てあつた、即ち世の激流に立つて爭ふとか、或は國事の爲に自ら干戈を揮つて斃るとか言ふ人てはなかつた、荒つぽい人てはなかつた、けれども斯かる事には必ず參加した人てあつたと思ふ。

更に譬へば君はクロンウエルに於けるミルトンの如きことの出來た人であらう、此處にクロンウエルがあつたとする、クロンウエルの時代があつたとする、然らば君はミルトン位の事は確に爲し兼ねなかつたと思ふ。

個人としての君を見るに、常に粗服を着け粗食を食つて居た、儉約な人であつた、だが貯へて置いた金をば友人の爲とか後輩の爲とかに出したことは度々あつた、而かも君に偉とすべきは、此樣な事をしても一寸も人に語ることをせぬ、平氣でやつて氣付かぬ風で居る事である、此處等が一寸普通の人には學び兼ねた點だ、

斯樣な人格であるからその人に及ぼせる感化力といつても、單に口で斯く語つた、手で斯く行つたと丈では盡し難い、大西君と同じ事をしても大西君の精神がなければ感化の力はない、君の精神は常に國家の爲、人類の爲に盡さうといふ、他の爲にする犧牲的精神から出て居るのだ、君の念頭には博士となつて譽を得やうとか、事業をやつて名を知られやうとか、或は産を作つて子孫の計を爲さうとか、斯樣な考は人間であるからには多少あつたとしても、敢て之が爲に爭はんなどいふ量見はなかつた、一切それ等を忘れ去つて單に眞理を研究する、人物を養成する、國家の爲に貢献する、といふ態度が餘程あつたと思ふ。

他と比較して他を貶さうとするではないけれど、世には大西君以上の學者もあらう、道德、宗教の方面により多く盡した人もあらう、が私の見るところからすると、大抵な人は已れといふ觀念を常に忘れない、それ故する仕事に自づと一種の習氣が現れて來る、此習氣は大抵な人には離れない、大西君にも、全然無いとは言へぬか知れんが、兎に角それを犧牲にするといふ芳しい精神があつた、人に尊敬されたのも此芳しい犧牲の精神の力であると見るのが正しいと思ふ、多少子孫を思つたにしろ、美祿を思つたにしろ、將た名譽を思つたにしろ、人間はそれ等を忘れて國家に盡せば、それ等は招かずとも自ら來るといふことを確信して居た人と思つて居る、(談話筆記)

十二月一日發行　第十二卷第三號

定價改正

一部廿錢　郵稅壹錢

ほとゝぎす

俳書堂雜誌部發行

東京市麴町區富士見町四ノ八（振替貯金二二五〇番）



虚無

三島霜川

「いや、何にしろ好いとこさ、來て呉ンなされた。俺がにア、はア、何んとも爲ること出來ねえて、弱りきッてゐちよッたとこてでござります。」

「然うかね、其様なにお成ン成すッたのかえ」と蓮子は微に歎息して、「矢張御病氣の故なのかね。」

「さ、何様だもんだかね。」と作藏は大きな禿頭を引ン曲げて、「俺ア何んか取ッ付いてゐるでねえかと思ふだかね。氣が觸れてゐるだか思ふと、其様な風も無えだし…… 謂はッしやる事ンても、お行ンなさる事ンても、そりや正氣だ…… 正氣だて尙始末においねえでござります。これが寧のこと氣が觸れてゐるちふだら、其處にはまた爲様もござりますけんど。」

「だけと、そりや氣が何うかなッてゐらッしやるに違ひないわ、てなけア、お前、幾ら何んだッて、其様な思切ッたことが出來るものぢやないわ。」

「理屈は然うでござります、誰方が聞かしたとッてね。」と作藏はドンヨリした眼を据えて、瘠の故か、ひッきりなしにビリ〳〵頭を振りながら、「何うも解りましねえ。何様だ量見てゐさッしやるもんだか。」

「それとも何んぢやないのかえ。何か事業にでも手をお出しなすッて、其の失敗から、借金でもお出來になッたのぢやないの。」

「いンにや、旦那樣が何んで借金あんちふものをなさるもんて！　俺がには何んの事ンだか、其の理屈ちふものが解りましねえけんど、何んでも旦那樣ア、自分で物ゥ持ッてゐるのア罪惡だ……　此の宇宙に人間一人の所有と定ッたものがあるもんでねえ……　一人の所有と定めてゐるちふのア、人間の勝手で、そりや罪惡だ……　と此うね、びッして俺がに謂ッて聞かせてゞござります。だで莫大な田畑賣却してドン／＼人に與れたり寄附したりして、僅か五年經たか經たねえうちに、彼樣だ大身上を何んも無えやうにして了ッたゞね。」

「まア、何うなすッたといふんだらう。其樣な亂暴なことをなすッて。」と眉を顰める。

「俺ア學問の毒だと思ふだね。」

「學問の毒ッて？」

「さ、何んちたら可いだか……」と作藏は些と考へてゐて、「だちて、然うだッぺえてねえか。旦那樣ア、貴方がゐるさッしやる時分から、いッつでも書ばかり讀むでゐさしやりました、今でも然うでござります、讀むでは何んか考へてだ、相變らず薄暗い室さ閉籠ッてよ。俺が考へるに、此の考へるちふことが好くねえ事ンだ、人間考へるちふと、碌だこと考へるでねえだから！　そりや人間考出したら、木の芽がふいた、木の葉が落ちたちては、其樣だ事をえら不思議だ事のやうにして考へてゐさしやります。然うだか思ふと、何んだちて火が熱いだとか、何故人間が生れたゞかちてね、ひよんな事を考へてゐさッしやる……　頭腦の中さ、何んか粘付いて引ッ掻廻してゐるもんだかさ。」

「眞ンとにね。」と蓮子は憎ッとした顔て、氣の無いやうに謂ふ。そして、「矢張御病氣の故なんだらうよ。」と呟いた。

「病氣かね。」と作藏はまた頭を傾げて、「尤も先の旦那樣ちふ人も、變ッた人でござりました。えら體の頑丈だ、氣の荒い代には、快活だ人だッけがさ、其ンでゐて、時々妙だことを謂はしたり行らしたり……例へて謂ッたとら、十日も斷食してござらしたり、深更にフイと家を飛出さして、夜明方に眞ッ蒼だ顔をして歸ッてござらしたり、そりやひよんだ事をさしやりました。揚句に、（俺等は何時まで活きてゐるんだな、死んだら何處へ行ッて何樣になるんだらう）と屢く俺がにも仰ッてゞござりましたが、其から間も無く、馬から刎落されて、運惡く摚ち局所が惡かッたもんでね、何んとも謂はず、偶然お陀佛さ。其の馬ア、貴方も知ッてゐさッしやる筈だ……今でも厩に繋がれて、遊んで秣べえ喰ッちよりますだ。」

「ま、あの馬が尙だゐるのかえ。」

「居りますだ、俺と同じ事ンてね、年イ老ッて、よぼたれてよ。はア、何んの役にも立たねえだけんど、矢張活きてるだかんね、其ンて旦那樣に面倒ウ戴いてゐますだ。先の旦那樣ア、あの馬のことをえら可愛がッてござらしたゞかんね。」と言を切り、眼をしよぼ〳〵させて、「したが、あの馬も、はア幾らの壽命でもねえさ。俺も然うだが……お互に間も無く土に化りますだ。」

其の聲はシンミリと蓮子の胸に泌込むで、冷な寂寥を誘ふ。何うしたのか、彼女はふいと、ハラ〳〵と涙を零す。

「何樣にしたゞね。」と作藏は、眼をきよろつかせる。

「いゝえ、何うもしやしないんだけど……」と蒼ざめた頬に蒼白いやうな薄笑を漂べながら、「私も、此の頃妙に精神が鋭敏になッてゐるもんだからね。」と鼻を塞らせてゐる。

「貴方も、また不幸な人だかンね。」と作藏も打沈む。

蓮子は默ッて、さも頽然した體て、稻塚に靠れかゝッた。兩人は人目を避けて、村道から離れた大きな稻塚と稻塚の間に蹲むで話をしてゐるのであッた。十一月半ばの空ッ風は、時々さッと吹付けて來て、其處らの木立に當り散らし、木立は悲鳴を擧げる。櫟や榛の樹の葉は大分散ッて了ッて、林と謂はず木立と謂はず、疎に痩せ細ッて、淋しい衰殘の影を示せてゐた。其處らに散亂ッてゐる葉屑や木の葉が、ワナ／＼顫へてゐては、少しづゝ飛ぶ。蓮子は何んといふことはなく顫えてゐる葉屑を熟と見詰めた。

フト胸の皷動が微に耳に響く…… と謂ッて、皷動が高まッてゐるのではない。

「おや、熱でも出たのかしら。」と思ッて、密と額を押へて見た、が何んてもない。直に氣が沈みきッて、そして神經が鋭くなッてゐることが解ッた。襟元から袖口から風が吹込むで、冷ッこく肌に觸る。體が惡くゾク／＼する…… と、もう身裡の血が冷めて行くのではないかと思はれて、何がなし情なくなッて來る。何しろ體は疲れきッてゐた。氣も懶い。口を利くのも嫌だ、何を考へるのも嫌だ。

「何うして此樣になッて了ッたのだらう。」と思ふと、また底止もなく涙が出て來る。其處らが全て暗く冷いやうに思はれる。幾ら心の底を探ッて見ても希望の分子がない。されぱと謂ッて、過去の夢を回想して見るだけの根氣も餘裕もない。氣が頽れきッて、感じも萎縮してゐる。蓮子は惘ッとして了ッた。

何かの拍子に、見るともなく作藏の顏を見た…… がッくり刳けた頬や、皺だらけの廣い額や、穴の大きいひしやげたやうな鼻や、眥の長い眼を瞬せてゐる眉や、鼻から唇にかけて馬鹿に距離のあること

や、其のまた距離の間に胡麻鹽のやうになッて鬚の延びてゐることや、大きな長い前歯が一本ヌッと飛出して厚い下唇を押へてゐることや、其のまた唇があくどく紅いことなどが細に眼に映る。そして手ても足ても肩ても、全く體が不恰好に大きく出來てゐることが今更のやうに目に付く。

「これても人間なんだらうか。」といふ感じが幻のやうに胸に閃く。何んだか衰弱した原始時代の人間かさなくば死期の近づいた大きな猩々ても見るやうな心地がする。同時に謂ふに謂はれぬ嫌惡の情が胸を衝いて來る。

作藏は稻塚から藁束を拔出して、其の上に胡座をかき、片足づいと投出して、固く兩腕を組み、何事か深く思ふ眼光て、默然と頭を低れてゐた。足には淺黄のつぎはぎの股引を穿き、身には刺子のやうな布子を着てゐた。赭くテラ／＼光ッてゐる腦天に、恰て鳥の柔毛のやうに殘ッた頭髮は、小汚なくそゝけ立ッてゐる。

人間の掃溜になッてゐる東京には此樣な型の人間は少ない。蓮子は、永らく東京の濁ッた空氣を吸ッて、毎も白粉と紅とコスメチックて造作をした顏を見馴れてゐた。で作藏の顏なり風なりを見ると何んだか奇異な感に打れもする。

少時マジ／＼と其の顏を瞶ッてゐて、

「私は、まア、何時の間に、何うして此樣なところへ來たのかしら。」と呆れ氣味て、きよろ／＼其處らを見廻した。そして此の冷い濕ッた田圃の中に、活きた殘骸のやうな體を横たへてゐるのが不思議に思はれてならぬ。

「何んだか噓のやうだわ。」

現に自分の其處にゐることが疑はれる。眴すと成程靜だ。煤煙の影も見えなければ、汽笛の音電車の響も聞えぬ。處々畦の切目から、落し水が白く日光に閃いてゐるのが見える……そしてこぼ〳〵と鳴ッてゐる其の幽韻が、恰て宇宙の秘言でも囁くやうに、奈何にも物靜に耳に入る。久しく忘れてゐた爽な音だ。彼女は熟と耳を澄ました。

意識はまた分明になッて來た。そこで彼女は現に何うして此處にゐるかといふことに就いて考へて見た。考へるまでもなく其は直に解ッた。

「然うだ、私は舊の所天に逢ひに來たんだ……急に懷慕しくなッて、前後の辨もなく！」と氣が付いて、また呆れる。宛然熱の冷めたやうな心地て、「何んだッて、まア、狂人染みてるわ。幾ら何んだッて、お互に七年も音信をせずにゐて、何んの事ッたらう、馬鹿々々しいぢやないか。そりや何うせ本氣の沙汰ぢやないのだけれども、其にしても私はもう昔の私ぢやなくなッてゐるのだし、何の顏を下げて逵男さんに逢ふ積なんだらう。いゝえさ、逵男さんにしてからが、矢張男だ……何時まで私のことを思ッてゐて呉れるやうな正直者ぢやないわ。」

考へると情ないやうに氣が沮むで來て、一種謂ふべからざる苦惱は、チクリ〳〵針で刺すやうに心に喰込むで來る。

「私は、もう噛むで吐出されたやうな人間になッて了ッたんだ。」

彼女は煩縟さゝうに後毛を掻上げて吻ッとした。そして疲と惱と寢不足とにドンヨリした眼を擧げて大空を仰いだ。斜に落ち來る午後の光線は、もう冬の冷氣を籠めてゐるが、空は明い……物を蒸したり乾したりする光てはなくて、單白く照らす光だ。其の光が遠空に漲ッて、空は鮮に深く澄みきッてゐた。

北、南、處々に鳥の羽根を飛ばしたやうに淡い雲が漂ッてゐる。

「何んといふ好いお天氣だらう。」と蓮子は老人めいた歎息をした。何故歎息したのか自分にも解らなかッた。

彼女は、フト其の明い光に照されて、かッきり地に印されてゐる自分の影を見た。そして自分の姿を見た。うらぶれて、淋しいしよぼたれた姿であつた。洗洒したガス絲の白ッぽい縞の袷、それでも袖口にメレンスの友禪の色の褪めた襦袢の袖を見せて、擬琉球の、それもメラ〳〵になッた書生羽織を被ッて、埃と垢とに汚れた白足袋に鼻緒のゆるむだ低い吾妻下駄を履いてゐた。持物と謂ッては、古ぼけた深張の蝙蝠傘一本。それが虛榮の名殘て、地は織出しの模樣のある黑い地の絹てあッた。何等の光彩の無い姿だ。

「此樣な風をしてゐちや、誰だッて女ゴロッキとしきア思やしないわ。」と倩々と自分の身が淺猿しくなッて來て、「寧來なけア可かッた！」と放心口へ出さうとした。

何んだか自分が、此の明い空濶な場所に抛出されて、何かに壓付けられ小突かれてゐる、哀な小ッぽけな影のやうに思はれてならぬ。氣がいじけきッてゐたのだ。

彼女はフト思立ッて、急に東京を出發したので、昨夜東京では、冷な雨がショボ〳〵降ッて、町は暗く、路も惡かッた。其の泥濘の中を濡れしよぼけて、ベチャンクチン低い吾妻下駄を引ずりながら、小石川の奥から本郷の電車まで出た。それから電車で新橋の停車場まで來た。そして九時といふに汽車に乘ッた。汽車の裡て終夜夜寒の冷氣と不安とに惱まされながら、今日の午少し前に汽車を下りた。それから四里ばかりの間をがたくり馬車に搖られる道順となる。そこで蓮子は汚ない馬車に乘ッた。乘りは乘ッたが

何んだか氣がいじけて、他に顏を見られるのが嫌だ。で馭者臺に近い隅ッこに小さくなッて、斷えず外を眺めてゐた。乘合は都合十人で、何れも近在の百姓ばかり、それで馬車の裡はぎッしりだ。人いきれか、馬の蒸か、一種嫌な蒸が輕く鼻を撲つ。加之馬車はガタピシと馬鹿に動搖する。で胸がむかついて來る。車輪の響はグヮラ／＼と破壞的に轟く。で耳が鳴ッて來る。道子は始めて此樣な馬車に乘ッたので、不快も不快だが、一種の物怖に斷えず胸を惴々させて、何んだか自分が囚人となッて暗い國にでも送られて行くやうな心地がするのであッた。彼女はともすると自分の影の薄いことを思ッた、すると墮落の悔恨がヒシ／＼と心を嚙む。

時々喇叭の音が濁ッて不愉快に聞える。また時々嚙付くやうな叱咤の聲と、激しい鞭の音と哀しげな馬の嘶とが聞える。馬車は馬が二頭で挽いてゐた、何れも瘦ッこけて、腰の骨が尖ッて飛上り、肋骨が歷々と醜になッて現はれてゐた。手綱に傷けられてか、背には肉の露はれてゐる部分もある、背も腹も汗で濡れしよぼけて口から白い泡を噴いてゐた‥‥　泡は何うかするとポタリ／＼地に落ちて、車輪が其を蹴散らして行く。腹は膨れたり、窄まッたり、恰で波を打つやうだ。

「何んといふ慘酷な事ッたらう。」と思ッて、道子は成べく其を見ぬやうに力めてゐた。

馭者は妄と鞭を鳴らしてゐた。乘合は平氣で笑ッたりしやべッたりしてゐた。道子は何んといふこともなく其が腹立しくてならなかッた。

馬車は村を出ては村に入り、大きな松並木に入ッては松並木を出て、蒸の重い割に僅な埃を擧げて駛ッた。初冬の日は靜に照ッて、沿道の村は薄ッすりとガスに籠められてゐた。道子は、ふとすると白く閃いてウネ／＼と野を流れてゐる小川を見た。またふとすると日光に煌いてゐる林の影を見た。または小

學校のガラス窓、掲示札、庚申塚、人燒場の煙突、避病院の白堊、寺、宮、森、畑、種々の物象は、幻の如く眼に映ッて幻の如く消えた。たゞ盡々と此の國を繞ッてゐる濁黑い山の影だけが何時までも目に付いてゐた。其の中で最も高い山の頂には、もう雪が來て居て、其處だけは際立ッて明い。何うかすると燦然と輝く瞬間もあつた。半腹位から下は、もや〳〵と薄暗くなッてゐた。近いところには赭色の兀山も見えた、また雜木に蔽はれた丘も見えた、丘に沿ッて遙〳〵と散點して居る村や村の森も見えた。野は街道の左右に開けて、遙に其の丘で劃られてゐた。街道には荷馬車や駄馬や旅客が、ひッきりなしに通ッてゐた。また街道に沿ッて、哀な飲食店や木賃宿や穢ない旅籠や其の門に柚が黃に色づいてゐる村の鍛冶屋や駄菓子や雜貨を賣る店や軒端に眞ッ紅な柿を吊してゐる休茶屋なども見えた。遵子は無意味に其を見た、また何んといふこともなく見送ッたこともあッた。雖然何に一ッとして印象の殘ッた物が無かッた。尤も其等の物象と影とは全て彼女の記憶に新しかつたので。思做か、其の物象も、陰影も、明い光に照らされながら、而も暗く打沈むでゐるやうに見ゑた。

彼女はフト自分が其の物象の中に育つたことを思浮べた。そして尙だ小娘の時分、暖くうす霞む中に夢心地て野の花を摘むてゐたことや、または炬燵にうづくまつて、母に人形の着物を縫つて貰ひながらしめやかに面白い昔話を聞いてゐたことや、それからまた宵闇に螢を捕へに出たこと、雨の日を母にせがむて柿をちぎつて貰つたことなどが、夫から夫と鏈のやうに繫つて、恰て鳥影の映すやうに胸に閃く。而ると柔な手て胸頭を撫でられるやうな心地がしながら、それでゐて耐力もなくうら悲しくなつて來て何時とはなく涙が冷に頰に傳ふるのてあつた。

此くて遵子は二時間半ばかり、不快と、悲哀と、淋しい思を繰返しながら馬車に搖られてゐた。そして

宛然甦つたやうな心地で馬車を下りた。それから更に八町ばかり、濕ッた凸凹の村道を蝙蝠傘で顏を隱し、それでも斷えず胸をどきつかせながら、トボ〳〵と此の村端に着いた。其處で彼女は村に入らうか入るまいかと迷ッてゐた。處へ運好くも作藏が偶然來合はせて呉れたので、直に捕へて、舊の所天の事や其の家の樣子を訊ねたのであッた。

蓮子はもう卅に手の屆いてゐる年だ。普通の教育を受けて、嫁いたのが十九の時で、所天とは足掛四年一緒にゐた。根が熱烈な相愛の關係から緣が結ばれたのであッたから、從ッて所天は妻を愛し、妻は所天を信ずるといふ風で仲も好かッた。然るに蓮子が廿二の春、或る異常なる出來事――兩人に取ッては大なる禍だ――此の禍の爲に、兩人の間に大なる斧が加へられた。所詮所天は無理に蓮子を突放して了ッたので。離婚された蓮子は、自立して獨身生涯を送ると謂ッて東京に出た。

それから七年になる。蓮子の顏も、體も、感情も　心も大分變ッて來た。彼女は老孃の品性を保ッて、身を潔くして行くには餘りに美しかッた。また餘りに體質が熾であッた。で何うかすると心の底に微動する靈の力も、多くの場合に其の體質――熾な肉の力に消壓される。加之輭弱い淋しい心は、斷えず何物をか求め、何物にか縋らうとして憧れる……　言を換えると、彼女は何時も操られるやうな性欲に氣負がして自己を忘れて了ふのであッた。殊に都會には色魔が多い。彼女は此の色魔の爲めに誘はれ幾度か穴に陷ち、また自ら色魔を誘ッて穴に陷したこともあッた。彼女は多くの男に喰散らされ、また喰散らした。從ッて濁ッた都會の空氣は、彼女の心に體に浸潤して、所謂活きる悲も知り、あらゆる浮世の辛酸を嘗め盡した。彼女は恐ろしく根性のすれッからしの女となッて了ッた。雖然彼女は單に男に肌を吸はせるのを以て其「生」に滿足してゐる女でなかッた。處女の時代から詩集をひねくッたり小說を讀むだ

り──其は一般の女の爲るやうな虛榮心からではなく──また宗教に人生問題に眞摯な趣味を有ち淺薄ながらも多少の見解もあり、同時に多少の文才もあッて、女としては優れた頭を有ッてゐた方であッた。其れが累を爲して、彼女には何うしても看護婦や、家庭教師や、其樣な平凡な職業に甘んじてゐることは出來なかッた。殊に異常なる禍は、彼女の心に大なる變調を與へた。さなきだに鋭敏な神經は針のやうになッて、ともすると感情は興奮する激越する、然うかと思ふと氣は鬱ぐ、不安は襲ふ、寂寥は身に泌みる、煩悶は蛇のやうに絡はりつく。そして深く人生に疑議を抱いて、其の歸趣するところを見出すことが出來なかつた。其處で彼女は自ら其の懊惱を切拂はうとして、多くの書を讀むで頭の糧を作り、また思索に耽ッた。雖然何んにも得るところが無かッた……　何かに觸れたかと思ふと、直に何處にか滑ッて行ッて了ふ、そして痕跡もなく消えて了ッて、其の影すらも捕捉することが出來なかッた。此くして彼女は徒に疲れ倦ンじて、知識は、何んの慰藉も與へて吳れぬことを知ッた。其處で彼女は自己を僞ッて棄身になッた……　或は正直に棄身になッたのかも知れぬ。棄身になッて彼女は所故に血を狂はせて性欲の空影を追ッた。併し勿論其ては滿足することが出來ぬ。て斷えず何か探らうとしながらも放埓に身を持頽してゐた。何れにしても彼女の痛苦と心の空乏は、無趣味な平凡な生活に耐えることが出來なかッたので。

此くて蓮子は、彼女を知る者から、女哲學者と謂はれて、東京に出ると間も無く二三の新聞雜誌に關係して辛うじて自分を支えてゐた。併し氣の變り易いは蓮子の癖だ。彼女は何かの機に、紙を黑くしてバを得ることを無意義と思ッて、直に廢めた。以來二三年、彼女は更に無意義に、只ブラ〳〵と、男とくッついたり離れたりして暮してゐた。そして妾と酒を飮むだり夜更をしたりした不攝生の結果は、何時と

なく健康を損ねて、彼女は近頃になッて、急に肉體の衰弱と、精神の疲勞を感じるやうになッた。と同時に、殆ど病的に、舊の所天の達男が戀しくなッて來た。彼女はまた其を耐えて澄ましてゐられるやうな女でない。でひどく工面をして、踏切ッて出掛けて來た。

何しろ氣になるのは達男の心地だ。

「ね、爺や、だけど、達男さん逢ッて下さるだらうか。」と蓮子は、ふいと此樣なことを訊ねかけた。

作藏は、放心してゐたところであッたから、些とどぎまぎして、「何んでね？……」

「何故ッて、彼樣な片意地なんてすから、私、何うかと思ふわ。」

「何有、逢ひなさらねえことがあるもんて！……これが貴方の方に、落度でもあッたちふだら何んだけンど、貴方に些とでも惡いことねえだから。」

「そりや然うだけれども……」と言を切り、少時默ッてゐて、「何かえ、達男さんは、私のことを何んとか仰るやうなことがあッて。」

「いンにア、無えだ。」と作藏は氣の無い語調で、のろく頭を振り、「貴方が行がしてから、尙ンだ一度も貴方のことを謂はしたことがねえてござります。」

「然うかえ、まア。」と蓮子は、がッかりしたやうに謂ッて薄笑をする。

「尤も、旦那樣ア、思ッてゐても口にア決して出さねえ人てござります。」

蓮子は、其を聞かぬ振て、「そして、何んなの、那から、づッと一人てお在なのかえ。」

「一人さね。そりや物堅いちても、彼樣だ人もまた滅多とねえだね。此の頃ては婢さへ置かねえて、何んも彼も、俺が一人て取りしきッてゐるだから、氣骨が折れてかなはねえさ。加之那の廣い家に、人ち

たら旦那樣と俺さりだかンね、其の淋しいことちたら、恰て寺にでもゐるやうでござります。」

其の時乾燥いた空氣に反響して、トン、トン、トンと、一定の時間を置いて、樹を伐る音が聞える。何か人に考へさせるやうな物靜な響で、と聞くと、恰て地の底からでも響いて來るやうに思はれる。響は、村の黑い木立の中から出て來るのであッた。

邁子は、熟と耳を欹てた。そして何時とはなく其の響に氣を取られて、

「何んだらうね、あれ‥‥あの音さ。」と迂散な眼をして作藏の顏を見る。

「あれが、その、邸内の樹をぶッた伐ッてゐる音でござります。」

「あれが‥‥」と女にしては少し濃過ぎる眉を寄せて、「何んだか淋しくなッて來るやうな音ね。」

「格別淋しいちふこともねえだね。」と作藏は寧ろ澄ましかへッて、「したが餘り好い氣持はしねえでござります。何んだか自分等が籠ッてゐた城をぶッ破されてもするやうな氣がしてさ。」

「何んだッてまた、逹男さんは其樣な思切ッたことをなさるんだらうね。」

「何んちて、これ、別に理屈はねえさ。頭の加減てがすべえ‥‥餘り考へてゐさッしたッたもんンてね。」

「然うかね、何んにしても惜しいのね。」

「そりや惜しい段ではござりましねえ。百年二百年て、彼樣だ奧深い森になるもんてねえだかンね。何にしろ、那のお家も、もう末でござります。」

「爲樣が無いのね。」と詫しい顏をして、「何うなさる積りなんだか。」

「積りも何んもあッたもんてねえさ。行りてえから行るだね、大方那如でもしてござッたら、些とは氣が

落着いてゐるだかも知れましねえ。何時も何んもせずに、鬱込むでばかゐさッしッたゞから‥‥　自體人間何んもせずに活きてゐられるもんでねえだかンね。那の破壊が、旦那様の活きてゐる印さ。」

「巧いことをいふのね。」と蓮子は思はずニッコリした。

「俺かいふではねえだよ、旦那様が然う謂ッてござらッしやるだ。」と作藏は眞面目にいふ。

「然うかえ。」と蓮子は、眼を爛せて、「然うすると、達男さん、矢張えらいのかも知れないわ。」と呟いた。

「えらいかも知れねえちて？‥‥　ほ。」と眼を丸くして、大仰に魂消ながら、さて忌々しさうに、「貴方も狂人の仲間入をするかも知れない。」と作藏はいふ。蓮子は少し浮づッた語調になッて、「だッて、狂人と謂や、活きてる人間は皆狂人だわ。先づ第一が色情狂さ、それから政治狂人だの宗教狂人だの主義狂人だの功名狂人だの家庭狂人だの考へる狂人だの‥‥　も少し下等なものになると、威張りたい狂人もありや、金を欲しがる狂人もあるし、死にたくない狂人もありや‥‥」と放心ベラ〳〵としやべッて、フト默ッた。此樣なことを謂ッても通ぜぬ對手と氣が付いたからだ。

作藏は、「はア。」とばかり、少し口を啓けて、ポッンとして蓮子の顏を瞶ッてゐる。恍けた顏だ。蓮子は笑出したくなッた。此樣なにして活きてゐる人もあるのだ、と思ふと、寧ろ人間其物が情なく思はれる。何んだかまた妄と感情が激昂して來る。て謂ッても無駄と知りながら、

「何んだッて、其樣なに人の顏を見詰めるんだらうね。何も驚くことアありやしない‥‥　考へて御覧、考へてさ。お前も狂人だよ。お前は何んだッて、其の年になるまで、ブラッタ〳〵是ッてことも爲出來さないで活きてゐたの‥‥　死にたくないッていふ狂人だからぢやないか。正氣なら疾うに死んで了ッてゐるわ。」

作藏は激して顏を眞ッ赤にした。急込むで何か謂はうとして、苦しさうに口をモグ〳〵させながら、大きな掌でブルッと顏を引ッ擦ッて、

「こりやまた、とッぺうしもねえこと謂はしやるもんだ……俺が何んで其樣だ、狂人の何んのちて……

……謂はしやるにも大概程ちふものがあるもんだに。」

「それ、それ、それが狂人ぢやないか。慍るのが狂人の證據さ、ふゝゝ。」と冷に笑ッて、「ま、お聞きよ。私は眞ンとの事をいふのだから……お前は生涯人の臺所の飯を喰べて、ビヨコ〳〵お叩頭をしながら、女一人作えたことも無いだらう。其樣な大きな體をして酒も飮まずさ、年中馬鹿ッ正直に働いてゐて、それで何うだッたの、これから何うするんだね。家は無し、子供は無し、誰も活きてゐて呉れと賴む人もなけア、何時死んだッて迷惑する人もないぢやないか。それでも活きてゐる……活きてゐたい？　これがお前正氣の沙汰と謂へないぢやないか。」

「ムゝ。」と作藏は呻くやうにいふ。

「尤も、そりやお前ばかりぢやない。お前と同じやうに馬も活きてゐる。山へ行きア猿も活きてゐる。此の村にだッて澤山死にたくない狂人がゐるわ。百姓等は何んだッて泥塗になッて、苦しい思をしながら土を掘じくッてゐるのだらう。苦しい思をして、只活きてゐる分のことぢやないか。誰も那の人等に活きてゐて呉れと賴みアしないわ、ホラ、矢張正氣の沙汰でないことになるだらう。」と勢込むで言切ッて、さてがッかりしたやうに、「此ういふ私も、死にたくない狂人かもしれない。」と苦々しげに笑ふ。

それて氣が濟むで、蓮子はグット落着いた。落着くとあたら口に風を吹かせたことを馬鹿々々しいやうにも思ふ。勿論些と神經を小突かれて、發作的に鼓動した感情の響に過ぎなかッたので。

作藏は、ケロリとして、切に瞬をしてゐた。

樹を伐る音は尙だ響いてゐる。不意と其處らの木立がザヮ〳〵と鳴出す‥‥　風が吹立ッたので、もう黄昏に近くなッて、物の影も黝ずむで來た。大氣は恐ろしく冷たくなッた。新藁は微に爽な芬を鼻から胸に運ぶ。蓮子は快く其の芬を吸込むでゐると、新鮮の氣に停滯し沈澱した身裡の濁を澄まされるやうに思ふ‥‥　氣も幾らか輕く浮ついて來た。併し寒い。

「寒いのね。」と蓮子は肩を搖りながら、「焚火をしやうぢやないか。」

「焚火をね、そりや爲て可いだか、何んだら、はアそろ〳〵行くとしたが可うござります。」

「嫌だよ、眞ッ暗にならなけア。此樣な態でお前、幾ら何んでも極が惡いぢやないか。」と嫌な顏をする。

「然うだかな。」と作藏は、もッともと合點して、直にやッこらさと立起る。づいと腰を伸して、二ッ三ッ叩きながら、ノッリ〳〵歩出す。大きな體の影がカッキリと長く地に搖曳する。作藏は少時蓮子の傍を去ッた。蓮子は獨となッた。また考出す。

「逹男さんも何んか考へてゐらッしやるに違ない、舊から解ッてゐる方なんだから、屹度其に違ひない。てなけア、其樣な思切ッたことをなさる筈が無い‥‥　破壞主義か知ら。そりや煩悶すりや、誰だッて一度は其處へ行くわ。」

何んだか逹男の胸と自分の胸とが觸れ合ッてゐるやうに思ふ。而すると冷えきッた血が急にフッ〳〵沸き出すやうな感じがする。

「面白いわ、久しぶりでシンミリと話して見ませう。何有、作藏なんかに、私等の思ッてゐることが解

るもんぢやない‥‥　だから狂人とも見えませうさ。」と思ふと何がなし氣がいそ〳〵して、飛上りたいやうに愉快になる。「矢張達男さんが一番えらいのね。皆單肌と肌と觸れたといふだけで、何んにも殘りやしない。だけど達男さんだけは然うぢやない、確に私の胸に何か殘してゐる。」

彼女はもう落着いて座ッてゐられなくなッた。で衝と立起る。急に起ッたので、頭がフラ〳〵して、前に蹌りさうになる。踏怺えて其のまゝ稻塚に靠れかゝッた。氣が付くと、腹が空きゝッてゐる、加之刻限が刻限だ。永い間癖になッてゐるので、喉がガビ〳〵鳴る。「此樣な時に一杯飮むだら‥‥」と思ふ。其處で顚いてグタリとなッた。

「私は然うだけれども、達男さんは何んと思ッてお在だか。何しろ彼樣なことて私を突ッ放してお了ひなさるやうな潔癖なんだから‥‥　加之執着の無い方だし。」

考へると急に張合が拔けて了ふ。また氣が滅入ッて來る。

吻ッと歎息をして、「もう一度昔の處女に復舊りたい。」

痛切な悔恨だ。其のパッチリした眥の長い眼には涙が煌く。

少時凝如としてゐて、「充らない、酒でも飮まうや。」

ひよいと頭を擡げると、作藏は何時の間にか枯枝や棒きれを集めて來て、風當りの少ないところに焚火の支度をしてゐる。乾燥きッた藁か好い焚付になッて直に火が出來た。

蓮子はヒヨロ〳〵と焚火の傍に歩寄ッた。そして踞ッた。兩人共に默ッて火影を見詰めてゐた。藁はパッ〳〵と燃える、枯枝にも火が移ッて、炎がヒラ〳〵と閃く。其の炎の中にフス〳〵音がして白い煙が迸る‥‥　風が煽り付けると、火はパッと消えさうになッて、また熾に燃上る。紅い炎の先から煤色

の煙が靡いて、ハラ〳〵ハラ〳〵と灰を飛ばす。其の灰が頭髪に肩先にかゝるのも管はず、蓮子は火氣て頬がピリ〳〵するまで焚火に寄付いて冷い體を暖めた‥‥ 體が暖まッて來るに從ッて、輕い爽な眠氣が催して來る‥‥ 催すといふ程ではないが、催して來るやうな心地になる。と同時に、何か物足らぬ感じがする‥‥ 胃の腑か、喉か、それとも心か、何か切に空乏を訴へてゐる。て幾度となく微に喉を鳴らした。鳴らしながら怺えた。併し怺えきれぬ、氣がもだ〳〵する‥‥ 切ない惱だ。觸覺や意識がだん〳〵と自分を離れて行くやうに思ふ。

「あゝ、飲みたい。」と遂に自分に向ッて告白した。すると靄を透して物を見るやうに唇に快い刺戟を感ずる。彼女はもう耐らなくなッた。

「爺や、此の邊に酒屋が無いの。」

「酒屋ね、」と作藏は妙な顏をして、「そりや村さ行げばあるだが‥‥ 何んでね。」と詰問するやうにいふ。

蓮子は直に些ととちッたが、「お酒が欲しいからさ。」

「酒が欲しいちて‥‥ 酒何んにするだね。」

「私が飲むの。」と早口に謂ッて、自分を嘲けるやうに微笑する。

作藏はまた呆れさせられた。

「貴方が、酒飲むだ‥‥ 貴方がけえ。」

「えゝ。」と吐出すやうに謂ッて氣色を惡くする。

「こりや魂消たとね、東京ぢや女が酒飲むだかね。」

「そりや飲む女もありますのさ。ま、何んでも可いから、お願だから購ッて來て下さいよ。」とじれッたさうにいふ。眉がぴくつく。「そりや購ッて來うなら、購ッて來るだがね。何んだら家さござらしてから飲ましたら可いてねえか。」

「登夫達男さんの前ぢや飲めませんよ。」

「其ンだちて、飲むでござらした事ンでは、呼吸が臭くなるて直に解るだが。」

「呼吸の臭い位は大目に藏くのさ。」と謂ひながら帶の間から網の巾着を取出して、たッた一枚殘ッてゐた五十錢銀貨を作藏に突付ける。

「幾ら購ッて來るだね、これだけかね。」と作藏は銀貨を受取ッて、勿體ないやうな顏をしながら蓮子を見る。

「然うね、半分も購ッて來て下さいな。」

作藏は默首いて立起ッた。そして稻塚を繞ッて村の方へ行く。蓮子は其の影を見送りながら、

「ノンキな阿爺だ。一日でも彼樣な風になッてゐたら可いだらうね。眼前に何か迫ッて來るか知らずにゐるんだもの。」と思ッて、フト「心の貧しき者は幸なり」といふ聖書の辭を思出した。

彼女はまた獨になッた。心は幽に淋しくなッて來る。パッとした不安と不滿足とが丁度しめやかな時雨でも聞くやうに胸頭に觸れる…… 悶といふ程のものでもなければ、悲哀といふ程のものでも無い。而も心は權衡を失ッて、其の幽情の底には激しい渴望が動いてゐる。

焚火の火氣は良弱くなッた。枯枝は殆ど燃盡ッて、枯枝の形が無くなッてゐた。白い灰の下には熇が光ッてゐる。火はヒラ〳〵と小枝を甜めて、有機體が無機體となる……かと思ふと、火の小枝は折れて、

燼となッて灰の中に落ちる、燼は直に灰を被ッて了ふ。蓮子は熟と其の樣を見詰めてゐて、何か其に深い意味と默示とがあるのではないかと思ふ。考へてゐるうちに、其の意味と默示が具體的に胸に映ッて來るやう思はれる。併し何うしてもハッキリと來ない。たゞ「全て滅ぶ、そして何んにも無くなッて了ふ。」といふやうな感想が輕く心を刺戟した。解りきッたこと、知りながらも所故に驚いて見た……要するに驚いて見たゞけのことであッた。直に考を放擲ッて、ひたすらに作藏の歸ッて來るのを待つ。待ッうちにも、何故此樣なくだらないことを考へるやうになッたのかと思ひもする。

西の方の高山の後は、其の向ふの地の底から火を噴いてゐるかと思はれるやうは夕映がしてゐる。其の光を掻濁した、薄い雲が烟のやうになッて浮動してゐる。空氣が澄みきッてゐるので、其の色彩が鮮麗だ。光の輝いてゐる部分だけ、山の影は、黑く、また濃黑に紫立ッて、脈や、襞や高低がカッキリと見える。山脈は全て相聯ッてゐるかと見えて、北に馳り南に流れ、また波狀に勾配を作して、ウネ〳〵と野に下ッて、下るに從ッて、色彩は鈍く蒼ざめて來る。それでも弱々しい光が微動してゐる。下りきッたところが丘になッてゐて、丘に沿ッて、村の森が黯然と大氣を斑つけてゐる。其處はもう薄暗い暮の色が漂ッてゐた。其の中にポチ〳〵、彼方此方に土藏の白堊がボーッと夢のやうに浮んでゐた。光は漸から、また下の方から次第に消えて行く。其處らの木立――大概は櫟――は影のやうになッて、風も凪ぎた。尙だパッと明い空を羽根の白い鳥が何處から何處へとなく飛んで行く。蓮子は何んといふことは無く熟と其の行方を見送ッた。

一體此の界隈は土地が低い、そして平だ。從ッて水のハケも惡い。で流といふ流は靜として、水も泥濁く、其の底には幾年となく停滯したゴミや芥が沈澱してゐるかと思はれる――恰て泥溝だ。それで土地

は濕ッけて、家の庭と謂はず路と謂はず、腐敗した有機質が深く浸潤して、土は黒くフヤ〳〵して、何處を掘ッても蚯蚓が出さうだ。そして雨が少し降續くと、到處に青黒い、ぬめ〳〵した、無氣味な苔が見える。また水が惡い、何處の井戸の水でも、鐵氣を含むでゐるが、さもなければ黄ばンで濁ッてゐる、そして何處の瀦にも乾度胸の惡くなるやうにギラが浮んでゐる。此の土地と惡水に依ッて育てられる故か、五穀も好く熟れば、樹も好く茂る。それで森林が多い。倘も丘に立ッて瞰下ろしたら、全ての村が、恰て森林の中にあるやうに見えて、大概の家は深い樹立に圍はれてゐる。樹立と謂ッても、槻または銀杏とかの落葉樹は少ない。多くは榎とか、樫とか、樅とか、椽とかの松柏科て、殊に杉が多い。て四季色彩の變化にも乏しい、其の欝蒼たる森は、初夏には只少し綠が増し。冬になると黒味と赭色が加はるだけのことであッた。其の故か、空氣も何んとなく薄暗いやうに思はれる、分けて冬の黄昏の色は暗い……　暗いといふよりは寧ろ神秘的に陰欝てある。耕地は迴ッと展開して、一望平野の形を作してゐるが、其處にも人の胸を壓付けるやうな陰欝の影が映ッてゐる。勿論其は四圍峻嶮な山を以て繞らされた故もあッたらう、併し森林の濃黒な影の反映は、確に此の空濶な耕地の空氣をも暗くしてゐたのであッた。蓮子は、其の陰欝な氣に觸れ、そして巨人が横はッてゐるかと思はれるやうな濃黒な森の影を見て、「何んだかローマンチックな、人を考へさせる國ね。」と思ッた。

而ると、其の惡水に依ッて此の土地に惡疫のバチルスの蔓ッてゐることや、其の陰欝な氣に養はれて此の土地の百姓の顏の色の暗いことや、また此の土地の地面にも空氣にも腐敗の分子が瀰漫して、殆ど救濟されぬ狀態に陷ッてゐることを思浮べた。

「腐ッた空氣を吸ッて、此の土地の人の心は年毎に殪えて行く！……　腐敗のバチルスは永い歴史に依

ッて醸されてゐるから何様な防腐劑も其の腐敗を防ぐことは出來ない。また奈何に新鮮な空氣も、其の惡濁の空氣を廓淸することは出來ない。」

彼女は此樣なことを考へた。そして眞ンの瞬間であッたが、神のやうな心になッてゐた。

「自然の惠の薄い憐な人等だ。自覺もしなければ、覺醒することも知らないで、たゞ慾を突ッ張りながら、何時とはなく永劫の力に滅されて行く。そして人が新陳代謝して、時代が變る。また新時代のバチルスが古いバチルスの中に培養される……そして都の物が益々腐る。」

彼女は自分も其のバチルスの蔓ッた空氣の中に生れた一人だと思ッた。加之東京の濁ッた空氣まで吸ッて、あらゆるバチルスが血液の中に侵入した。他の言でいふと、外界の壓迫と、裡らの悶に耐えなかッた體は、只これ一箇饐えきッた肉の塊となッて了ッた。

「此の體でもッて、行末何うなるのであらう。人どころの騷ぢやない、私は、何うして、誰に救ッて貰へるのだらう。」

彼女は慄然として、微に身裡が顫くやうに覺えた。そして切に何物かに向ッて救を求めた。雖然何も無い、縋ッて見やうとする物すら無い。耐らなく淋しくなッて

「私が無信者だからしら?……」とも思ふ。すると自分がさも淺猿しい者のやうに思はれて不安の影が胸を閉す。

「けれども、無信者は私ばかりでないんだから。」と辛而自分を慰めて、また此の土地に就いて考へた。

或は無信者ばかりが集ッてゐる故でもあらう。此の土地の人氣は極めて惡い、そして殺伐だ。例へば寺に就いて見る、成程大きな伽藍の外廓だけは存在してゐるが、其れは舊時代の殘骸――衰頽の大きな影

――て、單葬式の執行所となッてゐる、そして墓地は死人の捨場所で、屋根が崩れても、瓦一枚寄進して、靈魂の宮殿を繕はうとする者が無い。されば其處に信仰の光は消えて了ッてゐる。また學校に就いて見る、低級の教育者は、聲を嗄らしながら修身を講じてゐるが、而も生徒は欠伸をしたり墨の塗りッこをしたりして、教育者の熱誠とは殆ど沒交渉だ。で、歸途には、他人の菜園を犯して菜果を盗む。そして其の教育者は互に暗闘したり陥擠したりして、また他の妻を盗む。此の盗むといふことが、また此の土地の流行だ。何樣な者にしても何かの手段で何か盗む　。或者は税を盗み、或者は女を盗み、また村會議員などゝいふ政治家連は或る權力と仕事とを盗み、または强奪してゐる。そして役場の吏員は、脱税者または税の滯納者の處分に苦しみながらも時間と給料とを盗むでゐる。でお互にお互の心に照らして、お互の心を能く知ッてゐるから、斷えず不安の眼を光らせて他を見る。して公德上の約束は全く破棄されて了ッて、お互に自己の權利と安寧とを犯されぬやうに力めて精根を涸らしてゐる。また或者は犯さう犯さうと隙を覗ッてゐる。そこで所天は女房の番人になッて、親は娘の見張人になッてゐなければならぬ。勿論國家は法律の條文に依つて、此の土地の安寧を擁護し、また擁護されてゐるやうに見えるが、併し其は表面だけの事だ。恐ろしく事故の多い土地で、絶えず何か騒がある、喧嘩、詐欺、賭博、窃盗、强盗、殺人、加之姦通、强姦‥‥此處まで考へて來て、蓮子はフイと兩手で顔を隠した。

「七年前に‥‥然う、七年前に‥‥」嫌な記憶がヒラリ胸に閃いた。體がガタ／＼して來る。彼女は七年前に、一夜三人の强盗に脅かされて輪姦の辱を受けたのであッた。

「私は、ま、何うして、今まで活きてゐたのでせう。」と驚く。

而ると現に坐ッてゐる自分の體が、自分の體だが何んだか解らないやうな氣がする‥‥　途端にガラリ

前に踣ッた……と、自分を支へる力すら無く、バッタリ大地に突ッ俯して突然魔の國にでも誘はれて行くやうな心地て身悶してゐた。

少時經ッた。大地はもう底冷がしてゐるので、鐵のやうな冷さが身に滲込むで來る……時々、フと思出したやうに、其處らにカサ〳〵と洒唖れた音がする。蓮子は熟と其の音を聞澄してゐて、枯葉落葉の擦合ッてゐる音だと思ふ。少し氣が落着いて來て、

「私が惡いんぢやない、私が惡いんぢやない。」と繰返しながら、「だけど何うして彼樣な目に逢ッたのだらう。」

考へると何んだか夢のやうな氣もする。急に體がブル〳〵、ブル〳〵と慄へて來る。そこて吃驚して飛起きた。そしてケロッとして何も彼も忘れた氣味となる。また無理に忘れやうとする。

落着いて見ると、四下は息ても引取るやうに靜になッてゐた。物の音といふ物の音は、都て底の底の方に沈みきッて、風も凪ぎた。たゞ落し水の音だけが、ごぼ〳〵と喘ぐやうに、また靜に靜にと呟くやうに聞える。森の中から、また森と森との間から、水蒸氣が淡く噴出るやうに流れ出す。そして其がハッキリした物象をボカす。焚火もトロ〳〵と、今にも消えて了ひさうに燃えてゐた。蓮子は、マジ〳〵と、其の火影を瞶めて、其に薬を加へる氣力さへなかッた。作藏のことも忘れてゐた。たゞ、

「何んといふ靜なことだらう。」と思ッて、蓮子は出來るだけ、其の靜な心になッて見やうとした。彼女は近頃、此樣なに靜な心になッてゐたことが無い。

「アヽ、何時も此樣な靜な心になッてゐたら可いてせうね。」

蓮子は熟と耳を傾げて、其の靜な自然の心を自分の心に移さうとした。すると村道の方に、コト〳〵と

荷車を曳いで行く音がする…… 何んの韻律も無い、のろい響だ。

「誰が彼樣な嫌な音をさせるのだらう。此の權威のある沈靜を破ッて!」

彼女は何かに小突かれてもしたやうに、徐ら頭を擡げた。途端にフイと此の靜な中を地球が大廻轉してゐることに氣が付く。

「異ンとかしら…… 異ンとに地球が廻轉してゐるのかしら。」と考へる。

何んだか虛僞のやうだが、其は絕對の事實だ。事實とすると、自分が其の地球の一小部分に坐ッて、凝如として、靜な心で靜な物象を見てゐるのも虛僞としなければならぬ。

自分は此處に坐ッて、現に「全く穩なり、和靜なり。」といふやうな村と野とに接觸してゐる。併し其の多く遠なッた村と森との中には、何樣な悲劇、何樣な活動が起ッてゐるかも知れぬ。死んだ人もあるだらう、生れた人もあるだらう。また自分が美しいと觀取した山のふところに、何樣な慘劇があッたか解らぬ、或は血塗になッて斃れた者があッたかも知れぬ。併し自分の眼は確に靜と見てゐる。また多くの人も靜と見てゐるであらう。併し其の和靜の裡には、何事が起ッてはゐはしまいか。何か一大事變がありはせぬだらうか。そこで蓮子は例を自分に取ッた。「現に自分にして見ても然うぢやないか。」

彼女は七年前の一夜、古い森の中の大きな家で、謂はうやうなき辱を蒙ッた。そして生涯を破壞して了ッた。併し其は宇宙の秘密のやうに誰も知ッてゐない。恐らく其の時森は、深沈として、靜な夜の色に籠められてゐたに違ない。また倘も其の時、森の傍を通ッた者があッたのならば、森の中に眠ッてゐる安な家を見たに違ない…… 雖然其處には寒慄すべき慘劇が演じられてゐた。

「すると、人間の眼といふものは、何時も實相らしい虛僞を見てゐるのであらうか。」と蓮子は、些と不

可解の不思議に衝突ッて「倘も人間の眼が何時も虛僞を見せられてゐるものとすれば、自分が此處にゐるものも虛僞かも知れない。」

考へると、何んだか虛僞のやうな氣もする。「自分は何うして此處にゐるのだらう、何樣な約束で？‥‥何故また此樣なところに、此樣なことしてゐなければならないのだらう。一體自分は何うして此處へ來たのだらう。」と疑はれる。

勿論何か意識があッて來たに違ひないが、其の意識が極めてハッキリしない。或は只ブラリと來たのではないかと思はれる。また何物かに持ッて來られたやうな氣もする。

「何方にしても、此處に來たからゐる、居るから見る、此の事實は動かすことは出來ない‥‥或は人生は假象と虛僞で出來てゐるのかも知れぬ。」といふことにして了ッて、「それにしても、もう阿爺が歸ッて來さうなものだ。」と思ふ。

其處らは何時か薄暗くなッてゐた。夕映も消えた。

そして其處に大きな星が一ッポッカリ現はれて、燦爛と煌いてゐる。もう山の影も見えなければ、土藏の白堊も見えぬ。現象と消滅――蓮子は一種神秘的の威に打れながら、

「一體全て有るのか無いのか。」

彼女はまた深い疑惑に落ちた。見ると、焚火も消えて了ッて、全て地なる光も色も底深い間に包藏されて了ッて、たゞ水蒸氣の色が薄々と微見える。

彼女はまた切に舌と胃の腑とに渴望を覺えて來た。て少時悄となッてゐて、フト氣が付いて、薪を焚火に加へやうとする‥‥と、不意に、メリ〳〵と、丁ど大きな樹がネジ推斷れて倒れるやうな響――殆

い、併しながら甚く壓力のある響――が、暗を壓して響渡る、時間のある響であッた。

「何んだらう。」と蓮子は息を潜めて、耳を澄ました。軈て、ヅシン、微な微な地響が聞取れた。何か長大な物體が倒れたらしい。

「ア、また樹が伐倒されたんだ。」と思ッて、蓮子は別に何も考へなかッた。そして心静に薪に火を移して、更に枯枝を加へた。焚火はまた熾に燃上る……火光に透すと、此處にも水蒸氣か立ッてゐる。火はカッキリと枯枝の象を映して鮮明に燃える。水蒸氣に地べたにまたは稲塚に火影がチラ〳〵して幽妙な光を放つ。其處らが何んとなく活氣づいたやうになッて、蓮子の心も少し浮ついて來た。處へ作藏が歸ッて來た。突ッ立ッたまゝで、突如ヅィと酒樽を突ン出しながら、

「五合購ッて來たでがす。」と妙に素ッ氣なくいふ。

「然う、有難う。」といそ〳〵して酒樽を受取り、「大變に遲かッたのね。」と笑顔が不足だ。

作藏は袂から飯茶椀を取出して、「些と家まで行ぎて來ましたゞがンね。」

「まア、家へ？」ときよとついた眼て作藏の顏を見る。作藏の顏は火影に染められて、眼は慍ッてゞもゐるやうに爛ついてゐた。

「はい。」と何んだか慳貪な返事て、茶椀を手渡する。

蓮子の胸には不安の波が立騷ぐ。

「そして何んなの、お前さん、達男さんに私の來たことを謂ッたの。」

「謂ッたゞ……　默ッてゐたとッて爲樣が無えだかンね。」

「然う。」とてれた氣味て、些と口を噤み、また出復して、「達男さん、何んと謂ッてお出てだッたえ。」

「何んと謂はしやるもんで…… 然うかつて、謂ッてゞござりました。」

「其きりなの。」

「其きりさね。」

進子は張合の拔けたやうな顔をして、氣が無いやうに酒樽の栓を拔く。そして少し手先を慄はせながら酒を茶椀に注いで、一杯一と息に呷りつけて了ふ。

作藏は呆れ返ッて其の態を見詰めてゐた。

進子はまた酒樽を取上げて、フト鼻頭に冷な、そして高慢な微笑を泛べながら、「ぢや、私もう行くのは止しませう。」とキッパリいふ。此の瞬間、不思議に氣がシャッキリと引緊ッて來た。

「何んでね。」

「行ッたッて爲樣が無いもの。行ッて嫌な顔をされるよか、寧そ此處で野宿してゐた方が可いわ。」と謂ひながら、今度はグイ〳〵一口づゝ刻むで飲み始める。

「誰がね、誰が嫌だ顔をするでござります。」と作藏は詰るやうに強くいふ。

「達男さんがさ。」と拗たやうに謂ッて、

「だッて、然うぢやないか。折角東京くんだりから訪ねて來てさ、碌な挨拶もされないやうぢや充らないぢやないか。」

「そりや貴方、拗れてゐるちふもんだ。旦那樣ア何んも貴方に來て呉れるなつて謂はしやるてねえだがんね。だて、其樣だこと謂はしやらねえて、疾く行きますべえ。旦那樣ア、決して嫌だ顔さッしやるやうだことねえてござります。」

「然うかしら。」と疑ぐり深い眼をして考込む。

此くて程經ッてから、作藏は辛而蓮子を説付けて、殆ど引ッ抱へんばかりにして主人の家に誘ッた。蓮子は大方酒樽を開けて了ッて、泥醉とはならぬまでも、舌も幾か縺れ、足元も跟つく位に醉ッてゐた。で酒の勢を驅ッて、口から出まかせに種々な事を謂ッて作藏を困らせながら、暗い野から闇い村に入ッた。毎の癖だが、馬鹿に氣が大きくなッて、何んでも持ッて來いといふ勢だ。で傍若無人に何んでも饒舌る‥‥何も彼も能く承知しきッてゐながら、何んでもいふ。此うなッては、達男の顔に酒臭い息を吹掛けても平チャンてゐることが出來る。

「面白いな！　一ッ此の勢で達男さんにぶッかッて遣らう。」

彼女は路々も考へてゐた。これといふ氣の浮つくことも無いが、何んだか氣が浮ついてゐた。時々眼に――或は胸にか――何か縹々見える。熟く見ると其は男の顔だ。皆締りなく笑ッてゐる馬鹿な面だ。其の馬鹿な面が現はれては、フト消えて、種々に變ッてお目に垂下がる。

彼女は笑出したくなッた。そして、「何有、男なんざ、此方から口説いたら、誰でもコロリだ！」と思ふ。

此うなると、心の草臥れてゐることも、體の衰えてゐることも思ひはしない。勿論墮落などゝいふ冷い烙印は奇麗に痕跡もなく消えて了ッてゐる。何故酒を飲むだかといふことも考へはしない。そして都て何んでも何うにかなるだらうと思ッてゐる。また自分の力で何うにか出來ると信じてゐる。何しろ血は絢だ瀲灩として躍ッてゐる、脈管といふ脈管には其の響がしてゐる。其響が朝宗して來て、胸がヅキンヅキンと鳴ッてゐる、鼓膜に鳴ッてゐる。

「そら、此樣な音だ！　誰でも頭を押ッ付けて聞くが可い。」と胸を押ッ開けて見せたいやうな氣もする。併し少し苦しい。息も喘ぐ。何うかすると自分にも些か酔が利き過ぎたやうにも思ふ。

「ア、、酔ッた。那ンばかしの酒て、何うして此樣な酔ッたのだらう。」と些と情ないやうな氣にもなッたが、「だけど、私ア、これで活きてゐられるんだ。」

酒は今になッて、急に廻ッて足元がフラ／＼する、顏も赫々として來て、眼はちらつき、氣は益々大きくなる。て耐力もなく彼方へ此方へ跟きながら、時々轉びさうになッた。作藏は其の度に膽を冷して、慌て丶抱止め、または抱止めさうにする。

「大丈夫だよ、那ンばかし飮むだッて、其樣に酔ふもンかね。何しろこれから行ッて、ウンと達男さんを愚弄ッて進げやうと思ふんだから。」

「愚弄ふだね、何んてやア。」

「何んてちて、何にさ。」と些と口眞似をして、「獨てお出てなすッて、お淋しかアございませんかッてさ。」

「白痴だよ、貴方は・・・・」と作藏は眞率になッて吐出すやうにいふ。

「何が白痴だえ・・・・　だッて爺や、お前淋しかアないの。」と把られてゐた手をグイと引ッ張る。

引張られて作藏は跟きながら、「何にするだね。これ・・・・」

進子は擽ッたいやうに笑ッて、所故ひッたり作藏に寄付きながら、「眞ンとにお前淋しかアないの。」

「何んが淋しいもんて・・・・」

「然うかね。おやお前は活きてゐるか死んでゐるか解らない人だ。」と嘲けるやうに謂ッて、「でもお前、

一度位誰が戀ッたことがあるだらう……　戀はれたことアなくッてもさ。」

「何に謂はしやるだね、貴方はよ。此の老人を捕めえてさ。」

「此の老人だッて……　ふゝゝ　老人が可かッたね。ぢや老人は人間離をしたものなのかえ。」

「知りましねえ。」と作藏はむかッ腹を立てる。

「知らない？……　恍けたッて可けないよ。お前眞面目な振をして恍けてゐるんだらう。だッて私が此うして、お前の手をぎゆッと握ッたら、お前何んとか思やしないか。」

「何んとかとア……」と作藏はまたのろい語調て、「何んの事ンだね。」

「何んとかさ。」

作藏はハッとした體て、慌てゝ邪慳に其の手を突ッ放した。蓮子は踉々として危く轉びさうになる。それでも踏耐えて、

「ふゝゝ」と笑出して、「其でも通じたのかえ。お前は馬鹿だ……　お前が老人なら、何んだッて私を突ッ放したのさ。」とゲラ／＼笑ふ。

作藏は默ッてゐた。そしてもう手を把らうとはせず、先に立ッてひよッてりひよッてり歩出す。道にすッかり慍ッて了ッたらしい。

「爺い、人を放擲ッて行くな。よし來た、其ンなら……」と蓮子もスタコラ歩出して、直に追付いた。またぴッたり寄付いて、「爺や、お前も何んだね、達男さんのやうに、何時も眞面ロな振をして、窮屈に自分を縛ッてゐる人なのね、憫然ね、氣の毒な人だね。私は眞ンとに氣の毒な人だと思ふわ。」

其から間も無く兩人は達男の家近くまで來た。達男の家は村道から外れて、更に幅の廣い奇麗な道――

達男の家だけの通路で——を一町ばかりも入らなければならぬ。道が盡きると、古風な茅屋根の大きな門がある、扉も頑とした立派なもので、てもなく大寺の構だ。樹立が深い故か、其邊は此う幽暗で、奈何にも奥深く見える。地方の格式のある舊家には屢く此の型がある。達男の家も舊家で、高谷と謂へば此の國では知らぬ者の無い位名高い家柄である。また威望もあッた。何しろ邸の周圍の樹立を見ても、如何に其の家の基礎が古く築かれたかといふことが解る。

兩人は此の家の通路に入ッて來た。此處まで來ると、蓮子は、何うしたのか急に溫順しくなッてゐた。すると門の裡でガヤ〳〵人聲がする。作藏は木挽の連中が歸ッて行くのかと思ッて、ふと見ると、門の裡から提灯が一ッフイと現はれた。つゞいてまた一ッ……

「何んだかな。」と作藏は些と訝ッて見た。

頭數を調ッたら、僅に五六人であるが、其が何か異常な出來事でも起ッたやうに騒ぎながら出て來る。定かには解らぬが、何か此う釣臺でも擔出すやうな氣勢も見える。蓮子は何んといふこともなく密と作藏の背後に廻込むだ。

作藏は徐々歩出した。提灯の火影は薄ッすり空に走ッて樹立の梢にゆら〳〵と光が搖ぐ。提灯は直に作藏の眼前に來た。見ると戸板を釣臺のやうにして擔いて、兩人が其を擔ぎ、他の者は其を取卷いて、何れもがさつな連中ではありながら、靜に、考深く、しと〳〵と歩いてゐる。戸板には誰か呻きながら横はッてゐた。

作藏は一番後になッてゐる一人を捕へて、

「何んだえ、何事起ッたゞな。」と聲を掛けた。

「何事ちて、爺さま、仙の野郎が大負傷したゞ。」と悸々した聲だ。
「大負傷ちて、何處をよ。」
「何處ちて其處らちふだ……　えらく撲ッたは、胸だけんどよ。」
「ほ、何樣にしてや。」
「樹におッ壓されたゞ……　那の大ッけえ二股杉によ。野郎日が暮れて來たもんて、些と焦り氣味て、ヒイ／＼謂ひながら那の大杉を一生懸命にぶッ伐ッてゐたッけがさ、何樣だ機だかお前え、引張ッてあッた綱アぶッ斷れたゞ。其ンでお前え、樹がそてねえ方さ轉けたと思ひなさろ……　そりや野郎逃げた、けんて運だな。野郎運惡く何んかに躓いてぶッくらけえッた……　とこさ、樹が轉けたもんだて、はア、耐ンねえさ。」
「ふう。」と作藏は、深く何かに打れたやうに、「此ンで兩人だな。」と歎息する。
「然うだちふに……　つい五六日前にア拗の野郎が、枝ア下ろすとッて、あの高え杉の樹から足い踏はづして、其なりけりてへたばッて了うし……」とこれも頷くやうな聲ていふ。
「其ンて何樣だな、今度のア……」
「さ、到底はア、此方の者ンになンねえだかと思ふだが……　何にしろ蟲の息になッてゐるだかンな。俺ア、ぼッとすると、醫者樣の許さ行ぐまで保つめえと思ふだ。」
「何んにしても、氣の毒だことしたゞナ。」
「俺も何んだか嫌だ氣がして、明日ッから木挽廢めて了うべえかと思ふだ。」と謂ッて、急にきよと／＼して、「ほい、皆見えなくなッて了ッたゞ……　其ンでは爺さま、明日また……」

木挽は連の後を追ッてスタ〳〵駈出した。作藏は少時默ッて突ッ立ッてゐたが、フト輕く頭を振ッて、ノソリ〳〵門の裡に入る。蓮子も其後に從いて門の裡に入ッたが、木挽の話を聞いてゐるうちから、何やら氣が慄々して、酒も何んだか醒加減になッて來た。

門の裡は眞ッ暗だ、家からも一點の光が射さぬ。そして其の殘骸のやうな大きな影は、暗い中に黝然として大氣を斑けてゐた。陰森とした氣が身に迫る……見上げると、濃黒な樹上の影は、處々破れて、其處から蒼白い星の光が幽に射込むでゐる。成程樹立は大分疎になつてゐた。

蓮子は七年ぶりて、此の古い樹立の中の古い氣に觸れた。すると何か此う急に氣が改まッて、恰て人が變ッたやうな心地がする……何んだか濁ッた血が澄むで行くやうにも思ふ……同時に何か解らぬが、嫌な怖氣が密と壓付けるやうに胸を襲ふ。また自分にも疑はれる程氣がしッとりして來て、或る瞬間……其は眞ンの一瞬間てあッたけれども、例へば威靈ある神社の拜殿て神鏡の光にでも打れた時のやうな感想が閃く。何故其樣な感想が閃いたのか自分にも解らなかッた。

闇は深く沈默してゐた。其の沈默を破ッて、時々カサ〳〵カサ〳〵と、聞取れるか聞取れぬ位の微な音がする。蓮子は些と耳を傾げて、直に、其は、厩の裡で馬が藁を踏むでゐる音と知ッた。其の馬は此の家の先代を殺した下手人だ！ 而も十幾年間、何も爲ずに大事に養はれて、尙しも活きてゐる。

「何んだか謎のやうな事實ね。」

蓮子は何故か此樣なことを考へた。そして家に入ッた。家も暗い。空氣は死人の手のやうに冷えきッてゐた。さて家に入ッたとなると、何ういふものか妄と氣怯がして、手足ががたつく。

間も無く蓮子は作藏に誘はれて、奥まッた蓮男の居室に通ッた。幾ッかの室を通ッて行くうちに、今更

のやうに「だゝッ廣いもんだ。」といふ感が浮く。居室は舊の通り北から光を取る八疊の室であッた。愼ましげに室に入ると、達男は爐の傍に坐ッて薄暗いランプに淋しい顏を照してゐた、先づ尋常の挨拶が濟むだ。

「ま、爐の傍へ寄ッたら可いでせう。」と達男は相變らず膠の無い語調だ。が樣子を見ると、格別歡んで迎へるといふ風もないが、さればと謂ッて、何爲に來たといふ顏もしてゐない。蓮子は吻ッと一と息した。こゝで度胸を据えて、謂はれるまゝに、づッと爐の傍に寄ッた。

兩人共少時無言てゐた。蓮子は氣が落着くと、また醉が發て來て、頰がポッ〳〵と熱る。て成べく顏を見られぬやうにと垂頭いてゐて、

「貴方も大層年をお老ンなさいましてね。」

と何んの關聯もなく、フト感じたまゝを謂ッて見る。

達男は急須に湯を注ぎながら、「然うかね、蓮子さんは……」と例の反語だ。

「私も老りましたわ。」と何氣なく謂ッたが、妙に「さん」といふ響が強く聞えて、何んだか詫しいやうな氣がした。

達男は卅五六にならう。理合は奇麗だが、血の氣の薄い方で、がッたくり凹んだ眼は、底の方に銳く光ッてゐる。額は廣く、眉は秀て、何方かと謂へば男らしい、引緊ッた、輪廓の大きい顏立であるが、鼻は尖り頰は剝けて、何處かに暗愁が微動してゐて、奈何にも暗い顏だ。油ッけの無い濃い頭髮は延びられるだけ延びたといふ風でバサ〳〵してゐた。何か茶ッポイ絹物の綿の入ッたッたのを着てゐたが、其がひッたり體にくッついて、肩の骨の突ッ張ッてゐるのまでが明に解る。背は、ひよろりと高い方であ

ッた。
達男は、茶を淹れてゐるうちに、些々蓮子の樣子を見て、「大分好い顏色をしてゐますね。」と皮肉らしくいふ。
「え。」と蓮子は些とまごついたが、圖々しく出掛けて、「お酒を飲むで來ましたの。」
「酒を？……ほ、蓮子さん、酒を飲むやうになッたのかね。」とさして驚きもしない。
「は、だッて、酒でも飲まなけア、活きてゐられませんわ。」
「然うかね。ま、飲めたら飲むさ。醉へる人は幸福だよ。」
「然うでせうか。」と蓮子は、ひよいと頭を擡げて、恍けたやうにいふ。
「ま、然うだらう、少なくとも醉ふことの出來ない者より幸福さね。」
「ぢや私は、貴方よか幸福ね。」
「然うかも知れない。」と傍を向いて薄笑をする。
「てすけれど、眞ンとの意味から謂ッて、醉ッてゐるのと覺めてゐるのと、何方が幸福でせう。」
「私に訊くまでもない、蓮子さんは東京で、都て學問をして知ッてゐる筈ぢやないか。所謂實驗といふ奴でね。」
「あら。」と蓮子は惱ッとして、瞳を据えたが、直に外らして、笑出した。「ま、貴方ゃ人が惡いのね。私が何を知ッてゐるもんですか。」と臆病な嘘を吐く。
「然うかね。」と強ッて追窮もせず、「知らなけア爲方が無い。そりや説明の出來ることぢやなくて、お互に「悟る」事なんだから。」

「然うてせうか。」とたれ氣味になッて、此の分では到底愚弄はれる段ではないと思ふ。すると何んだか、口惜しいやうな氣がして、「貴方此うしてゐらッして、淋しかアありませんの。」

「淋しいさ。だが道子さんがゐて呉れたからッて、格段に賑だといふことはないね。淋しいのが眞ンとの人生さ。」

「ぢや何故私等は煩悶するのでせう。」

「多分煩悶がしたいからだらう。」

「私些とも煩悶したかアありませんわ。爲たかア無いけれども、爲ずにゐられないやうになるんですもの。」

「一體何を其樣なに煩悶するんだね。」

「何をッて、そりや種々な……まア、安と煩悶してゐるんですわ。」

「男に可愛がッて貰へないとか、着たい物が着れないとか。何時も腹が充滿に膨れてゐないとか……平ッたく謂ッたら然う謂ッたやうな。」とちやかすやうにいふ。

「まア、酷い！　豈夫其樣な……もう少し深いとこへ入ッてゐるんですの。」と淋しげに笑ッて、「何時も何か裡らの空乏と、外界の壓迫があッて、そして何やら不安で。」

「ほ、難しくなッて來たね。」

「いゝえ、眞面目なんてすよ。」

「誰も眞面目でないとは謂やしない……だがさ、空乏に壓迫が加はッちや、大概干物になッて了うぢやないか。」

「ですから、干物になッてゐますわ。」
「干物が紅い顏をしてゐられるかね。」
「してゐるんぢやありませんよ。無理に爲るんですわ。」
「何故？」
「苦しいから！」
「そして、また煩悶か。」と達男は冷に謂ッて、「其樣に苦しかッたら、何故また信仰でも求めないんです。苦しむ人の爲には、信仰といふ好い諦め道具があるんです。」
「私にア到底諦められませんわ。一體諦めるといふことは、負惜て、所詮自分を欺くことぢやないでせうか。」
「然うかも知れない。だが何も活きてゐる手段なら欺いたッて可いぢやないか。活きる爲には生涯自分を欺き通してゐる人もあるんだ。」
「私は其樣な人等より些と正直に出來てゐるんですもの。」
「正直に出來てゐる？……とは何う正直にね。」
「種々な慾を渇かして、活きてゐる意味を認めたいと思ッて。」
「そりや駄目だ！」と達男は些と肩を聳かして、「幾ら骨を折ッて探ッたッて、無い袋の裡には何んにもありやしない。」
「ぢや人生は空虛なんでせうか。」
「そりや空虛ぢやないかも知れない。雖然私等に取ッちや空虛になッて了ッた……幾ら探ッたッて何

んにもありやしない。偶時何かに觸れたかと思ふと、そりや虛僞だ……虛僞だから、聽て疑が出て來る、そして何んにも無くなッて了ふ。自體都ての物象、または思想、または事件……要するに私等の眼に觸れたり、心に感じたりする都ての物さ、其が果して有るんだか無いんだか解りやしないぢやないか。」

「そりや然うですね。」

「としたら、私等は何に縋ッて活きてゐるんだ。例へば私が此の大きな家を自分の所有だとして、此處に此うしてゐる成程……こりや私の私有財產で法律もまた道德も、私の所有權を認めてゐる、併し其は或約束認定で、或は誰かの手からフン奪ッて來て、自分の權利の範圍內に置いてゐるのかも知れない。そこで居るから居るやうなもの丶、何かの機會から居なくなッたら何うだ。誰の所有になるか解りやしない。また此の家に火を放けて燒いて了ッたら何うだ。」

「燒かなけア可いぢやありませんか。」

「然うだ、燒かなけア可い……怜悧な人間は誰でも然ういふのさ併し燒けたら何うだ、え、燒けない保證が出來るかね。早い話が、蓮子さんと私とは、何んだッて別れるやうなことになッたのでせう。」

「もう、止して頂戴よ、其樣なこと……」と蓮子は慌て丶手を振ッた。

「可いぢやないか。其事はもう兩人に取ッて何んでもないことになッて了ッてゐる、虛僞と謂へば虛僞とも謂へる……然雖嘗て私の所有であッたことも事實なら、別れたのは事實だ、成程一度は確に夫婦だッたのだから、此うしてゐると、何んだか夫婦だッたやうな氣もしないぢやないが、併し極めて不確な記憶になッてゐる。其癖蓮子さんといふ人は、ハッキリ記憶に殘ッて其が爲に七年間も煩悶爲通して

來たが、それでも貴方は決して私の所有とは謂へん‥‥　また其後貴方が誰の所有になッたか其も解らない。こりや燒いたのか燒かれたのか、それとも奪はれたのか、其處の程は解らんけれとも、左に右私の所有ぢやない。としたら、人間の所有權なんてものは、極めて不確なものだといふことが解るぢやないか。貴方は燒かなけァ可いといふけれども、他からの侵害と、裡らの刺戟とて、燒かずにゐられなかッたら何うです。」

蓮子は垂頭いたまゝ何んとも謂はぬ。

達男は言を繼いで、「さて然うなッて見ると、人間の爲てゐることとて確なことと謂ッたら、呼吸をしてゐることゝ地びたの上に活きてることと位のもんだ。」

「貴方は絕對を謂ッてゐらッしやるのね。」と蓮子はかすれた聲て謂ッた。

「そりや絕對さ。また絕對の上に立たなけァ都て不安だ。そこて木造の家では火が怖い、煉瓦の家では地震が怖いといふことになッて、私等は何時も不安に惱まされながら活きてゐるんだ。」

「それぢや貴方にも矢張煩悶がお有ンなすッたのぢやありませんか。」

「そりや有ッた。大いに有ッた。併し私のは有るといふよりは爲るといふ方が適當だ。私は寧ろ煩悶する爲に活きてゐると謂ッても可い‥‥　また煩悶する爲に、都て疑ッて見る爲に、貴方を去ッたと謂ッても可い　だから左程煩悶を苦にもしない。」

「ぢや丸きし空虛でもないぢやありませんか。」

「何故？、煩悶したッて何んにもなりやしない。」

「ぢや何んだッて煩悶なさるんてす。」

「其處が人間さ、丁度蓮子さんが酒を飮むやうなものなんだらう、それで惡るかッたら、退屈な時に欠伸をするやうな意味とでも謂はうか。何しろ活きてゐるから、何か爲る。‥‥ 此の何か爲るといふのが、人生の都だ。私等が此樣なことを謂つて考込むでゐるうちに、えらい人等は華族になるのさ。また木挽が死んだり馬が蕎を喰ッたり‥‥ 然うかと思ふと犬が喧嘩したりよ。そして永劫の力が、都て此の現象を打消したり現はしたりして、永い人生が續いて行くんだ。」

「充らないのね。」

「格別充らんといふことは無いだらう。煙草一本に五圓の錢を拂ふ人間もゐるぢやないか。」

「何故私等は其樣な人になれないのでせう。」

「なれないのぢやない、生れなかッたのだらう。」

「然うでせうか。」

「然うでなくとも然うしときア可いぢやないか。考へたッて解ることぢやないまた、解ッたッて誰も勳章を異れはしないさ。」

「ぢや私等は何うすれば可いのでせう。」

「其樣なことは宗教家か教育家に聞くが可い。那の人等といふものは、各自に人生を或型に入れて、眞面目に其樣なことを研究してゐる‥‥ そりや何處の瘋癲病院に行ッても、狂人が皆眞面目に騷いてゐるからな。」

「其樣な亂暴なことを有仰ッては爲樣が無のね。」と蓮子は顏を顰め、「もう些と眞面目に有仰ッて下さいな。」

「眞面目さ、これが私の精一杯の眞面目な點なんだよ。」と滞突をして、「私は氣の向くまゝにするのを以て活きてゐる秘訣としてゐる…… 何うも此うもあッたものぢやないさ。で煩悶したければ煩悶する、泣きたくなれば泣きもする…… 其處に何も窮屈な軌道を設けない。」

「私はまた貴方が窮屈に頭を縛ッてゐらッしやるのぢやないかと思ッてゐましたわ。」

「何うしてね。」

「だッて貴方は、すッかり家を破壊してお了ひなさるッてことぢやありませんか。」

「破壞すさ。」

「何故其樣なことをなさいますの。」

「何かの刺戟て、些と破壞して見たくなッたからとても謂はう。貴方を去ッたと同じて、格別是といふ深い意味はありやしない。無理に理屈を付けて見たところで、此の家の古い空氣と暗い影とが嫌になッたといふしかないね。」

「其て子孫は何うしなさいますの。高谷の血統は……」

「血統だとか、子孫だとか、其樣なものは、私等抽象的知識に依ッて活きてゐる者に取ッては、全く無意義だ。そりや子孫を大切にするといふことは、人間の類意識かも知れんが、私は都ての事物または事件から自分を引離さうとしてる人間… 所詮特殊な人なんだから、其樣な模範的感情は絶對に無視してゐるのさ。」

「それては高谷の家を斷絶させてお了ひなさるんてすか。」

「斷絶…… 然う、斷絶といふべきものか何うか知らんが、私は、祖先と子孫との間に立ッて何等の義

務を負ふて居らん…… 言換えると、私といふ一ッの體象は、祖先と子孫とを聯絡する約束を持ッて生れたのぢやないと思ッてゐる。自體祖先なんてものは、消滅した事物と事件の假想的表徵て、私とは全く沒交渉だ。」

「ぢや阿父さんは何うでせう。」

「阿父(おやぢ)か。阿父は普通の意義からいふと、私の親で、此の家に取ッては先代だ。こりや全く沒交渉とは謂へない…… 私を生むで…… 敢て呉れたとは謂はぬが、ま、生むで、そして此の深い樹立と此の薄暗い陰氣な家と、それから近隣に對して或階級と、幾分かの財産とを私の所有(もの)として置いた…… 併し其を保存しやうといふ約束もしなければ、何うしやうといふ約束もしなかッた。設(よし)また約束があッたとしても、一度私の所有(もの)となッたら、普通の條理から謂ッて私の勝手にする權利がある。何しろ私は、都ての事件と事物から自分を引離(ひきはな)して了ひたい、そして思想を遊離させる、體を自由にする。」

「では貴方は、何うしても此の家を破壞してお了ひなさるんですか。」

「然うさ、家が古くなると、空氣が腐敗する、バチルスが蔓延する…… 私は其の腐ッた空氣とバチルスの刺戟に耐えない。」

「それも虛僞だと思ッたら可いぢやありませんか。」

「虛僞と思へ? 成程貴方は怜悧なことを謂ひますね。併し其は自分の神經、または意識が現に刺戟されてゐるのだから、こりや虛僞と思ふことは出來ない。例へば貴方が此の家の裡(なか)で汚辱を受けた……

…… 其の事實はもう消滅して、假想に近い過去の記憶になッて了ッてゐる。雖然其時の刺戟は、今に連續して、私を苦しめてゐる…… 其の他種々な具體的の出來事が、抽象的刺戟となッて、斷えず私を苦

しめてゐる。先づ第一に此樣なことがある。私の家の記錄を見ると、此の家の上棟式をした時に、何うした機か棟木が墜落て、一時に七人の大工が即死してゐる……とすると、此の家は其時からもうケチが付いて、所謂不祥の血を流したものなんだ……其も假想的事實となッて了ッて、私自身とは何等の關聯も無い。雖然私は其の記錄を見た時に甚く刺戟された。それから幾代の間、村民を脅迫して村の怨府となッたり、繼承の問題で肉親が嚙合ッたり、また或時は些としたお家騷動的疑獄もあッて、家の自慢の記錄が恰で一種の罪惡錄だ。これも私とは殆ど沒交涉で、單夢幻的に其の事件を想像して見るといふに過ぎぬ。併し其夢幻的想像が何故か強く私の神經を刺戟する。また手近なところをいふと、厩にゐる那の馬だ、ありや私の阿父を殺した罪人なんだが、私の弱い心では、思切ッて屠殺者の手に渡す氣にもなれず、されぱと謂ッて、誰が獰猛な悍馬を購ふものぢやないのだから、結局私が那如して生涯監獄に入れて置くやうにして飼ッて置かなければならない。これも一種の刺戟となッて、私といふものは、斷えず種々な刺戟に突つかれて、恰で臆病な驢のやうになッてゐる……そこで何うかすると弱い反抗心が發作的に身裡に沸騰して來る……反抗すると謂ッて何も對象物があるのぢやないが、此の發作的の力でもッて何か爲やうとする……また爲なければ生存に耐へない。」と懶いやうな顏をして、「と謂ッたら、今度の破壞の動機も約解るでせう、何有何等の意味も根底も無い些とした刺戟の反應に過ぎないので。」

蓮子は、何時かスッカリ醉か覺めて了ッてゐた。

「無雜作なんですね。」と蒼ざめた顏で、吻ッと歎息する。

無雜作さ、人生は都て無雜作に出來てゐるんだ……私が自分で破壞するといふから、或は狂氣の沙汰

のやうに思はれるかも知れんが、併し偶然火が出て燒けて了ッたら何うだ…… 甚だ無雜作なものとしなければならんね。蓮子さんにしても然うだ甚だ無雜作に生涯を破壞されて了ッたぢやないか。」

「然うですのね。」

「心理學者は、人間は腹が空盡ると眠くなるものだと謂ッてゐる、私等も其通だ、幾ら考へても探ッても、何んにも得ることが出來ないで、腹が空盡ッて了ッた、て何時か昏睡の狀態に落入ッてゐるんだ。」

「寧のこともう昏睡して了はれると可いんですけれど、時々何んか胃の腑に入ッて來るんですもの。」

「入れなければ可いさ、超然としてね。」

「出來ません、私にわ。」

「ぢや爲方が無い、覺めたり昏睡したりしてゐるさ。」

「苦しいのね。」

「苦しいと感じなければ可いぢやないか。何方にしても都て無意味で空虛なんだから……」と謂ッて、蓮男はフト立起ッて、障子を啓けた。

月が出てゐた。廿日位の月だらう、淡い冷な月の光は、鈍色のガスに籠められて、其處らの物の影も物の象ももや〳〵としてゐる。

「これが昏睡の色だ。」と蓮男は靜に謂ッた。蓮子は正直に外を眺めた。そして、「昏睡の色」と呟きながら熟と眺入ッた…… 其處には伐倒された大きな樹が横はッてゐたり、伐下ろされた枝が積上げてあッたり、荒廢した狀が歴々と眼に映る…… 或は心に映ッたのかも知れぬ。處々に新らしい切株が、微白く昏睡の色を斑けてゐて、少し奧の方は、ガスにボカされた夜幕に閉されて黝然としてゐた。ガスが凝

ッて落つるか、ふとするとポタリ〳〵幽な音が地に響く。樹の切口、ヲガ屑は清新な芬(かをり)を放ッてゐた。

「達男さん」蓮子は沈むだ聲で呼掛けて、貴方、此の暗い影を御覽なすッても、何んともお感じなさらないの。」

「感ずるさ。」

「然うでせう、私は何んだか、自分の滅亡が眼前に迫ッて來たやうな氣がしますわ。」

「然う、其樣な氣もしないぢやない。併し都ての有機體は何時か一度は虛無に歸する……だから何う感じて見たッて爲樣がないぢやないか。ま、爲方が無い、お互に、活きてゐるうちは、何か感じたり爲(し)たりしてゐるのさ。」と謂ひながら、達男は靜に障子を閉めた。兩人の淋しい影は、また駢んで、汚ない古壁に薄ッすりと映ッた。其處らには種々な書籍や雜誌が埃に埋ッて亂次(しだら)なく散亂してゐた。

（をはり）



卓上

眞山青果

「僕は何故と云ふ言葉が大嫌ひだ。」と西洋畫家のM君が云出した。マカロニシチウに些いと酢を利かせたのが大の好物で、曩からこればかり三皿も平らげた。背の圖拔けて高い、顎の大きな人、鐵縁の目鏡の玉が一つ裂けたのを掛けて居た。

詩人と小說家、それに畫工、若い美術家の集まる七人會の席上である。今日は二人缺けて五人しか居ない。M君は一座の放言家で、何時も話題の中心者とならなきア承知しない。

そして又云ふ。「然うしたら君等は、僕が何故を嫌ふ譯を何故と聞くだらう。それが大嫌ひなんだ。理屈は無いよ、昔から何故で繪を書いた人が無い如くさ。」と云つて、ビールを高く、あふつた。斯うなつて來ると、皆默つて聞くより外はない。

「おい、佐川が居ないよ。」とM君は隣席の宮石と云ふ新體詩人に云ふ。

「君が餘り氣焔を吐くからよ、遁げたんだらう。」と恐しく派手なネクタイの詩人は笑つた。

「呼んで來いよ、佐川が居ないぢや話にならん。」

「舍せよ、苦しさうだ。」

「關はんよ、問題があるんだ。」

「あつちだ、バルコニイで今風に吹かれて居る。眞蒼な顏して居たよ。」と他の一人が云ふ。

女中がその佐川を探しに立つた。

「然し近頃の佐川君は些と變だね、甚くこずんでやがるぢやないか。仕事は怠けるしさ。」

と宮石はその間を小聲で云つた。

「ふん〳〵。」とM君は急しく頷いた。そして、その事よと云つたやうに目で笑つた。

頰の蒼削けた、痩せた佐川が入つて來た。額の高い、目の沈んだ男だ。赤緒の草履を冷たさうに素足である。

「おい佐川。」とM君は高張付。「今面白い話が出たんだ。例の僕が For what reason と云ふ言葉を嫌ふ譯なんだ。」と獨りて景氣付いて居る。

「又かね。」と佐川は力なく笑つて、椅子へ掛けた。

その風を見てM君は、「おい、シッカリしろよ、些と御見舞申すぞ。」

「あ、何うても。」と着薄の前を掻合せて居る。

M君は話出した。

「僕の親友に何故と云ふ口癖の男がある。矢張同じ西洋畫家だ。技倆は左程ぢやないが魂で活きてる人だ。流行の畫風に飽足らんて、畫面から強い光を退けて、煙脂色をパレットに復活させやうと努めて居る人だ。今の畫家を『鳥の目で書く』と嘲つて居る。その男だ。恐しく何故と云ふ言葉が好きて、何故酒が飲みたい、何故繪を書きたい、と乾度根本から問返す。晝寢にも何故、疝氣にも何故と云ふ。それも好いよ、然し一番癪に觸るなア、僕が折角好い畫題を見付けて、吹聽ながら相談に行く時だ。一時間も二時間も内容や趣向を僕に喋らせて置いて、そして落付拂つて一番最後に曰くさ、『それが何うしたと云ふだらう』と反問するんだ。癪に觸るね。何故が判つて繪を書く奴がある者か。何故と云ふ根本には畫を

して置く所に吾々の藝術があるんぢやないか。何故は藝術をひらく鍵ぢやない。その癖、當人と來たらツブ描けないんだ。コマ繪一つ書くにもギイ〳〵苦しがつて居る。冷たい目はあるが手が無いんだ。忽け者てね、年中流浪してやがる。そして、他に對すると必らず、『何故』とか『何う云ふもんて』と勿體ぶつてこきアがる。面憎いね。人間は好きだが態度が實に面憎い。そんな時にや、落付き拂つて吹ふ奴の煙草ののみ振まで癪に觸つてならん。畜生！描いて見せるぞと何時も僕は肚に思ふよ。

處がだ、聞給へ、この癪に觸る問に答へる痛快なる返語がある。東京にや無いやうだが、われ〳〵奥州人のみにある言葉なんだ。それも大人は云はない、小兒の間だけだ。君等試みに奥州の小兒を捉へて何故と問ふて見給へ。屹度、『唯！』と答へるに相違ない。東京なら『何故でも』と云ふ所よ、それに問を嘲つてやる意味もある。簡單にして明快ぢや無いか、即ち吾等藝術家の心なんだ。すると今度は問ふ方が癪に觸えて、『何故唯だ。』と斯う來るさ、小兒は濟したもの、『唯の唯』と答へる。『何うして唯の唯？』『唯の唯の唯』。幾回でも幾度でも續けて行けるんだ。」と言半してM君は些いと佐川の方を見た。

佐川は囊から阿蘭陀芹の白根を、前歯てチヤキ〳〵嚙みながら空しい顏て聞いて居たが、旋てその大きな目を凝つと据えて、水銀のやうに重く見えるフラソコの水に見詰めた。目の覺きやうて、瓦斯の光がキラリと水に光つた。

M君は指を突込んで、新しい露西亞巻の赤い封目を切つた、火を點けた。

「その男、今話した男だ。これが或る時戀をした。相手は素人下宿の娘てね、今年十五か十六の小娘だ。胎毛のやうに眉毛の游すい、色白の、些いと愛らしい娘だが、何しろ未だ盃ツきしのネンネて、桃色メリンスの兵兒帶を結んで、手紙を障子の間から投込んでバタ〳〵椽側を駈出して行かうと云ふお轉婆さ

んだ。學校は女學校の二年級と聞いた。友人はそれに御坐つた。所がその男の事だもの、口說けるものか、口說いたつて何うだか知れるものぢや無しさ。そりや見て居ても氣の毒なほどであつた。相手には寄らず觸らずにソットして置いて、その周圍をグル〳〵煩悶して廻つて居る。恐らく膝を並べて坐つた事もあるまい。そしちや、その一言一動に恐しく氣を揉んで、あゝだ斯うだと奥深い考ひ方をして居る。同じ年頃の男の子と馴々しい口でも利いてるのを見やうものなら、全くその晩は眠らないでの懊悩さ。例の『何故だ』『何う云ふもんで』が切りと出る。何時かなぞはその娘の歩み振が變つたとて、奴さん大心配、處女が外輪に歩るくやうに變るのは生理上どんな徵候だなぞと、僕を惱しに來た事がある。これが女になつた徵だと。耻入りながらも喜ぶ風が見えた。

て、或る時、秋日和のほか〳〵する午後だつた。散歩ながら遊びに行くと、先生は娘と二人日向へ出て、鷄の雛の嘴へ小工面にナイフで刻目を彫つて、それへ一々朱墨を入れて居る。隣家のと間違ふからだと云ふ。隨分居た、何しろ卵を賣つて三人の小見どもの敎育費にするんだもの。娘はケッ〳〵騒ぐ雛を横抱にして持つて居る、先生は爪切の尖で固く嘴を抑えて、コッ〳〵お仕事だ。するとね、俯向いた男の頰が些い〳〵と娘の白い二の腕へ觸るんだ。何時までも凝つとして居る時もある、押付けるやうにして。無論軀と軀はピッタり喰付いて居る。恐らくこれが娘の軀に觸つた最初だらう。『よ、早くよ、何をしてるの。手がだるくなつた。』なんて娘を焦れさせて喜んで居る。男の目元はホッと紅くなつて、頰や小鼻には汗が滲んで居たよ。僕に向つては『些いと待つてくれ給へ。』とはかりて、娘が『お客様もあるから又の時にしませう。』と云ふのを無理に抑えて、到頭三十幾羽と云ふ手術を終つた。僕は二時間近く椽側に寢て居た。

その日だ、僕は餘りの馬鹿々々しさに、初めて眞面目な忠告をした。相手が相手だもの許せんぢやないか。すると友人は默つて話を聞いて居た。忠告に從ふとも從はんとも云はない。そして、「何故惚れた。」『惚れて何うする積りだ』と根掘り葉掘り尋ねても更らに云ふ所なしさ。今云ふ唯！の口だね、唯の唯！唯の唯の唯！何所まで行つても話が乾ないんだ。馬鹿な話よ。」とM君は勢好く笑つて、「ねえ、佐川。」と付加へた。

「あゝ。」と佐川は鈍く答へた。そして矢張り凝つとフラソコを眺めて居る。手の阿蘭陀芹は葉ばかり殘つた。（をはり）

次號の小說欄の如何に振ふべきかは卷頭の
新年號豫告を見よ

短篇

三木露風

疲憊

柱の上にたゆみなき
時計のひびき、かつ絶えて
また耳に入る、夜の闇に
あゆみとどめぬ夢の音。

うつつに聽くや、君もまた——
眠の夜の床ちかく
壁につたひて氣倦るき音
闇にはひとりひびけるを。

深き夜なりき。——時につと、
鳴りこそわたれ、古時計。
ほちほちと吐く音のゆるび
疲れくるめく闇のこゑ。
何の痛みか身をきざむ。——
惱みて打てる銅振子。

樹立の歌

樹立に透ける月光の
影をかはして葉ぞ顫ふ
霜月ゆふべ、夜の森は
野面に黑くうかびたり。

ましろき霧の薄き濃き
とざせば青む月の中、
消え消え沈む森の影、
あはれに深きためいきよ。

かぎりもあらぬ野のはての
狹霧の胸にひびきつゝ
流れはなげく、はかなげに。

されども秋の夜の月は
今こそ入らめ。ただかくて
殘るは闇か、——いかに樹立よ。

和歌　紫舟選

○　佐野翠坡

砂の上にたてたるに似てあやうきになほも君住むわが胸の家

十三絃上にましろきみ手の花十ひらはらめき玉の音ぞする

たのしさをもれる心のうつはものくだくる音す別れと言ふ日

わが少女奪うとあしき人あまたきたるや夜半の木がらしの風

さゝれなみ君が頰に似る貝殼をさゝやく上を月はてらしぬ

林檎つみ車いく輛ゐならべる上に濃青の秋の空かな

秋かぜは木立の上にしろがねの絲をしもひくさや〳〵になる

わが心濃青き秋の大空の光りあふぐに似てたれるかな

○　梶原白花

月青う霧より登る小野の夜は涙ふさはぬ子に涙みる

秋の雨葛の花さく戸によりて國さかり住む子を想ふかな

歌もなくよき子はいねし閨の戸に白菊うつすありあけの月

棺負ひ冥府のくら坂くろ金の戸に吸はるゝとくらき灯に居ぬ

檳榔毛の車もきしる鐘鑄すと人せぬぎ合ふ上京の寺

○　河村杏果

大なる紅蓮華さきしかたちして山はまろびぬ日昇るとき

こほろぎは琴に柱を置き弾く人と並びて啼きぬ月の秋の夜

おん言葉たまはぬひまはいと暗き杜をも過ぐる心地するかな

白萩やまろらに秋の灯をめぐり連歌して居る女づれかな

しのゝめの銀の細川橋の花の香をのせながれて
しかな

○　金城順起

立木みな身ぶるひすなり上つ毛や赤城平に風お
こるとき

鯨船三四灯をしぬ月しろく八百潮ひかるあらす
かのうみ

美くしき胸の花こそ開きたれ御光たまへ日に似
たる君

美くしき人を呪はず酒に行くあやしき心あはれ
みたまへ

○　大津照水

うつくしき夢をみませとよき人は窓の小瓶に花
さして去ぬ

月いづや野の穂ずすきの一列に過ぎ行く風の道
こそ見ゆれ

秋の水木がくれ闇になげうちしつるぎの如くし
ろ光るかな

紅珊瑚花藻の間にほのめくや雲間に月の今見え
そめぬ

君が家は垣のあけびの紫にみのれるあらん秋は
戀しき

その運命二人にようも似たらずや空に別るゝ夕
ちぎれ雲

きりぎりす少女めかしてよもすがら窓の緒琴の
絃の上になく

○　石原鬼灯

酒精(あるこはる)舐めにし舌と三伏の二十四時をもえて焔
す

世の常の酒には狎れぬ獅子狩に蕃族が飲む料も
てきたれ

○　中野紫葉

ゆゑしらず胸のぞかるゝ思ひして襟そろへみる
夜の不安かな

しげしげとわれ覗ひてふくらみて立ちもゆかざ
る秋の日の鳥

わが胸をさゝめきよぎるおなじひとおなじ瞳は
君なりしかな

○　佐藤琢琅

秋の空南國に見る綿畠に似てむらがれるしろき
雲かな

わが心小さきがうおぶ思ひの海波大らかに立ち

さわぐかな

橋田濤の人

山の宿葉の軒端に月さしてまろ寝ながらにきく河鹿かな

榾の火に獲物まちわぶ獵人の十三人に木曾の夜ふけぬ

○　小河薄村

わが胸は蒼く黒ずむ海なるに漂ふ歌の白帆もありき

○　庄崎溪石

耳鳴りか秋を寂びゆく蟲の音かえわかぬまでに靜なる夜や

妹はうれひ知りたる樣にしも白き頸垂れ物語り聞く

○　堤明敏

木洩日に朽葉はにほふ我がこゝろ何に生くべき此の日頃ぞや

人と人かたみに語なく燈火のゆらぐを見つめひと時を經ぬ

次號　十二月十二日締切



應募和歌は小石川區原町百三十三番地尾上柴舟宛の事



乾鮭

乾鮭の骨切る宵や狐啼く　へき生
乾鮭や君を迎へて酒乏し　同
乾鮭や冬ざれ市の夕霞　同
乾鮭や眞田が庵の古柱　同
闇汁に誰が乾鮭の頭かな　同
乾鮭にかゝる自炊の烟かな　同
乾鮭や冬暖かに蠅一つ　同
冬ざれや乾鮭提げし痩法師　同
乾鮭の頭も捨てつ煤拂　同
乾鮭の骨にひゞくや冬の雷　同
乾鮭に流るゝ煤や雨の漏り　同
乾鮭や狸啼きよる杣が宿　同
河豚の讃乾鮭の賦もふるひけり　同
乾鮭の骨打つ斧の響きかな　同

乾鮭や窓を開けば雪の峯　同
乾鮭の市立つ村や歸り花　同
人は瘦せ鮭は乾びて寒の梅　同
乾鮭に川風寒し船の窓　同
乾鮭を提げて狐に見られけり　同
長短乾鮭二本吊るしけり　同
冬の蠅乾鮭の口覗きけり　同
乾鮭に榾の埃りや春近し　同
乾鮭も棒鱈も吊り杣が小屋　同
乾鮭や天窓圓めて俳諧師　同
乾鮭に春待つ小野の小家哉　同
乾鮭も干菜も吊りぬ去來庵　同
乾鮭や狐に出逢ふ戻り馬　同
乾鮭も佛も煤の同座かな　同
乾鮭の鼻嚙む鼠叱りけり　同
乾鮭の句皆優れぬ自炊吟　同
乾鮭の市や人呼ぶ聲高く　花瓢
乾鮭の片身削かれて釣られある　玉雪
乾鮭に山居淋しく日暮れぬ　夜色
藁苞の乾鮭片荷や玉あられ　羽川
乾鮭や木のはしくれの瘠法師　縱橫

乾鮭や一人隱居の句をよくす　青波
弱き日や乾鮭ひさぐ店庇　湘南
身の丈けの乾鮭提げて使かな　竹枝
棒鱈は煮るべく乾鮭は炙るべし　方外
乾鮭や男世帶の鈍庖丁　柳子
乾鮭に一句／＼と句の優る　山柿
羅生門乾鮭提げて通りけり　春洋
乾鮭の下に佗しや鹽俵　刀川
乾鮭に鑄らんとぞ辭世の句　白烏
乾鮭を叩かば折れん反り刀　尺水
山住の師に乾鮭の一尾かな　鐵伯
乾鮭や狐に似たる犬の顏　蜂居
今日もまた乾鮭の香や湯の宿り　樵子
乾鮭を並べて干すや川並木　菊菜
乾鮭と一つ繩なる昆布かな　巴李
村夫子の乾鮭儒者の干鱈かな　釘山
山茶花の影乾鮭の口にあり　青居
人の影乾鮭の影障子かな　朱郎
乾鮭を提げて野道や冬の月　骨壺
乾鮭や市井の貧に心よし　青奴
乾鮭を叩く寒夜の隣家かな　同

乾鮭や石見の宿の酒惡しき　一碧
乾鮭に叩きつけたる庖丁かな　同
乾鮭を猫にひかれて星凍る　釜村
乾鮭に猫の眼玉の光りけり　同
乾鮭の首に貧居の年暮るゝ　牛叟
風呂吹の湯氣乾鮭に屆きけり　同
乾鮭は目ぼしきもの貧居哉　初聲
乾鮭に通ひ路馴れし鼠かな　同
峽に入る乾鮭一駄時雨れけり　霜葉
乾鮭や爐の火に光る太柱　同
乾鮭に賴母子會や漁師町　犀星
乾鮭や昨柚を燒きし同じ爐に　同
乾鮭に震ふがた／＼雨戸かな　濃雨生
乾鮭や老の生活の箸削り　同
乾鮭に日割れの柱鳴りにけり　沐雨
乾鮭や徒然として響あり　同
乾鮭やいよ／＼瘦せて賣れ殘る　鹿の子
乾鮭の中にカンテラ燻りけり　同
乾鮭やならべて吊るす唐辛子　同
乾鮭を炙る圍爐裡や柚子の釜　京杜
乾鮭に飽きたる頃や狸汁　同

乾鮭や荒物も賣る木賃宿　同
塾頭をそしる乾鮭日記かな　草童
乾鮭と山鷄吊りし旅籠かな　同
乾鮭や神棚の灯にぶらさがる　同
から〳〵に乾いて鮭の佛果かな　嵐舟
乾鮭と古暦と寒き柱かな　同
乾鮭のあるかひもなき眼玉かな　同
乾鮭や世にそしられて我老ひぬ　星象
乾鮭や柱に古き鑿の痕　同
三角に乾鮭の首落とされし　同
乾鮭を吹くは鳥海おろしかな　佟光
菊は枯れ鮭はからびる嵐かな　同
乾鮭の只一本に冬ごもる　同
乾鮭の贅を爐邊の柱かな　散木庵
乾鮭を提げて城下を戻りけり　同
乾鮭や薪水の勞自らす　同
乾鮭や盧山の下に隱れ住む　同
鮟鱇に牡蠣に乾鮭を閑却す　同
乾鮭の頭となりて五日程　總子
乾鮭をすかと置きけり上り口　同
乾鮭は食はて菜汁の十日哉　同

から鮭や師走の市の灯に下る　同
から鮭の石ともならで下りけり　同
乾鮭や坐頭暦の煤けたり　十湖
乾鮭に貧の柱を飾りけり　同
乾鮭や山雀飼へる山の宿　同
乾鮭の賣れざる市の時雨哉　同
乾鮭の切り身に餘日數へけり　同
乾鮭の柱下に寢ねて寒き夢　渭南
壁にうつる乾鮭の影瓢の影　同
片殺ぎし乾鮭に窓の夕日さす　同
乾鮭の眼に庵の埃かな　同
乾鮭の頭殘りし柱かな　同
乾鮭の殺ぎとられ行く日數哉　同
乾鮭や松前侯の荷宰領　小魚
乾鮭の柱になびく油煙かな　同
乾鮭や机上に古き八犬傳　同
乾鮭や灰に手習ふ寺子ども　同
乾鮭にかも似て長き題かな　同
乾鮭や飼はれて古き庵の猫　同
乾鮭の頭鮒やつくねもち　同
乾鮭や一管の筆に庵を守る　鬼洗

灯に寒くから鮭の歯のあらはなる　同
乾鮭に荒む夜風や壁の穴　同
錆刀乾鮭の首落としけり　同
乾鮭に燗酒冷えたる夜風かな　同
乾鮭やかたくなの身の節に老ひ　同
乾鮭にすゝる茶漬や俳一味　同
乾鮭や六祖の偈など壁に貼る　同
乾鮭や貼り古したる魔除札　李王
乾鮭もありて轉居の車かな　同
乾鮭に世上の話疎みけり　同
乾鮭や底かきならす飯の櫃　同
乾鮭を炙る暇の一句かな　同
痩馬に乾鮭の荷や向ひ風　同
乾鮭に一冬の吟一千句　同
乾鮭を吊るす柱の歪みかな　同
乾鮭の市　矢立の墨かるゝ　同
乾鮭の賛を乞はれぬあなかして　同
干鮭やわが老を守る姪一人　石鐘
干鮭に酌むや木祭る木曾の衆　同
干鮭の尾頭佗びし小風呂敷　同
月の枝に熊のから鮭からびけり　同
干鮭を洗ふ妻しも古りにしか　同
おろかしや乾鮭斷ちし腕のなへ　同
干鮭の荷を解く土間や風の雪　同
越後から干鮭屆く師走かな　同
干鮭に箸せで大酒煽りけり　同
干鮭の腹に響くや後夜の鐘　同

募集課題

初空　十二月十二日締切
蜆　一月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

尾張國青波氏に答ふ。投稿規定とては應募句數を五十以内に限れるのみにて他に何も無し。句の好惡によりて十句の投吟を十句とも掲ぐるとあるべく五十句の投吟中一句も掲げざるとあるべし。

備後國鱗洲氏に申す。「柚味噌」の御投吟は十九日に到着したる爲め乍遺憾沒書せざるを得ざるとなりぬ。そのうち

柚味噌に長廣舌を焦しけり
提唱のすみて御粥に柚味噌哉
好くからに柚味噌庵主と呼ばれけり

を面白しと拜したり。本月は殊に締切期日を十二日に繰上げたれば遅着せざるやう投吟ありたし。



鐵道改良の一策

XY生

近時鐵道に對する愁訴の聲到る處に高し、之を以て悉く非鐵道國有主義者の咒詛とのみ視るべからず。

貨物停滯は必ずしも現在鐵道廳のみの責任とす可らず、第一貿易額の著るしき增加に由 證明せらるゝが如く、輸送さるべき貨物の一般に大に增加したれば也、第二鐵道速達便の汎く行はるゝに由て增加したる貨物も亦少からざれば也、第三長距離運賃の低減によりて增加したる貨物も亦甚だ多ければ也、第四多く見ざる大水害によりて鐵道の破壞せられたる所少からず、殊に被害の程度意外にして容易に復舊せざる所ありて、輸送力の減じたると亦少からざれば也、大演習によりて各所の普通貨物の輸送を中絶せられ、殊に名古屋以東福島以西に於て其の事甚だしければ也。

此等の事情によりて生じたる貨物停滯を以て、當局者の責任とし、鐵道國有の咎なりといふは苛酷に過ぐ、然れども鐵道當局の自から警めて而して改良に鋭意すべきもの絶無に非ず。

彼の法規に拘泥して繁文褥禮の官風を吹かすが如きは、少くも斷じて排斥せざる可らざる弊害也、山陽線馬關停車場のホテルに於て、食を求むる客一片の麵麭なきを以て、之を食堂のボウイに購はしめんとす、曰く堂々たる馬關に於て、而かも此のホテルに於て、豈一片二片の麵麭を得ざるの理あらんや、ボウイ曰く、一片の麵麭を購ふにも亦傳票を要す、而して傳票は當該官吏既に退出したるを以て之を得がたく、隨つて一片の麵麭と雖も購ふを得ざるなりと

記せよ、世界何れの國にかまた斯の如き馬鹿氣たる

事實を見るを得ん、然るも我が馬關にては正さしく之れ有りき。凡そ法規を墨守し、條文に拘泥する鐵道の大小諸員に、斯の如き非常識的行事甚だ多し、之がため徒らに鐵道事務を煩瑣ならしめ、延きて乘客に名狀す可らざる不便を與へ、且つ貨物停滯を來すに至つては、天下何人も之を回護すべき口實を有せざるべし。

卒直にいへば、今の鐵道廳の總裁副總裁皆工學博士にして、其の技師また悉く工學の博士たり學士たり、故に鐵道建設の上に至ては、必らずしも著るしき缺點あらず、但だ鐵道營業の一事に至ては、幾んど純然たる商賣行爲なるが故に、十二分に商事の才覺智惠あるものを要すべきに、我が鐵道廳の幹部には斯の如く商思商才あるものの存すると吾人の未だ見聞し能はざる所とす、故に鐵道廳に限り特別任用令を極端にまで應用して、官吏學者以外、別に純然たる商思商才あるものを拔擢し、主として營業事務を管理せしむべし、然らば非常識的なる繁文褥禮等總て跡を絕ちて、我が鐵道輸送の面目一新せん乎、今日鐵道に對する一般の愁所を豫防し、鐵道國有の利益を示すべきの途、恐らくば此の外にあらじ、吾人は切に之を當局に促す。

今後十年間の二大問題

樗陰生

我邦今後十年間の二大問題はいふまでもなく、財政問題と社會問題と也。而して前者の樞軸をなすものは關稅問題にして、後者の中心をなすものは勞働問題也。

關稅問題は對列國の政策と關聯するを以て、列國の感情及び利益を斟酌すること固より愼重ならざるべからず。漫りに稅率を過重して列國の利益を侵害し、因て彼等の惡感を購ふが如き輕忽の擧あるべからず。而かも國費は年毎に膨脹す、而して民力は限りあり。民が此膨脹する國費の追求に應ずること假令不可能ならずとするも少くも至難事たり。是に於て吾人は比較的容易に國費と伴うて膨脹し得る財源を求めざるべからず。求めて關稅の一目を得たり。關稅若し唯一方途たらざるも必らず其最も主なるもの也。其拇指を指すべきもの也、少くも今後十年間は關稅の膨脹を以て國費の膨脹を支辨するの方針を執らざるべからず。而して關稅の膨脹は適度なる稅率の引上げと稅目の整理とより來る。而して此二者をなすの道は固より關稅に對する根本主義の確立にあるや論なし。

關稅の問題は現在の問題也。生ける問題也。學者机上の解剖に附せらるゝには餘りに血の氣多き問題也。固より關稅にも歷史なきにあらず又

學說なきにあらず。古代に於ける通過稅。中世に於ける輸出稅。而して近世重商主義の唱導と共に漸次に輸出稅に代てあらはれ來り、今日に於ては殆んど關稅の全部を占めつゝある輸入稅。(學說としては絕對的獨占品に少許の輸出稅を課するを惡しゝとなさず。又事實としても輸出稅を徵するもの印度の藥種稅、米稅。ブラジルの珈琲稅等あり、又英國も政略上よりなりとするも石炭輸出稅を課しつゝある等の例外あるも、原則としては一般に輸出稅を認めず、若し認むるも全く從屬的の位置にあること疑なし)等の變遷あり。又學說として收入主義はアダム・スミスによつて確立せられ、保護主義はリストによつて皷吹せられ、其他の學者皆各々其思ふ所を語りたるも、議論まだ一定せざる中。前世紀の末葉より九十年頃に亘つて歐洲の貿易は沈滯靜止(スタンドスチル)の狀態にあり、一時さしもに喧しかりし自由、保護の爭論も又世人の注意を惹くに足らず、從て關稅問題も甚だ重要視せらるゝことゝなかりしに、我邦の極東に勃興するに至て東洋問題漸く持上り、一度砲火を切て淸國を破り、再び劍戟を揮うて露國を討ちたる今日に至ては東洋通商、東洋貿易なるものが彼等唯一の大問題となり、商業も此新局面の開展に乘じて活潑となり、關稅問題が再び非常なる重要問題となれる也。否な從來嘗て其比を見ざる程の重要問題となれる也。

關稅問題の現在の問題なること、生ける問題なること、重要の問題なること前述の如し。然れども關稅問題の我國に於ける更に之より甚しきものあり。我國にとつてはこれ單に現在の問題たるに止らずして又將來の問題也。生ける問題たるに止らずして又生長すべき問題也。重要の問題たるに止らずして又最緊要の問題也。其國の狀態と其時の情勢によつて變形さるゝこと多き、かゝる問題に向て百年の大計を立つる寧ろ不利なりとせんも、十年の計は即ち立てざるべからず。而して立つるは今日にあり。稅目徒らに繁多に失して毫も統一なく、同種の貨物にして課稅は即ち有るあり無きあり。有るも率は重きあり輕きあり、極めて頗珍談なりし我國從來の關稅率は昨年の改正によつて稍々其面目を改めたるも、改正の餘地は未だ充分に之れあり。而して改正の第一に來るものは其根本主義の改正たらざるべからず。今日の關稅法には極言すれば根本主義なし。一貨あらはるれば從て議し、一物來れば又從て論じ、二者の間に何等の根本の主義なきが如くに見ゆ。吾人は無稅品とすべきものと、低率稅を課すべきものと、高率稅を徵すべきものとの根本主義を確立し。而して物の品類を分つこと大綱に止めて煩瑣に亘らず。徵收の手續處分の簡便にして一貫せんことを希望せざる能はざる也。

世或は關稅は國庫の收入を增加するものなりてふ收入主義を唱ふるものあり。又或は關稅は外國品に對して國內產業を保護するもの也てふ保護主義を唱ふるものあり。前者は英國の學說に動かさるゝものに多く、後者は米國の實例に倣はんとするものに多きに似たり。而して二者皆二國の國情の相違より起りたるものなるを知らざる也。英國は鐵と石炭とを除く外、日常の必要品を產せず、悉く之を外國より仰がざるを得ざる也。收入主義を執らざるべからず、又執て有利なる所以也。米國は自然力殆んど無盡藏にして產業發達すれば總ての貨物は國內にて產出し得、又產出するを得策とす。是れ保護主義を執らざるべからず、又執て有利なる所以也。我國は英國にあらず、又米國にあらず。吾人の見る所を以てすれば蓋し英と米との中間にあるが如く思はる。南は北緯二十二度線よりも南に出でたる臺灣より、北は全五十度線よりも北に出でたる占守島まで細長く延びたる我國の產業は、殊に朝鮮を保護國となし、南滿洲を都督府の下に置く我國の產業は其前途發達の有望にして且つ殆んど總ての貨物を產し得ること素より英國の鐵と石炭の如き產出せざるが如くな

らず。故に我國は英國の如く收入主義を執り、只國庫の收入を多くすることの目的のみを以て關税を見ること能はず。必らず或程度に於て國内産業を促進するの道を講ぜざるべからず。然れども産業如何に有望なりとするも、彼の米國の土地廣大にして自然力の無盡藏なるに比ぶれば固より同日の論にあらず。且つ四面環海、貨物の卸問屋、仲買人たるに好都合なる我國にあつては米國の如く保護主義にのみよること能はず。必ずや或程度に於て貨物運送の際に利するの途を講ぜざるべからず。吾人を以て見れば、少くとも今後十年間は我産業の發達し、朝鮮滿洲等の開發稍々面目を改むべき十年間――は關税制度を整理して、税率を適度に引上ぐること策の最も得たるものなるべきを信ず。税率の適度なる引上げは、輸入品の暴超を防ぐも決して現在よりも減少することなかるべきを以て國庫の收入を多くし。而して輸入品の暴超を防ぐことは國内産業の保護となつて、十年間には我産業殆んど其面目を一新すべし。即ち一方には收入主義の利を收め、他方には保護主義の益を享け、所謂一擧兩得の結果を來すべし。從來の學者が多く矛盾するものとして論じたる收入、保護の二主義が端なくも我國に於て相調和することを見出さんも知るべからず。吾人は何となく、かくありさうに思ふ。若しかゝる兩得なくして收入增加の一得あるも一得は皆無に優る。吾人はかるが故に税率を適度に引上げ、税目を根本的に整理せんことを希望せざる能はざる也。然れども吾人は未だ一個の書生也。事實に詳細なる當局者に及ばず、學理に精通する者に若かず。所論定めて遺漏多かるべく、又誤謬も少からざらん。只思ふ所を卒直に語て、此問題の注意を促し、以て識者の是正を待たんと欲するのみ。

今一つの問題なる勞働問題については吾人のいはんと欲する所更らに多し。又其解決の必要も更らに大い也。若し之が細説を許さば吾人は優

に本誌の數十頁を埋め盡すべき材料を有す。然れども此問題については我當局者に於ても夫れ〳〵調査の道を講じつゝあるが如きを以て吾人敢て多言せざるのみ。只一言したきことあり。我當局者は成程此問題を調査しつゝあり。さりながら吾人よりして之を見る、彼等の爲す所甚だ手緩くして齒痒さの感に堪へざるものあり。勞働問題は調査の問題にあらず、實行の問題也。素より調査は實行に先んぜざるべからず。而かも彼等の調査なるものは實行の爲めの調査にあらずして調査の爲めの調査なるかの如き觀あり。たゞ〳〵調査さへすれば夫れで役目が濟むものと心得たるかの如き觀あり。彼等には此問題の重要緊急に對する眞の了解なし、從て同情なし、熱烈なし。たゞ當局者なるが故に止むを得ざる義務として器械的に此問題を取扱へ居るが如し。吾人甚だ之を遺憾とす。近年數ヶ所の鑛山を初めとして其他の工場に於ても、礦夫又は職工の騷擾屢々持上り、社會問題、勞働問題の解決を促がすこと頗る急なるものあるは、誰が眼にも顯然たることなるに、彼等は騷擾のありし其時のみ恰かも眉に火の附けるが如く慌てふためけども、騷擾收まれば又直ちに忘れ去て、昨夜の夢程にも思はず。其時、其場に應じていゝ加減に處分をなして能事畢れりとなす。一國の爲政に任ずるの人が、斯様なる足下、政治をなすやうにては眞に情けなき至りといふべし。夏の夜中戸を開け放て燭を燈す。趨蟲光を慕て燭下に集る。手、打て之を殺す、殺し了れば新たなるもの又來る。又殺す。又集る。而してまだ殺し畢らざる中數十集り來て遂に如何ともし難きに至る。總て禍の本を絶たずして、たゞ其末を拂はんとするものゝ得る所は即ち斯の如きのみ。此事又彼の癰を病むものゝ之を切開せずして膏藥を貼するにも譬ひつべし。癰を治せんとせば切開するに若かず。趨蟲を厭はゞ戸を締め切るに若かず。然るに若く爲す所を以て若く欲する所を求む、彼の齊の宣王たらざるも

孟叟の笑を免かれんと欲するも得べからざる也。社會問題は「資本家（キャピタリスト）生產（プロダクション、）時代（エーヂ）」に伴うて生るべき運命を有す。而して「資本家生產時代」は又大器械、大工場の發明建設によつて出でざるべからざる運命を有せり。かるが故に今後大器械の益々大仕掛となり、大工場の愈々大組織となるに至ては社會問題の頻々として蜂起し續發すべきこと、決して疑あるべからず。社會主義の如き急激なる革命主義が一擧にして社會制度を根底より改造せんとする、其志寧ろ諒とすべし。只我當局者の如き社會主義を嫌忌する蛇蝎よりも甚しき人々が、社會主義の未だ大爆發せざるに於て之を妨止するの政策を行はず、一人之を傳道すれば之を牢屋に入れ、一派之を聲言すれば即ち發賣を禁止し、以て社會主義を沈壓し得たりとなす。淺見寧ろ憫むべし。焉んぞ知らん、大爆發は常に壓迫の極まれる時に來り、大咆吼は必らず沈默の極まれる時に起ることを。我當局者の如く一方には悠々閑々として勞働問題の所謂調査なるものに從ひ、一方には小刀細工を以て局部のホロを繕ふ、勢已に成り機已に熟し、萬人の愁苦抑ふる能はざるに至れば、一人手を擧げ口を開くも輙ち必らず大事をなすに足らん。此點よりして見る、社會主義鎭壓の唯一方法は只社會問題の解決を速かにするにあるのみ。而して又況んや社會問題の解決は單に社會主義唯一の鎭壓方法たるのみならず、又實に國家が國家として、人民を人民として取扱ふに於て、必らず行ふべき、又行はざるべからざる道なるをや。勞働問題には素より種々の問題を含蓄するも國家がなすべき最緊最急のものは即ち勞働法と勞働保險法との二となす。而して此事細說すれば、いふべき事極めて多きも、其詳細は却て當局者の知悉する所ならん。只彼等の足らざる所は、此問題の重要緊急の度合と、之を解決せんとする誠意熱心と、此問題に對する正當なる態度と也。故に吾人其詳細を略して却て其大體を語りたるのみ。



デモル問題

秋骨

原告であるか被告であるか、兎に角余はモデル事件に關係のある身であるが、こゝに一言此問題に言を挿む事を許して貰ひ度い。但し言ふ處は原告としてでもなく被告としててもない。素より辯護人でも檢事でもなく、只局外者としてゞある。

凡そ小說家がその作物に寫す人物には必ずモデルがあらうと思ふ。然るに其モデルの事が此れまでは問題にならず、今日になつて喧しく論ぜられるといふのは此れは今問題となつて居る小說のそのモデルの扱ひ方

が從來の小説のと異つた處があるからであらうと思ふそして此の取り扱の異つた處が則ち作者島崎君の所謂自然派と目される所以であらうと思ふ。藤村君が何時自然派と名乘りを揚げたかと論結した説もあつたが、それは少しくその意を得ない。己は何主義であると始めから公言して小説を書く人はあまりない樣である。自分は小説家であるぞと公言した人も恐らくはあるまい。これ等は凡て世間の認定に依るものである。併し強つて島崎君の公言がなければ承知が出來ぬ、それがない以上島崎君を自然派だと言ふのは間違であると言ふのなら、やゝ公言に近いもの、むしろ直接の公言よりも有力な證據がないでもない。それは島崎君が此小説は某々の事を書いたのだと公言して居る事である。これはモデルその人に言つて居る計りではない、世間に公言して居る處である。此一事は何より明らかに島崎君が自然派と目される所以ではなからうか。從來の作家とても必らずモデルは使つたであらうが、そのモデルは某々の事であると吹聽したのは未だ多く聞た事がない。然るに島崎君に於てはそれを公言した。こゝに於てかモデル問題が起つたのである。大體こんな問題の起るのが則ち島崎君の所謂派と目される所以であらう。流派の如何は敢て問ふ處ではないが、この問題がモデルの取扱ひ方に關するので、不本意ながらその取扱を異にする此の流派の事を言つたのである。

それで島崎君を自然派として見て、それでは何故そのモデルが問題になつたか、何故モデルが飛び出て不平を言ふ樣になつたか。これは或る意味から言へばそれ丈島崎君の成功であるとする事が出來るかも知れぬ併しそれは別として、それでは自然派とは如何なものかといふ事を先づ説明する必要もあるが、それは此處で明らかにする餘裕がない、只自然を忠實に精寫するといふ事、これ丈けは確實で明瞭な點である。但しその自然は作家自身を離れては存在しないのである。自己も自然の一であるが、此の自己を主として自然を見るといふのがその主とする處であるとその派の人は言つて居る。それ故所謂自然といふのも作者の頭に宿つ

た自然である。これは左樣あるべき事であるが、此の理論から推すと、作者の有ゐたモデルも作物の上に於ては、その本人でなくて全く別の人となるわけであるこれは自然派たると否とに關しない事であるが、如何にその作中の人が實際の人と同じて、寸分の相違がなく出來た處てそれは結局別な人てある。則ちこれが藝術の存在する理由てある。斯樣考へて來るとモデルが役不足を言つたり、苦情を言ふのが無意味になつて來る。さてそれては島崎君の作の場合、モデルが愁圖〳〵言ひ出したに就ても、非はその言ふ人にあるのであるか。それに就ては前に提出した何故モデルが問題になつたかといふ事を考へなければならぬ。

自然派の人が取り扱つても實際の人物と作中のそれとは全然別物になる、これは藝術上左樣あるべき筈てあるが、併しながら折々作物と實際と變らぬ點の顯れる事がある。而もそれは一班は了解され易い方面に於て顯れる。則ちそのモデルの職業とか習慣とか性癖とか、あまり本質若くは人物に關係のない、所謂輪廓が實際になつて作中に顯れる事てある。輪廓が實物てあるから、その人物も實際てあらうと推斷するのは普通の考てある。さう考へられるとモデルに使はれた人が迷惑する事もあらう。こゝに於てかモデルの當人が顯はれて苦情を言ふ樣になる。これは如何にも當然な話てあらうと思ふ。余がモデルの取扱ひの違つたために問題となつたといふのは此處の事てある。島崎君のモデルの取扱ひ方が變つて居るとか、若くは上手てあるとか言ふ事は別として、問題となつたのは此實際と作物とを交ぜ合はせた處にあると余は斷言する。

作物のためにモデルが困る親戚知人に迷惑をかけると言ふのも、この甚だ輕々に附すべき輪廓を實際に取つた爲めてある。要する此は道德問題てはない。作者が少し注意さへすれば避け得られる事てある。尤も是非實際のと同じ背景若くは輪廓を備へなければ作にならぬといふ事もないとは言へぬ。併しその場合には實際の事柄も則ち詩となつて居るのであるが、それが他人の迷惑になるか、ならぬかは少し考へれば容易に解る

事である。それが解らぬ位なら小説は書けぬ筈である。それて若し迷惑になると知つたなら、此れは如何に面白いものでも割愛しなければなるまい、少くとも時期と事情の變はるまで發表せずに置くのが普通の道であらう、敢て德義などゝは言はぬ。今の場合余は島崎君が不必要な事實を作中に混入した事を遺憾とするのである。

パノラマといふものは、周圍に實物を置き、遠方を繪畫にして、人の視官を欺いたものである。今モデルが問題となつたのは、此パノヲマの周圍に並べられてある實物から、遠方の光景をまて實物視したからであるさう見たのも惡いかも知れぬが、左樣見せた方も良くはあるまい。パノラマは畢竟目を欺くものである。藝術はそんな胡麻化しをせず。立派な藝術として獨立したい。實物とは全然別途のものと仕たい。但し別途といふのは僞物若くは架空の意ではない、現實より一層眞實のものに仕たいといふのである。



我輩も猫である（十）

白也

いくら秘さうとしても罪跡明亮である以上は自白した方が輕便である、然し行く處まで行つて見なければ鳥渡自白し惡いものだ、成功出來ぬと信じて見ても、愈々失敗の宣告の下らぬ内は、未だ多少の命脈があるかのやうに空頼みして、無駄骨を折るのが世間一般の狀態である、猫と雖ども人間と、人情に於て大した差別はない、愈々せつぱつまるまでは、如何にもして刑罰を免れやうとしてもがゝずには居られぬ、我輩は倒底先輩の樣に、萬事思ひ切りよくばかりはやれぬ、第

一刑罰などは決して愉快なものではない、不愉快なものを避けやうとするのは、動物の本能的根性である、この根性は生半可の解脱や、手ぬるい修養位て容易に左右出來るものではない、左右出來ないと知りながら左右しやうと試むるのは愚である、否寧ろ亂暴である。

扨て今證據物件たるこの足跡を秘す事に就ては、我輩は唯二つの手段を有するのみだ、一はこれを悉く拭ひ去る事、一は猶一層穢して我輩の足跡である事を認識する事の出來ぬ様にする事である、拭ひ去る爲めには再び舌に依らなければならぬ、この舌や今美人繪葉書て大失敗をして、恐惶おく能はざる態に、上下の歯を硬く鎖して、遙かの奥に小さくなつて居る、命ぜざるに彼は自ら其罪に服して、謹て閉門して居る、斯くの如く良心に富んだ者を引き出して、我輩の罪跡抹殺の主動者たらしむる事は、流石我輩も忍びざるの感がある、止むを得ず第二の手段に出でざるを得ない、と斯う考へて先づ前足てぐいとを畳をこすつて見た、赤い一の字がサッと畳に現はれた、並べて又一とつこする一に一加へて二の字になつた、今度は横にやつて見たキの字になる、キの字と見ては興が湧いと思ふと、大きな赤蜻蛉に見える、中々面白い、今度は何に替るだらうと斜(ハス)かけにやつて見たが、最うつかない、見ると前足は大方きれいになつて了つた、もつと何かに替らせて見たい、斯うなるときれいになつたのが反つて心淋しい。

今度は後足だが、黒蜻蛉で終つて了つてはつまらぬ奈何か奇抜な事にしやうと考へて居ると、トン〳〵と梯子段を上つて來る者がある、蜻蛉どころてはない、悪事愈々露見だ、四方障子て遁れる處もない、唯我輩が這入り込んで來た處だけは、約一尺二寸六分ばかり開いては居るが、其處は梯子段のとッつきて、其處から逃げ出せば、梯子を上つて來る者と鉢合せをするばかりだ、と思ふ間もなく約一尺二寸六分の門戸は、銘仙を着た人間によつて一ぱいに掩はれた、見ると妻君である、我輩は今や正に總てを自白すべき運命に遭遇

した、自白するにしても遣り樣が色々ある、極めて大膽に勇敢にする法もあれば、あはれッぽく不憫さうにもちかける法もある、男に向ての自白には前者をとる妻君に向つては後者によるの有利なるに若かない、世の中の事は總てかけ引きが必要である。

おべッかにかけては、餘り自慢にもならないか、恐らく我輩猫類の上に位するものはあるまい、尤も我輩等のおべッかは、唯人間の鼻息を窺ふばかりて、人間の樣に甲に媚る爲めに乙を害するやうな事はしない。今我輩が妻君に媚るとした處で、比較的の例證を擧げて、隣の妻君は臼だがあなたは柳だと云ふやうな論法は用ゐぬ、敢て他人に累を及ぼさない。

餘事は扨て置き、我輩は極めて憐れッぽく自白する爲めに、先づ自分の頭を妻君の足へこすりつけて、悄然としてニャーと泣いた、我ながら憐れ氣な聲だと感服した、當人が感服する位だから、人間などは無論感服する筈である、感情的な動物ほど、感情で動かす事が容易てある。

すると妻君はこの態を見ると、流石に驚いたらしい驚いたと云ふよりも呆れたのかも知れぬ。

「ニャーもないものだ、何を惡戯をしたんだね」と暫時一場の光景を見て居たが。

「惡戯猫だねえ」

と云ひながら約八〇センチメートルばかり爪先きで我輩をすくひ投げた、止むを得ないから投げられたまゝ踞つて、又ニャーと泣いた、

「それでも自分でも惡いと思つてるんだよ」

と遂に妻君は動かされて居る、僅かに二度の泣き聲がこれ程の偉功を奏しやうとは豫期して居なかつた、動かし序に最う少し動かしてやれと思つて、最う一とつ泣いて見た、今度はおまけだと云ふ氣があつたためか、前程には憐れ氣てなかつた、少し出來が惡かつたなと思つたら鳥渡可笑しくなつた、然し最う妻君は出來不出來を鑑別する事の出來る程、心が冷靜ではなかつたと見えて、

「謝罪つてるのかえ、もういゝよ、堪忍してあげる

よ」と我輩の頭を撫でゝくれた、馬鹿々々しい程簡單に濟んで了つた。

軈て妻君は下から雜巾を持つて來て、きれいに疊を拭き淸めた、我輩の罪は妻君の雜巾によつて贖はれて雪の如く淸き身となつた、お影樣で雜巾はきたなくなつた、キリストが萬民の罪の贖になつて、十字架に上つたのも、丁度この雜巾のやうなものだなと思つた、雜巾がキリストで妻君がエホバだと思つた、然しこれは今この場の光景に於ける感想である、エホバの妻君は主人に頭を下げる、主人は大家さんに頭を下げる、大家さんは地主さんに頭を下げる、地主さんは町長に頭を下げる、町長は區長に頭を下げる、區長は市長に頭を下げる、市長は大臣に頭を下げる事までを思ひ出してはならぬ。

エホバの妻君は疊を淸めると、今度は机を淸めにかゝる、茲には顏なし美人があるので、オヤと云ふ妻君の聲に我輩は思はず恐縮した、これには妻君も餘程當惑したものと見えて暫時幽靈然たる繪葉書を見入て居たが神の愛は深くして廣きかなである。

「困た猫だね、旦那樣の御大事な繪端書ぢやありませんか」お尤樣で……とも云はれないから默つて控へて居ると、「買ひ直してでも置かなければ、どんなに叱かられるか知れやしない」と我輩の顏を恨めしげに見たこれには反つて我輩が動かされさうだつた、心苦しくつて堪えられないから、失禮してソロ〳〵と逃げ出して、下のお座敷へ來て見ると、火鉢の上に何かこと〳〵と煮えて居る、可味さうな臭がする、去るに忍びずして猫臺へ上つて、横眼で見ると白い煙がむら〳〵と上る、それが横に靡くと、たまらぬ香が嗅神經を刺戟する、盛に涎液が分泌する、到底我輩の口に這入る可きものではあるまい、せめて臭だけでも十分に貪らうと、鼻を突出してあこがれる、他所から見たら餘り可い姿ではあるまいと思つたが、幸ひあたりに誰も居らぬ、一人で居る時位赤裸々の時はない、見えも外聞も他人があつて初めて生まれる、他人が居らぬ世界へ行つたなら、如何なる行爲も自己の良心に恥る事はなか

らう、人間の所謂良心なるものも、他人の爲めに餘程支配を被つて居る、餘人の支配を蒙つたいびつな良心を、ネーチーアより受けた圓いものだと思つて居る人間は、餘程おめでたいものである。

　と思ひながら漸次鼻を鍋に接近させる、接近するに從つて臭ひは益々濃度を增して來る、この濃度のも一歩進んだものが、即ち實體である、實體の分散が即ち臭ひである、鼻に這入るから臭で、口に這入れば味である、耳に入れば音である、眼に這入れば色である手に觸れて形となり、心に映じて像である、などゝ色々な事を思ひながら、益々鼻を接近させる、實體と臭との境は鍋蓋の內と外である、忍ぶ夜の戀は墻一重である、逢ふ夜の戀は即ち臭と實體と合する時である、と更に思ひながら更に又鼻を近かよせる。

　此時後手の障子を荒らゝかに引き開ける者がある、こんな音をさせて障子を明けるものは下女の糸瓜どのより外にはない、我輩はこの臭を割愛して大急ぎに猫臺から飛び下りた、糸瓜どのは野蠻極まる女である、何事も直ちに腕力を以て我輩を屈服させやうとする、元來我輩は主人に養はれて居るので、糸瓜どのに養はれて居る覺はない、故に我輩は、寸毫も糸瓜どのの支配を蒙る可き道理がない、けれども糸瓜どのはそんな事の見別けのつく賢婦ではない、主人に替つて我輩を統治する醎に不都合千萬である、不都合千萬ではあるが止むを得ない、悲しい哉我輩は糸瓜どのと角する丈けの腕力と辯舌とを持たぬ、自ら戒めてこの暴君の眼にとまらぬやうにするより外はない、愚圖々々して居れば頭の一とつも張り倒される位の處だ、何の罪もないのに張りのめされた事は幾度もある、危險至極である。先輩もお多角の待遇には大に不平を漏らしたやうだ轉た同情の念に堪えない。

　墓地の方へでも行つて見やう、面白くもあるまいが張り倒されるよりはましだ。

新刊批評

▲紅塵　　正宗白鳥著　易風社發行

斑もあるが、概して飾りのない。調ひがないが極めてキビ〳〵した書き方は感服する。此集に收めてある短篇十二篇何れも皆讀める。是れは人は人、己れは己れ、己れの思ふ儘を己れが書く。といふ作者の正直な態度が産み出した賜物であらうと思ふ。「世の中はつまらぬものだ。馬鹿げたものだ。然しつまらぬとて、馬鹿げたとてこうしたものだから仕樣がないだらう。」といつたやうな思想が大抵の篇にほの見えて居る樣だ。從て痛切な事でも深酷な事でも、作者は痛切な事、深酷な事として取扱はずに、アッサリと書き附けて、「けれども愚な事だよ」と笑つて了ふような態度である。物を大袈裟に誇張的にいつた蕩派の反動として、かゝる消極的な、スケプチカルな、シニカルな、内輪的な、見方、書方は一種の面白味を與へる、而して著者のかゝる見方書方が強てかゝる風をとつたのでなくして、自然に、卒直に、眞摯に出て來たので、而して之を遣るに直截で、時には勁拔と思はるゝ程の筆を用ひてあるので一層面白い。此篇全體が銀の滲消しの如き觀がある、近時の短篇集中の確かに白眉である。然し稍もすれば、筋書風か或は說明式になる所を今少し具體的描寫式にやるべき必要のある所は少くないやうだ。氏は獨歩氏の如く深く突込む所もなく、又キラ〳〵と眼を射るやうな光彩を放つ所もないがすら〳〵と無雜作と書いて而かもなか〳〵味のあることを捉へて居るのは又氏の非常なる長所である。こういふ風の書き方が名篇大作を出し得るものなるや否やは疑問だが、兎に角一人を躊躇せずして一作風を出して居る所は嬉れしい。「一夜咲」「好人物」「二階の室」等は充分に書きこなしてあつて氏の筆力が最もあらはれて居る。「近松合」の如き情の多かるべき作物となると作者の筆にも情がないではないが、今少し情を多くして欲しいやうな感じがする、「磐梯山で足を辷らし崖に打たれて死んださうだ」等の句は少からず情趣を殺いて居るやうだ。「妖怪畫」のピストルで死ぬなども勿論感服しない。然し是等は小疵といへば小疵で、大體は皆要領を得て居る。氏の評論には餘り感服しなかつた吾人は氏の小說に少からず感服させられた。益々氏の發達せんことを望む。製本も品があつて極めてよい。(定價六十錢)

▲寒山詩新釋　　釋清潭著　雜堅堂發行

寒山詩を丁寧に釋義せるもの也。寒山詩を講說せるもの嘗きに光融館から出た若生氏の「寒山詩講義」もあれど、此篇更らに學者的に釋義せるもの如し。併せ讀まば益する所多かるべし。(定價五十錢)

▲大日本民族史(第二編)　　伊藤銀月著　隆文館發行

本編は平城時代より北條氏の最後まで凡そ六百餘年間の歷史を描く。例によつて縱橫の筆力、痛快の斷案。學者少しく其小說的なると、其獨斷的なるとに顰蹙すべけんも讀者恐らくは拍案快哉を絕叫せん。青年の元氣を皷舞する讀物として歡迎すべし。(定價六十五錢)

▲山鹿素行言行錄　　渡邊修二郎著　内外出版協會發行

「偉人研究」の第十編也。崇拜するものよりは武士道の元祖といはれ、惡口するものよりは威張つて法螺を吹いて大きな顏をして諸侯の祿を貪んだ橫着者といはるゝ山鹿素行の言行錄也。而して彼の人物の如何について知らんと欲せば、此書不完全ならんも尚其一斑を傳ふるものあらん。

(定價三十錢)

▲哀樂(第一)　前田夕暮著並發行

夕暮氏の日刊歌集にして氏の短歌三十九首を收めたる小册子也。一讀する所、未た思想露骨にして文字の洗錬を缺くもの少なからず、例へば「我れ悲しすべての人の性をもつうらゝかき日に君を戀ひして」の「すべての人の性をもつ」の如さ「あゝ强き君が愛かな死の如くたゝにまともに我胸を撃つ」の「たゝにまともに」の如し又「今日の君と昨の君」の如く一方は今日と讀ませ、一方は昨と讀ますは無理也。又「春の光うすき路行き」の句の如き「春の光うすき野路」としたる方趣きあるが如く思はるゝもあり。作者一段の注意を要するものあるが如し。只かへりみて我がため世をばあやまちし少女あらぬにさびしうなりぬの一首の如き自然にして情趣少からず、集中の佳作ならんか。(定價五錢)

●もやひ傘　鬼太郎著　左久良書房發行

劇評家として最も精細にして、奇抜なる觀察ある鬼太郎氏は又花柳界に藝技界の内情を巧みに描寫することに於て非凡なる技量を有す。彼の「三筋の綾」「晝夜帶」等を讀めるものは彼の觀察、彼の筆力甚だ鋭利なるものあるを拒む能はず。此篇は「ひだり褄」と「當世浮世床」の二篇より成り前者は「晝夜帶」の第二編と見るべきもの也。後者も亦輕妙の趣あれども氏の得意は矢張り前者にあるが如し。(定價五十五錢)

▲勞働論(上)　スマイルス著　内外出版協會發行

スマイルスの著「ライフ、アンド、レーボア」を竹村修氏の譯したるもの也。原著は有名なる教訓書にして譯文亦流暢明快也。完讀の上精評せん。(定價五十錢)

▲舞扇　迎塚麗水著　隆文館發行

文章の字面極めて美はしけれど、修辭の形式稍箇くさく感じ、又小説の全體も、コンストラクションに重きを置きて眞實の點少きが如きは慊らず覺ゆ。氏の理想は矢張り紀行文なるが如し。(定價七十五錢)

▲湖畔の家　齋藤弔花著　昭文館發行

隨分古くから行ける人のことゝて其筆にはなか〳〵こなれたる所もあれど、何となく時勢の進歩に伴はぬ如き感じのせらるゝ節あるは惜しし編纂期迫つてより寄贈されしことゝて未だ精讀せず、精讀の上紹介せん。

▲最新式商業の實際　濱田四郎著　博文館發兌

現在に活動せる商業界の内面の事情やら關係やらを、細大洩さず委しく說明したもので、之によつて諸種の交通機關、經濟制度の利用法の一切を會得することが出來る、即ち通信販賣法の經營法から通信銀行業、最新式の商業用機具とその利用の方法といふ樣な題目で章が分つこと十七である。實際商界に立つもの若くは立たんとするものゝ好參考書であらう(定價八十錢)

▲西洋今昔物語　吉田熊次郎著　建文館發販

趣味ある古今の西洋の物語類を集めて精細に和譯し、更に加ふるに丁寧なる脚註を以てしたもの、他國語を修むるには邦文に於けるが如く手

つ取り早くは行かぬから、興味を以て不知々々の間に悟得するところあらしめ樣としたもの、初學者に取つては有益の書と信ずる。（定價二十八錢）

▲未來の大戰

千葉秀浦 田中花浪 共著
服部書店 刊行

日露戰爭の結果、我日本國が多大の注意を以て外人の環視を受けて居ることは已に世に知れ亘つて居ることだ、特に獨逸人などは夙に黄禍說流布の本源地と見られて居るだけあつて、その猜疑心嫉妬心は一通りでない、此篇それ等の思想に胚胎し來つた幾多の紛紜を豫想し來つて、最後に英國を加へたる歐洲大同盟が日米同盟に宣戰を布告する、而かも日本の平和を愛する心、正義を重ぶ力は、白人種の弱點に乘ずることゝなさず、自ら世界平和の大團圓の盟主となつたといふに了るのだ、時節柄一讀の價がある。（定價金六十錢）

▲偉人修養の徑路

高須梅溪著
實業之日本社發行

偉人崇拜、偉人とは何ぞや、偉人の特性、偉人と時勢との關係、偉人對地勢氣候といつた樣に、その分類法から一種研究的の體裁を具へて居る、漫然偉人を偉人として崇拜し、且つ崇拜せしめんとするのではなくそれにその幾多の根據がある、修養すれば到達することの出來るといふ事を悟らしめるものだ、青年の机上の友とするに宜い。（定價金五十錢）

次號即ち戊申正月元旦に發行すべき**新年號**の如何に光彩を放つべきかは卷頭の豫告を見て知らるべし

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾五錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金拾八錢	內國金一錢	金拾九錢
		外國金六錢	金廿四錢
六冊	金壹圓	內國金六錢	金壹圓六錢
		外國金卅六錢	金壹圓卅六錢
十二冊	金壹圓九拾五錢	內國金十二錢	金二圓七錢
		外國金七十二錢	金貳圓六拾七錢

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を東京駒込と指定せられたし
一弊社は振替貯金三十四番に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられべく候
一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治四十年十一月廿八日印刷
明治四十年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

眞宗信徒生命保險株式會社

◉當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
◉當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
◉當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
◉當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限內ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
◉當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
◉當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
◉當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角 (電話 七貳貳番) **京都 本店**
東京市京橋區南植町壹番地 (電話本局五壹八番) **東京 支店**
大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) **大阪出張所**
長崎市榎津町六十五番地 (電話 七貳六番) **長崎出張所**
廣島市紙屋町(秦 忠兵衛方) (電話 六〇八番) **廣島出張所**

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一 七圓五十錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一 金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一 金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一 金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味六十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ツ組ノ部

一 金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一 金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一 金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一 金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一 金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目方正味二百卅匁付

一 定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一 文字彫刻　一字　金拾錢
一 大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同装飾品
貴金屬美術婦人小間物類同装飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商 玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）